大方町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

曽我城跡

高知西南開拓建設事業
ヤモウジ団地農地造成工事に伴う発掘調査報告書

1997.3

高知県大方町教育委員会

曽 我 城 跡

高知西南開拓建設事業
ヤモウジ団地農地造成工事に伴う発掘調査報告書

1997.3

高知県大方町教育委員会

曽我城跡全景（上空より）

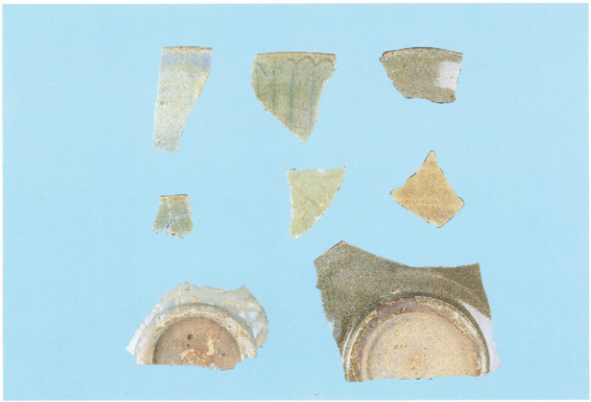
曽我城跡と前方河川・平野及び集落（上空より）

調査区全景（南より）

調査区〈尾根線～2郭〉全景（西より）

調査区〈段状部〉全景（南より）

調査区〈尾根線～2郭及び北斜面〉全景（北より）



出土遺物（青磁外面）

出土遺物（青磁内面）

序

大方町は、青い海と緑の山々の豊かな自然に囲まれた土地で、長い歴史の中で人々の生活を育んでまいりました。人々の生活の歩みは営々とその大地に刻まれ、その中で固有の文化を築き上げてきました。文化は一朝にして出来上がったものではなく、幾星霜、長い歴史と風土の中で我々の祖先のたゆまない努力と創意によって培われ生み出されたものであります。私たちは、歴史の中に生きていることを自覚し、過去に学びながら現在に働きかけ、そしてこのすばらしい自然と文化を次代に継承して行かなくてはなりません。

今回の調査資料は、周辺地域はもとより土佐の歴史を明らかにする上で重要な位置を占め、分けても全国的な城郭研究の中で15世紀後半から16世紀前半における西南四国の城郭の規模・施設・性格などを知る上で貴重な資料となりました。

報告書を刊行するに当たり、本書が学術的に多くの研究者に活用されることはもちろんのこと、残された城郭範囲と併せて地域史学習の一環として学校教育や社会教育、或いは多くの町民の方々に広く活用されることを願うところであります。また、曽我城跡の発掘調査が大方町の歴史を紐解く契機となり、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいては、より一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査・報告書作成にあたって多大なご理解とご協力を頂いた農林水産省中国四国農政局高知西南開拓建設事業所、並びにご指導頂いた高知県教育委員会・(財)高知県埋蔵文化財センターをはじめ、お世話になった関係者の皆様及び地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

大方町教育委員会
教育長　中野　結

例　言

1．本書は農林水産省中国四国農政局高知西南開拓建設事業所の委託を受けて、大方町教育委員会が実施した『曽我城跡』の発掘調査報告書である。
2．本書は、大方町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第3集である。
3．発掘調査は、高知県教育委員会の指導のもと大方町教育委員会が主体となり実施した。
4．発掘調査及び整理作業は、大方町教育委員会の依頼を受け、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜が担当した。調査体制は以下の通りである。

総　　括・・・大方町教育委員会　教育長　中野　結
調査事務・・・　　同　　社会教育課　係長　曽根省子
調 査 員・・・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　主任調査員　山崎正明
　　同　　調査補助員　武吉眞裕
　　同　　調査補助員　竹村三菜

5．発掘調査は平成7年9月25日～12月12日、平成8年7月15日～10月9日に実施した。
6．本書の執筆は山崎を中心に武吉・竹村の3人が分担した。写真撮影・編集等は山崎が行った。
7．出土遺物等の資料は、現在高知県埋蔵文化財センターで保管している。尚、遺跡の略号は「95－18SC」・「96－16SC」とし、出土遺物の注記等はこれを使用している。
8．報告書に掲載の縮尺率はそれぞれに示した。高度値は海抜高であり、方位は磁北である。
9．発掘調査全般にあたっては、農林水産省中国四国農政局高知西南開拓建設事業所及び中野結教育長をはじめ大方町教育委員会の皆様，大方町役場の方々，大方町文化財保護審議委員会の方々、地元浮鞭地区の方々或いは工事関係者には種々ご協力・ご援助を頂いた。記して感謝する次第である。
10．中井均氏（滋賀県米原町教育委員会・中世城郭談話会），池田誠氏（東京都文京区立第一中学校・中世城郭研究会）及び松田知彦氏（高知県教育委員会文化財保護室），森田尚宏氏（高知県埋蔵文化財センター第2班長）・松田直則氏（同主任調査員）には現場に来跡頂き、指導及び貴重なご教示・ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
11．発掘調査・整理作業・報告書作成等の作業においては、下記の方々の協力を得た。

〈発掘調査〉
百田進一（百田建材）　武政輝忠　田辺貞夫　米津平　田辺勝茂　松井寛郎　北川久子
松井澄子　森繁子　成子喜代子　武政松子　伊芸愛子　小野由香　岡村朋美
〈整理作業〉
岡本まみ　橋田美紀　宮地佐枝　黒岩佳子　澤本友子　岡本智子　山崎詠子

本文目次

第Ⅰ章　遺跡の紹介……1
曽我城跡要約　現地説明会資料・埋文こうち資料をもとに　用語解説……(山崎)……1
曽我城跡要約（中国語翻訳）……(武吉)……3
第Ⅱ章　調査の経過……5
第1節　調査に至る経過……(山崎)……5
第2節　調査経過……(山崎)……6
第3節　大方町の発掘調査……(山崎)……8
第4節　県下における山城の発掘調査……(竹村)……8
第Ⅲ章　環境……15
第1節　高知県の概要……(山崎)……15
第2節　大方町の概要……(山崎)……15
第3節　地理的環境……(山崎)……16
第4節　地質構造……(山崎)……17
第5節　歴史的環境……(山崎)……17
第Ⅳ章　曽我城跡の様相……27
第1節　概要……(山崎)……27
第2節　試掘調査……(山崎)……29
第Ⅴ章　本調査の成果……35
第1節　調査区の概要……(山崎)……35
第2節　調査の方法……(山崎)……35
第3節　調査区の堆積状況……(武吉)……36
第4節　遺構……(山崎)……45
第5節　遺物……(武吉)……48
第Ⅵ章　まとめ……60
第1節　曽我城跡の特色及び位置付け……(山崎)……60
第2節　遺構……(山崎)……64
第3節　遺物……(武吉)……64

挿図目次

Fig. 1　高知県及び大方町の位置図 …… 5
Fig. 2　大方町の農業に関する事業分布図 …… 5
Fig. 3　曽我城跡縄張り図 …… 6
Fig. 4　発掘調査が実施された山城の分布図 …… 8
Fig. 5　高知県の各市町村 …… 15
Fig. 6　大方町遺跡分布図 …… 19～20
Fig. 7　曽我城跡周辺地形図 …… 27
Fig. 8　曽我城跡全体図及び試掘トレンチ位置図 …… 28
Fig. 9　a－TRピット平面及び断面図 …… 31
Fig. 10　山裾部試掘トレンチセクション図 …… 32
Fig. 11　丘陵部試掘トレンチセクション図１ …… 33
Fig. 12　丘陵部試掘トレンチセクション図２ …… 34
Fig. 13　曽我城跡鳥瞰図（調査対象区） …… 35
Fig. 14　調査対象区及びグリッド設定図 …… 36
Fig. 15　調査対象区全体図 …… 37～38
Fig. 16　調査区セクション図１ …… 41～42
Fig. 17　調査区セクション図２ …… 43～44
Fig. 18　堀切断面図 …… 47
Fig. 19　土坑（SK１～３）平面及び断面図 …… 47
Fig. 20　遺物実測図１ …… 55
Fig. 21　遺物実測図２ …… 56
Fig. 22　遺物実測図３ …… 57
Fig. 23　遺物実測図４ …… 58
Fig. 24　多鉄胎を挟在する龍泉窯系白胎青磁片（試掘kTR出土） …… 66

表目次

Tab. 1　調査に関する一覧表 …… 7
Tab. 2　高知県中世城郭遺構・遺物一覧表 …… 9
Tab. 3　大方町遺跡一覧表 …… 18, 21
Tab. 4　曲輪及び平坦部計測表 …… 29

Tab. 5　a－TRピット計測表 ……31
Tab. 6　曽我城跡の堆積土壌計量表 ……40
Tab. 7　曽我城跡発掘調査の器類別出土点数対照表 ……48
Tab. 8　曽我城跡試掘調査の出土遺物観察表 ……59
Tab. 9　曽我城跡本発掘調査の出土遺物観察表 ……59

写真図版目次

巻頭図版1　曽我城跡全景（上空より）　曽我城跡と前方河川・平野及び集落（上空より）
巻頭図版2　調査区全景（南より）　調査区〈尾根線～2郭〉全景（西より）
巻頭図版3　調査区〈段状部〉全景（南より）
調査区〈尾根線～2郭及び北斜面〉全景（北より）
巻頭図版4　出土遺物（青磁外面）　出土遺物（青磁内面）

PL. 1　曽我城跡全景（北より）……1
PL. 2　曽我城跡全景（南より）……3
PL. 3　中国産龍泉窯系青磁　外面（試堀）
中国産龍泉窯系青磁　内面（試堀）
PL. 4　石製ポイント・石鏃（本発掘）　砥石（試掘，本発掘）
染付磁　外面（本発掘）　染付磁　内面（本発掘）
須恵器・中国産龍泉窯系青磁器・土錘・土師器・白磁　外面（本発掘）
須恵器・中国産龍泉窯系青磁器・土錘・土師器・白磁　内面（本発掘）
PL. 5　染付磁・赤絵磁・銅緑彩釉陶・鉄釉陶・種別不明施釉陶　外面（試掘）
染付磁・赤絵磁・銅緑彩釉陶・鉄釉陶・種別不明施釉陶　内面（試掘）
染付磁・銅緑彩磁　外面（本発掘）　染付磁・銅緑彩磁　内面（本発掘）
鉄釉陶　外面（本発掘）　鉄釉陶　内面（本発掘）
PL. 6　屋根線調査前遠景（南より）　屋根線調査前遠景（北より）
平坦部及び段状部調査前（東より）　2郭南の平坦面調査前（西より）
2郭調査前（西より）　堀切調査前（南より）
PL. 7　尾根線～2郭調査状況（西より）　2郭～尾根線調査状況（東より）
平坦部及び段状部調査状況（南東より）　平場状遺構B　西端部調査状況（東より）
調査区全景（西より）　調査区全景（上空より）
PL. 8　調査前遠景（東より）　山裾部調査前（試堀）
山裾部トレンチ掘削状況（試堀）　山裾A・Bトレンチ完掘（試堀）

1郭（a）トレンチ設定（試掘）　土塁残存状況
3郭・4郭（f・g）トレンチ設定（試掘）　1郭（c）トレンチ完掘（試掘）
PL. 9　1郭（a）トレンチ完掘，ピット検出（試掘）　ピット内遺物出土状況（試掘）
3郭（f）トレンチ礫検出状況（試掘）　遺物出土状況（試掘）
平坦部5（i）トレンチ完掘（試掘）　平坦部7～8（j）トレンチ完掘（試掘）
1郭土塁（d）トレンチ完掘（試掘）　1郭土塁（d）トレンチ完掘（試掘）
PL. 10　段状部先行トレンチ完掘（南より）　段状部先行トレンチ完掘（東より）
段状部先行トレンチ完掘（西より）　段状部調査状況（西より）
平坦部1調査状況（南より）　平坦部1南北ベルト（東より）
2郭南の調査区南端壁面（北より）　2郭南の調査区南端壁面（北より）
PL. 11　段状部完掘状況（南西より）　平坦部・段状部及び2郭調査状況（1）
平坦部・段状部及び2郭調査状況（2）　平坦部1～4（東より）
平坦部1～4（北西より）　2郭南斜面上部中央ベルト（西より）
土錘出土状況　尾根線先端及び2郭調査状況（西より）
PL. 12　堀切調査前遠景（南より）　堀切調査前近景（南より）
堀切調査状況（1）　堀切調査状況（2）
堀切調査状況（3）　堀切調査状況（4）
堀切完掘（南より）　堀切西の尾根線先端完掘（南より）
PL. 13　堀切北斜面部調査状況（1）　堀切北斜面部調査状況（2）
堀切北斜面部調査状況（3）　堀切北斜面部調査状況（4）
堀切北斜面部調査状況（5）　堀切北斜面部調査状況（6）
堀切北斜面部調査状況（7）　堀切北斜面部調査状況（8）
PL. 14　SK-2　半截状況　SK-2・3　完掘
SK-1　半截状況　SK-1　完掘
2郭南斜面調査状況（1）　2郭南斜面調査状況（2）
2郭南斜面調査状況（3）　2郭南斜面調査状況（4）
PL. 15　2郭南斜面調査状況（5）　2郭南斜面調査状況（6）
2郭南斜面堆積状況（1）　2郭南斜面堆積状況（2）
2郭南斜面堆積状況（3）　2郭南斜面堆積状況（4）
2郭南斜面溝状遺構（1）　2郭南斜面溝状遺構（2）
PL. 16　平坦部調査風景（1）　平坦部調査風景（2）
平坦部調査風景（3）　平坦部調査風景（4）
平坦部調査風景（5）　平坦部調査風景（6）
2郭南斜面部作業風景（1）　水道管除去作業
PL. 17　2郭北部斜面部作業風景（西より）　堀切部調査風景（南より）
北斜面部調査風景（東より）　堀切北斜面部調査風景（1）

設置ベルト撤去作業　　堀切北斜面部調査風景（2）
2郭南斜面部調査風景（2）　　2郭南斜面部調査風景（3）
PL. 18　2郭南斜面部調査風景（4）　　2郭南斜面部調査風景（5）
段状部（1）　　平坦部（1）
現地説明会風景　　平坦部（2）
発掘調査参加者（1）　　発掘調査参加者（2）

第Ⅰ章　遺跡の紹介

PL.1　曽我城跡全景（北より）

（曽我城跡要約）　現地説明会資料・埋文こうちをもとに

「城」というと、通常は江戸時代につくられた天守閣や石垣をもった、近世城郭をイメージしがちです。織田信長・豊臣秀吉の時代に花咲いた、新鮮かつ豪華を象徴する桃山文化を代表するものに城郭建築があります。この時代の城郭は、軍事施設としての性格とともに、大名の住居・政庁を兼ね備えたものとなり、安土城や大坂城など城主の勢威を示す雄大なものです。この織豊系城郭と呼ばれるものが城郭史上大きな画期となり、近世城郭へと移り変わって行きます。しかし、「城」と言う字は「土」と「成」で構成されているように、本来は土を盛った障壁構築施設です。（中世城郭）。「山城に立て篭る」という言葉が示すように、城は本来敵の攻撃に備えて山に立て篭り、そこで戦いを行うことを目的としています。そして防戦しながら、自分達の縄張りに上手く引き込んで敵を撃つという、様々な工夫を凝らした防御施設を備えています。その主要なものが「曲輪」・「堀」・「土塁」です。

曽我城跡は、大方町浮鞭に所在します。湊川下流の右岸に向かって、丘陵の一部が細長く派生した尾根の先端に立地しています。標高45mの詰からは、前方の集落や河川に対して展望が大きく開けており、この地取りが曽我城跡立地の目的を示しているように考えられます。つまり、在地豪族が最後の砦として「山城に立て篭る」といった性格よりも、地域の主要人物が「河川を見張る」といった機能を持っているように思えてなりません。このことは、前方を流れる湊川に「みなと」名がつく事や、対岸に残る「タタラ」・「ヤシキ」名の存在等，周辺の歴史地理的側面からのアプローチからも窺えます。更に古代の窯跡が立地している点や、南北朝期における後醍醐天皇の第一皇子である尊良親王を支えた大平弾正の拠点地が同じ流域に存在する事などを考え合わせると、当遺跡周辺は城が形成される以前から、西南四国における政治・経済上重要な地域であった事を知ることができます。湊川は、交通・物流の大動脈であり、築城期においてこれを抑え、監視する必要性は言うまでもありません。また山城そのものが、周辺地域に対する権威の象徴であったのかも知れません。曽我城跡は自然地形を利用しつつ、防御施設を縄張りの中に多く組み込む事によって、山城としての効果を最大限にあげています。両サイドの谷幅は広いうえに谷の奥深くまで入り込んでおり、自然の堀としての役割があります。詰を中心として多く構築された曲輪，或は尾根をV字形

に遮断した堀切や土を高く盛った土塁などの各遺構は、全て敵からの防御を意識してつくられたものです。今回の調査は、通常、敵が侵入してくると言われる尾根線に重点を置いて行いました。この防御ラインは幅が狭く、しかも尾根に段差を持たすことで更に機能効果をあげています。この効果によって多勢が一気に尾根上を攻め込むことができず、言い換えれば一本の橋の上を通る様な状況を生み出しており敵を撃つ事が容易になっています。その一方で、南側谷部に対しても防御・権威の意識を強く注いでいるようです。今後検討の余地を残すものの、雛壇状遺構という見方も出来ます。曽我城跡は調査の結果、15世紀後半から16世紀前半の山城であることが確認されました。この時期には、県西部において一定の築城パターンでつくられた城が幾つか存在するようです。しかも同一規模であり、河川の側という立地条件や短命で地検帳に記載が少ない事も一致します。その規則性の背後には地域の中心人物と政治勢力の存在が考えられます。時期的に長宗我部氏まで下らず、当時のこの地域で広範囲に勢力を及ぼせる者は、土佐一条氏ではないでしょうか。

用語解説

城（しろ）：漢語本来の字義としては、土を盛り重ねた城壁（則ち居住区を囲む土塁壁）を指し、日本では、防衛用の構築物全体に当てる。

山城（やましろ）：山の険しい地形を防衛に利用して、山上に構築した城。

縄張り（なわばり）：築城の平面プランを指す名称であり、築城に際して縄を張り巡らした施法に由来する。

郭（くるわ）：漢語本来の字義としては、邑（くに）の外周を囲う城壁を指し、日本では、進入の困難な形状に構築して区画した城の平坦面に当て、「曲輪」とも表記する。

土塁（どるい）：土を盛って築いた防衛用の障壁を指す。

詰（つめ）：郭（曲輪）のうち、防衛上最後の拠点として区画された主郭を指す。

虎口（こぐち）：城郭の出入口に当たり、攻防の機能を発揮する工夫が凝らされる。「小口」とも表記する。

堀切（ほりきり）：一般に、山城の稜線部を険しく掘削して、敵勢の侵攻阻止を図る構築施設を指す。

竪堀（たてぼり）：山城の斜面部において、敵勢の横方向の移動を遮断する目的で掘削した竪状の堀を指す。

土橋（どばし）：堀の一部を掘り残して、後方の虎口と連結させた橋形の通路。

遗址简绍 （『遺跡の紹介』中国語訳）

曾我城遗址概貌　　现场说明会小册子和《埋文高知》摘要

PL.2　曾我城跡全景（南より）

说起“城”，大多数日本人很容易联想到江户时代建筑的具备所谓“天守阁”（城楼）和“石垣”（石墙）的近世型城堡。在织田信长和他部将丰臣秀吉相继登台而急速集权的趋势之下眼花缭乱一时的桃山文化里，城堡建筑就是最具其代表性的产物，它已不止军事设施的性格之范围内，并具有诸侯的居邸和政厅在其内；正如安土城和大阪城等都有十分夸耀城主权势的雄大规模。这种“织丰系城郭”即是近世型城郭出现的嗝矢，它在日本城郭史上是有划出一个新时代的重大意义。“城”字由“土”字和“成”字而成，他本来指的是以土堆盛的防墙，而在中世纪末以前之日本城郭防墙，除少例外的都正是如此，又如“固守山城”的惯用语表明，施有遮击敌人的各种工事。这些工事主要有“曲轮”（或写“郭”，修成较广平地的城内地段）、“堀”（壕）、“土垒”（垒壁）等等。

曾我城遗址位于高知县大方町浮鞭的一支丘陵脊端上，那里地势临近凑川右岸。站着海拔 45 公尺的“诘”（一般指城郭之最高地段的修平地，是土佐土语之一）遗迹，对前面集落和凑川眺望得很阔，而此类地理条件好象暗示着筑城布局目的所在处；那就可考此城的首要作用不在于土豪一堂之据此死守，而是在于当地主导人物之监视水上交通往来。这种景象，又从周围地区历史地理角度上来看也可窥见其一端；例如，有“凑川”名义和对岸地区的“多田罗”（表示铁矿砂炼铁“蹈鞴”的片假名）、“屋敷”（指“宅邸”或“公馆”）等古色地名传世。此外，附近还有几基古代陶窑埋在地下；也有关于南北朝分裂动乱的历史故事，是当时有个土豪领袖名叫大平弹正，他曾拥护着南朝后醍醐天皇长子尊良亲王而割据在凑川流域的。由此可见，城址周围一带是在筑城以前已成为四国西南部的重要政经地区之一。凑川历久交通和流通的干线，到了筑城时期，严格监视和确实保住它就是决定存亡的关键条件。与此同时，凭借山脊的“山城”对附近村落也许有了威严作用。站在曾我城址，可以看出，它作为一个“山城”，以利用天然山势而布局不少工事来得到了最大防御效果。城址两下侧的山

谷都较宽阔而深邃，可以自然地起城壕的作用。以“诘”为中心平整的不少块“曲轮”和开凿深呈V字状剖面的“堀切”（开凿于山脊棱线的竖条防壕）以及把土堆高的“土垒”等各种遗迹，都是防备敌势来攻而筑的。这次调查发掘的重点对象在于其山脊部分，就是“山城”一般之被认为最易于招进攻的地方。在这险隘地形上挖削出几段梯田状工事，以更加防御效果。即使有了敌势沿着山脊棱线侵来，他们到此好象强行突破一座窄桥一样地不能一口气攻下去，反而易于被打败。转向而视南面，筑城者对其山谷部分可能有严加警备和威压的意图。就在南侧山坡遗存的梯状人工地形而言，近几年来也有一部分看法当做所谓“雏段状”遗迹，但待今后之慎重研究和讨论。调查结果表明，本遗址是从十五世纪后叶到十六世纪前叶之间发挥作用的一座山城遗迹。与此同时期，在县内西部地区可推有些带有相似因素的山城，都临近河川，不但有近似规模，而且属于同样的筑城类型，加之使用期间都较短，也都缺少“地检帐”记载。在此类符合性的幕后，可以窥视当时其势及于当地的某一领主门第和以其为中心的军政势力的存在；那也许可以推断为土佐一条氏。

用 语 简 说

城：汉语“城”字原义为盛土之防墙，而日语“城”字字义在历史过程中转化为军事据点的构筑总体。其重点从中世纪战国时代末期起开始渐移到以石墙围绕的城楼，城下有武士阶层及工商和农渔民住区。

山城：以利天然山险而在其上筑的军事据点。

绳张：筑城的平面设计；其词源在于用绳纲来划区土地的起工法。

郭：汉语“郭”字原义为“邑”的围墙，而日语“郭”字字义还在历史过程中转化为其布局形状难以进攻的几层平整地，又写“曲轮”。

土垒：以土堆盛的防墙。

诘：土佐土语之一，是指几层“郭”中最重要的死守之处。

虎口：指所谓“城郭”的出入口，设有利于攻防两方面的巧妙工事；词源或许在于《庄子·盗跖》中“几不免虎口哉”之句。

堀切：以阻塞敌势来攻为目的，开凿于山脊棱线的险深防壕。

竖堀：以截断敌势横进为目的来挖深的竖条防壕。

土桥：挖壕时有意识地留下之桥状狭隘通路。

第Ⅱ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

時は21世紀を迎えようとしている。社会の在り方も多様化して、現代社会の抱える諸問題は年を追うごとに深刻化している。農業問題もその一つであり、農業だけの分野に留まらず多くの事項と関わり複雑な様相を呈している。農業は、生活必需品である食料の生産に関係する産業である。まさに人類社会の維持・発展に欠かせないものであり、形態や内容が歴史の中で様々に変化しながらも、生存のために必要な物資を自然の中から産み出して、その生産物を消費してきた。それらの活動の中で社会が成り立っている。

Fig.1　高知県及び大方町の位置図

近年の日本農業は、土地改良事業や耕地の交換分合，湿潤排水事業が各地で行われ、農業の機械化や農業技術の改善が進んできた。しかし、その一方で人口の都市集中化現象や第１次産業人口の低下といった人口問題と相俟って、兼業化・高齢化及び後継者不足、或いは狭い耕地面積による零細経営、更には低下する食料自給率や貿易関係等さまざまな諸問題を抱えている。このような諸問題やその影響は、農業が町の主要産業を占める地方の自治体では特に深刻な問題であり、大方町においても例外ではない。これらの対策に取り組むことが行政や町民に課せられた大きな責務の一つであり、それぞれの立場で懸命に活性化に取り組んでいる。

Fig.2　大方町の農業に関する事業分布図

今回、大方町浮縄地内において、ヤモウジ団地農地造成工事が計画された。農林水産省中国四国農政局高知西南開拓建設事業所（以下、事業所）では、高知県西南部に位置する中村市・土佐清水市・大方町・大月町・三原村に跨る地域を農地開発事業の対象地としている。この地域は、多種多様な作目によって営農が行われているものの、経営規模が零細な上に基盤整備の遅れも重なって安定した農業経営ができていないとして、未利用山林原野を開発した造成農地面積841ヘクタール、

周辺の既畑及び水田の区画整理面積325ヘクタールを一体的に開発する計画である。また、畑地造成にあたっては、農業道路の整備・用排水路の設置・侵食防止に対する処置の他、整地や区画整備・土壌性質の対応等が必要であり、非常に大きな事業となっている。事業所では、その農地開発の目的を「農地開発事業は、未利用の山林原野から新たな農地を造成し、生産性の高い近代的なほ場（農地）をつくる事業です。そして、この新しい農地を通じて夢のある農業経営と豊かで実りの多い農村の建設、さらに地域経済の振興を目指し、国民食料の安定供給に役立てることを目的としています。」「地域の特徴である温暖な気候を利用した農業を展開し、農業生産の向上と経営の安定拡大及び中核農家育成を図るものである。」としている。

今回の事業計画範囲内には、すでに周知の埋蔵文化財包蔵地が存在していた。曽我城跡は中世の山城として知られ、大方町の貴重な文化財産でもある。かかる事業計画について、大方町教育委員会・高知県教育委員会は文化財保護の立場から、事業所と数年にわたり度重なる協議を積み重ねてきた。計画範囲においては、極力遺跡を避ける事を要請すると共に、遺跡内が計画地内に入る場合は記録保存のための緊急発掘調査が必要であり、埋蔵文化財に対する理解と協力を求めた。事前の試掘調査により、一定範囲において遺跡の残存状況が十分であると判断された。しかし本事業の大幅な変更はすでに不可能であり、かつ事態は急を要する状況であった。そこで事業所と保護部局が協議のもと、大方町教育委員会が主体となって記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。尚、発掘調査に際しては大方町教育委員会の依頼を受け、高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員が派遣されることになった。

第２節　調査経過

１．試掘調査

平成６年10月17日から12月27日にかけて試掘調査が実施された。当初は、曽我城跡に関する基礎資料が皆無に近く、ただ単に丘陵上に幾つかの曲輪と堀切が１条確認されているのみであった。また、山城東側の山裾部分と湊川との間には平坦地が広がり、城と土居の関連及び一体性が想定された。丘陵部と山裾平坦部を合わせた調査対象面積は約18,950㎡と膨大なものであ

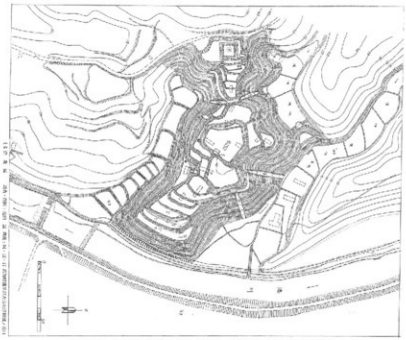


Fig.3　曽我城跡縄張り図（池田誠氏の作図）

り、且つその性格・内容などを知り得ることが不可能であった。そこで、試掘調査によって遺構・遺物の検出及びそれに伴う所謂山城の縄張り範囲や残り具合、更にはその性格・深度・作業量や掘削土量の見通しに至るまでの本調査に向けてのあらゆる情報を得ることとした。調査は丘陵部と谷部に数箇所の試掘トレンチを設定して重機及び人力で進められた。また、城郭研究が専門分野である池田誠氏を迎え、縄張り図（表面観察）を依頼すると共に城郭の側からの助言を頂いた。試掘調査の事前及び調査中には丘陵部の主要な部分について、業者による樹木の伐採がなされた。試掘調査終了後には、「曽我城跡発掘調査概要報告書1995」[注2]が刊行された。

年　度	平成6年度	平成7年度	平成8年度
調査期間	H6 10/17～12/27	H7 9/25～12/12	H8 7/15～10/9
調査担当者	調査員　山崎 正明	調査員　山崎 正明	調査員　山崎 正明
	調査補助員　竹村 三栄	調査補助員　武吉 眞裕	調査補助員　武吉 眞裕
		同　竹村 三栄	同　竹村 三栄
調査対象面積	18,950㎡	7,082㎡	7,082㎡
発掘調査面積	384㎡	1081㎡	2,335㎡
備　考	試掘調査	本調査	本調査

Tab.1　調査に関する一覧表

2．本調査

試掘調査の結果、山裾平坦部についての本調査の必要性はなくなったが、丘陵上での遺構・遺物及び城の縄張り範囲の残存状況は良好であり、約7,082㎡の対象地が明確となった。その後の協議後、工事計画の変更がなされ、曽我城跡堀切中央部以東の主要な部分は工事対象地から外れることとなった。しかしながら、堀切部以西の縄張り範囲は曽我城跡の防御施設の在り方を知る上で欠かせないものであり、計画工区において影響を受ける場所及び遺構等の関連による必要性が考えられる箇所について、全面発掘調査を実施することとなった。平成7年9月25日から本調査が始められ、一定範囲について成果を収めたものの、調査途中で山道沿いに水道管が埋設されていることが判明し、調査を中断することを余儀なくされた。水道管の移設工事には一定の時間を要し、調査再開は平成8年7月15日であった。調査対象区の大半を占める斜面部の調査では多くの困難を要したが、重機及び人力の併用によって何とかクリアーすることができた。調査完了は平成8年10月9日であった。調査終了後に航空測量を行い、10月18日，19日の両日には記者発表・現地説明会をそれぞれ実施して全日程を終了した。尚、調査期間中には滋賀県米原町教育委員会に派遣依頼を申請し、中世城郭に詳しい中井均氏に来跡頂いた。中井氏には現場指導及び貴重な助言を賜った。

第3節　大方町の発掘調査

大方町の埋蔵文化財発掘調査例としては、竹シマツ遺跡・宮崎遺跡（昭和63年度），早咲遺跡（平成元年～2年度）を挙げることができる。何れも高知県中村土木事務所の依頼を受けて大方町教育委員会が主体となり調査を実施しているが、分けても廣田佳久氏（現高知県埋蔵文化財センター調査第4班長）の調査・研究に資するところが大きい。竹シマツ遺跡・宮崎遺跡は大方町加持に所在

している。前者は古墳時代後期の竪穴住居址や土坑が検出されており、後者は平安時代前期（9世紀後半）の官衙関連遺跡に位置付けられている。一方、大方町早咲に所在する早咲遺跡からは、弥生時代後期後半から古墳時代後期の資料が遺構に伴い多量に得られている。この他にも確認調査（試掘調査）を7遺跡で実施しているようである。詳しいことは解らないが、高知西南国営農地開拓事業に関連するものが5遺跡，県営圃場整備事業に関連するものが1遺跡，団体営による農業改善事業に伴うものが1遺跡であり、これらは本調査には至っていない。

上記の発掘調査例が示すように、昭和61年度から高知県教育委員会によって実施された遺跡詳細分布調査が契機となり、埋蔵文化財に対する認識が高まって来たようである。また現在、県下では高知空港や高速道路関係などに伴う大規模発掘調査がピークに達している。しかしながら、高知県内各市町村における埋蔵文化財調査体制は十分なものとは言えず、各種開発に伴う調査体制の充実が急務となっている。

第4節　県下における山城の発掘調査

近年大規模な開発等により発掘調査が高知県下各地でおこなわれている。曽我城をはじめ、中世の山城を中心とする城跡の調査も多く行われ、それに伴う研究も精力的に行われている。ここでは高知県下における城跡として、近年発掘調査された主要な城跡を取上げ、概要を大まかではあるが述べていきたい。各城跡から検出された遺構・遺物については別添の表を参照されたい。

1. 高柳土居城跡

HG

高知平野北東部の香美郡土佐山田町字ニノヘイに所在し、物部川右岸、舟入川西沿いの微高地に立地する中世城館である。現況は水田及び墓地である。南辺と東辺を欠いているが[字型の土塁と詰部が残存している。周辺には中世の遺構・遺物を検出した高柳遺跡が隣接している。西方向には弥生中期後半～末、古墳から古代に属する原遺跡、弥生中期後半～中世の原南遺跡、稲荷前遺跡、古代と戦国時代の掘立柱建物跡を検出した楠目遺跡等、弥生から中世における遺跡が多く存在している。調査は県営圃場整備事業に伴い平成2年に行われた。本城館周辺を対象にトレンチ調査を実施した結果、外堀・内堀の一部を検出し、二重の堀を巡らした城館跡であっ

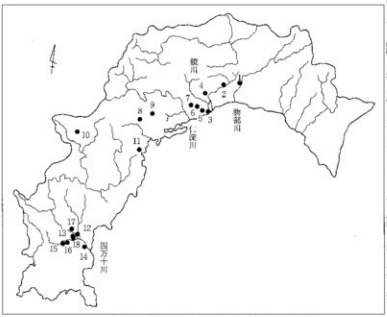


Fig.4　発掘調査が実施された山城の分布図

	遺跡名	所在地	検出遺構	出土遺物	調査年月日
1	高樽土居城跡	香美郡土佐山田町字ニノヘイ	堀（濠）・石列・濠	土師質土器	1988・1990年
2	岡豊城跡	南国市岡豊町八幡字岡豊山	礎石建物跡・礎石列・土坑 集石・円形粘土遺構・土塁 石敷遺構・溝・井戸・堀切	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・瓦質土器・土製品 石製品・金属製品・瓦	1985～90年
3	浦戸城跡	高知市浦戸字城山830-16	石垣	瓦	1993年
4	高知城跡	高知市丸の内1-2	柱穴	土師質土器・貿易陶磁器 瓦質土器	1993・94年
5	芳原城跡	吾川郡春野町芳原	掘立柱建物跡・土坑・溝跡 礫列跡・基壇状遺構・柱穴 土塁状遺構・虎口・堀切	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・土製品・木製品 石製品・金属製品	1983 1990～92年
6	木塚城跡	吾川郡春野町西分長谷		土師質土器	1984年
7	吉良城跡	吾川郡春野町弘岡大谷	石垣遺構・石組遺構 土塁状遺構・柱穴	土師質土器・瓦質土器・土製品 貿易陶磁器・石製品	1984～86年
8	姫野々城跡	高岡郡葉山村姫野々字木城	礎石建物跡・掘立柱建物跡 石垣遺構・石積遺構 溜枡遺構・柱穴	土師質土器・貿易陶磁器 瓦質土器・国産陶器・金属製品 石製品・銅銭・瓦	1994～95年
9	二ノ部城跡	高岡郡佐川町西組字二ノ部	堀	国産陶器（備前）	1993年
10	和田城跡	高岡郡窪川町西踏字宮背	掘立柱建物跡・小鍛冶跡・堀切 石垣・土塁・堀切・土坑	土師質土器・貿易陶磁器 瓦質土器・土製品・鉄製品 銅銭・瓦	1988年
11	久礼城跡	高岡郡中土佐町久礼	礎石建物跡・土塁	土師質土器・貿易陶磁器・鉄製品	1983年
12	中村城跡	中村市字古城山・為松山	掘立柱建物跡・集石遺構・石垣 礫石建物跡・溝跡・土塁・虎口 基壇状地形・堀切・土坑・竪堀	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・瓦質土器・石製品 土製品・銅銭・瓦	1983年
13	荊城跡	中村市具同字ミノコシ字荊城	堀切・溝跡・段状遺構 通路遺構・掘立柱建物跡 柱穴・礫列・土坑	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・土製品 金属製品・銅銭・瓦	1991年
14	チシ古城跡	中村市実崎字シロヤマ1407		土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器	1991年
15	ハナノシロ城跡	中村市江の村字ハナノシロ	掘立柱建物跡・土坑・礫列 郭状遺構・竪切状遺構 虎口状遺構・集石	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・石製品 金属製品	1992年
16	江ノ古城跡	中村市江の村エノジョウ	掘立柱建物跡・土坑・柱穴	土師質土器・貿易陶磁器 土製品・石製品	1992年
17	窪塚城跡	中村市川登字コエト山 字横ジリ山	柱穴・集石墓	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・石製品・銅製品	1986年
18	栗本城跡	中村市具同字栗本城	溝状遺構・土坑・柱穴	土師質土器・貿易陶磁器 国産陶器・石製品・土製品	1985年

Tab.2　高知県中世城郭遺構・遺物一覧表

たと考えられている。遺物は土師質土器をはじめ15世紀後半と16世紀前半に機能していたと考えられるものが出土している。

2. 岡豊城跡

注6

県中央部の南国市岡豊町八幡に位置する国分川右岸の標高97mを測る岡豊山に構築された長宗我部氏の居城として著名な城跡である。城跡の所在する地域は古代から土佐国の中心地であり、西側には土佐国府跡、土佐国分寺跡が立地している。また周辺には久礼田城跡、新城城跡、亀谷城跡等の多くの中世城郭が点在している。城跡は山頂部を主郭として、「伝厩跡曲輪」と「伝家老屋敷曲輪」の２ヶ所の副郭部からなる連立式の構造をもつ山城である。調査は県立歴史民俗資料館建設に伴う城跡の整備・保存のため昭和60年から6ヶ年に亘り調査が実施され、詰、三ノ段、四ノ段を中心に礎石建物跡、石垣等の貴重な遺構が検出されている。遺物は注目されるものとしては天正３年銘の丸瓦が出土しており、その他土師質土器、青磁・白磁をはじめ多数出土している。遺物の時期等からは15世紀後半から16世紀後半（大高坂に移城するまで）まで機能していたと考えられている。

3. 浦戸城跡

注7

高知市南端部の浦戸字城山に所在し、浦戸湾口の西から東方向に突出した半島の丘陵上に立地している長宗我部氏最後の城跡である。標高50m前後を測る東西にのびた尾根上に形成されており、南側は太平洋に囲まれ、東下方には観光地として有名な桂浜を見下ろすことができる。城跡の北下方には浦戸城下町遺跡、北西には長浜城跡、北側の対岸には種崎城跡が立地しており、周辺には城下町が形成されていたと考えられている。調査は平成3年に坂本龍馬記念館建設に伴い西側尾根部分の立会調査をおこなった。また平成5年には国民宿舎桂浜荘の改築工事に伴い、城跡の東側の発掘が行われ、詰の東限及び東出丸を区画する石垣群が検出されている。出土遺物は両調査とも瓦が出土しており、鯱の破片も一部みられる。

4. 高知城跡

注8

高知市市街地中央に位置する標高42.8mを測る大高坂山に所在する高知県のシンボル的城跡である。慶長5年の山内一豊入国後現在の高知城は構築されるが、以前の南北朝時代には大高坂氏による大高坂城と長宗我部氏による築城がなされている。長宗我部氏に関しては天正16年（1588）に岡豊城から移城しているが、すぐに浦戸城に居城を移している。周辺には尾戸窯跡や弘人屋敷跡等近世の遺跡が点在している。城跡内に建設された市立動物園移転後の史跡整備のため、平成5年から２ヶ年に亘り調査が行われている。動物園建設地は伝御台所屋敷に相当し、調査の結果Ⅲ区とした調査区からは15世紀から16世紀代の遺物を伴う柱穴が検出されており、近世城郭の高知城だけでなく、戦国期の城跡としての位置付けが今後期待される城跡である。

5. 芳原城跡

注9

高知市の西側に隣接する吾川郡春野町芳原に所在し、吾南平野中央部の標高32mを測る独立丘陵

上に立地する城跡である。春野町においては山城が19城跡確認されており、本城跡の北側には拾ヶ森城が隣接し、北西方向約2kmには木塚城跡が立地している。また西側には縄文から古墳時代の様相を明らかにした西分増井遺跡等が散在している。『南路志』には古城の北に拾ヶ森があると言う記載があり、地形・立地からみると古城が本城であると考えられる。また城主としては片山氏、芳原氏、朝野氏等の名が記載されている。昭和58年には城跡周辺の圃場整備に伴い、周辺の堀状地形の調査が行われ、明応2年の紀年銘の護符をはじめとする良好な木製品が多数出土している。その後ハウス栽培を目的とする開発が再度行われることとなり、城跡の発掘調査が行われた。発掘は5次調査まで行われ良好な遺構が検出されている。また城跡内におけるホノギが残っており、検出した遺構と合致する部分が多いなど良好な資料を提示できる。また土師質土器、青磁などの遺物が数多く出土しており、15世紀後半から16世紀中頃前後を中心に機能していたと考えられている。

6. 木塚城跡
(史10)

高知平野西端の吾川郡春野町西分長谷に所在する標高39mを測る独立丘陵上に立地する城跡である。城跡の南東には芳原城跡、南には秋山城跡が所在している。長宗我部地検帳では「木津賀古城」と記載されている。また『土佐州郡志』には城主として木塚左衛門の名がみられる。調査は城跡の斜面部が県道の拡幅工事により削平されるために、城跡の縄張りと工事部分の発掘が行われた。

7. 吉良城跡
(史11)

高知平野西端の吾川郡春野町弘岡上に所在する戦国時代土佐の七守護といわれ、周辺一帯を治めた吉良氏の居城である。仁淀川東部の丘陵上に築かれ、標高111.2mを測る北嶺と111.5mの南嶺と呼ばれる平坦面から構成された県内でも大規模な城跡である。現況では北嶺を中心に遺構が残存している。天文9年（1540）に吉良氏は本山氏によって滅ぼされるが、その後は本山氏も長宗我部氏によって討伐され、周辺は長宗我部氏により統一される。調査は、町指定史跡である城跡の今後の保存方策検討を目的として、昭和59年から5ヶ年に亘り調査がなされている。59年には詰部分、60年には城跡の西傾谷部に立地する「土居の谷」地区の一部、61年には「大谷地区」の調査が行われ、石垣遺構・石組遺構等、戦国時代に構築された遺構が検出されている。

8. 姫野々城跡
(史12)

県中央部の高岡郡葉山村姫野々に所在し、新荘川中流域左岸の標高192mを測る小山丘上に立地する。築城年代は不明であるが、城跡の南下方には津野土居跡が広がっており、この地域一帯を支配し土佐の七守護のいわれた津野氏の居城と考えられている。また南北朝時代の城であったと推察されている。城跡周辺には土居跡をはじめ、新土居城跡、繁国寺跡、葉山本村遺跡等中世の遺跡が数多く散在する。調査は城跡の歴史景観を生かした公園整備計画のもとに平成6・7年の2ヶ年に亘り事前の発掘が行われる運びとなった。トレンチによる調査であったが、礎石建物跡、堀切状遺構等の良好な遺構、土師質土器をはじめ青磁・白磁等の貿易陶磁器が県内の城跡の中ではまとまって出土しており今後注目される。

9. 二ノ部城跡

[注13]

県の北西部高岡郡佐川町斗賀野に所在し、斗賀野盆地中央部を流れる伏尾川右岸の独立丘陵上に立地する城跡である。北西には溝に囲まれた屋敷跡が確認された岩井口遺跡、南には弥生時代後期後半から終末の集落跡等を確認した二ノ部遺跡が隣接している。また斗賀野地区には二ノ部城跡の他に伏尾城跡、木除山城跡が所在する。城跡の周辺には水田が広っており、堀跡の存在が考えられていたが平成5年に圃場整備が行われることとなり、トレンチによる調査を実施した。限定された調査区のため堀跡と考えられる遺構は検出されなかったが、当時の基底面と思われる層からは15世紀代の遺物が確認されている。この時期には堀の形状を呈していたと考えられている。

10. 和田城跡

[注14]

愛媛県との県境に位置する高岡郡梼原町を流れる梼原川右岸、標高436mを測る独立丘陵上に構築されている。城跡の北方向を流れる川を自然の堀として利用しており、防御的にも優れた立地場所にある。川を挟んだ東側には土佐の七守護として著名な津野氏の居城と考えられ、町内では最大規模の梼原城跡が存在する。また周辺には岡之城跡、鷲ヶ森城跡をはじめ中世城郭が点在している。築城年代などについては不詳であるが、伝承では梼原城の支城であったと伝えられている。

梼原町は風水害と雪害による被害が多く、急傾斜地である和田城跡も危険箇所として指定されている。昭和63年には急傾斜崩壊対策事業計画のもと、城跡が大幅に削平されることとなり、事前の発掘調査が行われた。本城は3ヶ所の平坦部を形成しており、2郭とされた曲輪を中心に掘立柱建物跡、堀切、土塁等の遺構が配置されている。出土遺物からは津野氏が支配した15世紀中頃から後半の時期と、その後長宗我部氏が入城し再構築したと思われる16世紀後半の2時期に機能していたと考えられている。

11. 久礼城跡

[注15]

高岡郡中土佐町久礼に所在する。JR土讃線久礼駅の西方向の標高103.5mを測る丘陵上に立地する。城跡の北方向には久礼湾に注ぐ久礼川の支流である長沢川が流れ、自然の堀の役割も兼ね備えている。東側の山裾には町並が広がっており、「土居」のホノギが残る。『土佐国古城略史』に久礼城が記載されており、城主には佐竹氏の名がみられるが築城年代については不明である。戦国時代には一条氏の配下に入るが、その後長宗我部氏の勢力拡大とともに門下に降っている。調査は城跡の縄張り確認をはじめとし、昭和46年から実施されている。昭和58年には発掘調査が詰の1400m²を対象に行われ、礎石建物跡など良好な遺構が検出され、詰の両端部に建物を配置する構造をもつ城であることが確認されている。土師質土器、染付等の遺物が出土しており、16世紀後半まで城跡は機能していたと考えられている。

12. 中村城跡

[注16]

県西部の中心地中村市に所在する。中村市街地の北西方向標高100～120mを測る古城山に立地し、南西方向には四万十川、北東方向には支流である後川が流れており、この両河川を望む位置に構築

されている。長宗我部地検帳には「今城」「御城」「為松城」「中ノ森」「東城」の複数の城跡の名称が記されている。中村（幡多荘）は九条家から一条家に譲渡された所領であり、応仁の乱で戦火を逃れ、幡多に居を置いた一条氏は公家大名として頭角を現し、現在の市街地に館を形成したと考えられている。その後は土佐国を統一した長宗我部氏、替わって慶長6年には土佐国主となった山内一豊が入国し、弟康豊を中村城主として入城させている。しかし、一国一城令により城跡は廃城となり、現在は公園化され桜の名所として知られている。調査は防災工事に伴う宅地造成工事のため昭和58年に詰・二ノ堀・今城の三ヶ所で実施され、詰では基壇状地形、礎石建物跡、今城では掘立柱建物跡など良好な遺構が検出されている。また土師質土器、青磁・白磁、瓦をはじめとする遺物からは16世紀中頃に機能していたと思われ、長宗我部氏統一時に大幅な城跡の改築がなされた可能性が強いと考えられている。

13. 扇城跡[注17]

県西部の中村市に所在し、四万十川の支流である中筋川北部の標高55mを測る丘陵上に立地する。同尾根の南方向には、長宗我部氏に土佐国を追われた一条氏が天正３年（1575）の渡川合戦の際に陣を張ったと考えられる栗本城跡、同尾根の西方向にはナリカド城跡が立地している。天正17年に行われた長宗我部氏による地検帳では「古城」と記載されており、この段階では既に廃城となっている。調査は宅地拡張造成工事により城跡全体が削平されることとなり、行われる運びとなった。発掘では、５ヶ所の曲輪と堀切が６条検出され遺物も土師質土器、貿易陶磁器をはじめ多くの遺物が出土している。遺物の時期等からは15世紀から16世紀前半を中心に機能していたと考えられ、また火を受けた礎石及び染付がみられることから、16世紀後半にも使用されていた可能性が大きく、一条兼定が長宗我部氏と対戦した際に再利用されたのではないかと考えられている。

14. チシ古城跡[注18]

県西部中村市実崎地区の標高38.5mの丘陵端部に立地する。四万十川とその支流である中筋川の合流地点付近の右岸に位置し、北方向には中村市街地、東側には四万十川を一望できる山城である。高知西南地区大規模農道事業による広域農道開通により発掘調査が行われる運びとなった。城跡周辺には北西方向約1.5kmに山路城跡、南西方向には岡崎ノ城跡、深木城跡、サコノ城跡等の山城が存在している。築城年代や城主については不明であるが、長宗我部氏の検地段階では廃城となっていた可能性が高い。また地検帳には山路城主であり、長宗我部氏の家臣である光富次良兵衛の名が記載されており、チシ古城周辺は直轄地であったと考えることができる。現況では、詰、土塁状地形等が確認されていたが、後世による攪乱が著しく詰部分での遺構確認には至っていない。土師質土器、青磁をはじめとする15世紀から16世紀前半の土器が出土しており、長宗我部氏以前の一条氏配下時代に主に機能していた城跡であったと考えられる。

15. ハナノシロ城跡[注19]

県西部中村市江ノ村に所在し、中筋川を西方向に約13km遡った右岸の標高35m前後を測る丘陵上

に立地する小規模な城跡である。築城年代や城主などについては不詳であるが、長宗我部地検帳では「古城」と記載されており、天正17年の長宗我部氏による江ノ村検地段階ではすでに廃城となっている。城跡の周辺には同尾根上の東方向に江ノ古城跡、西方向には久木ノ城跡、西の谷城跡等中世の山城が点在している。調査は中村宿毛間を通る高規格道路建設に伴い、平成4年に江ノ古城跡とともに行われ、4ヶ所の曲輪から掘立柱建物跡をはじめ、東斜面部では人工的に段状を造り敵の進入を防ぐ雛壇状遺構を検出するなど、防御面では優れた配置がなされていた城跡であることが確認されている。青磁・白磁等の出土遺物からは15世紀後半を中心に機能していたと考えられ、隣接する江ノ古城跡の支城として機能していた可能性が高い城跡である。

16. 江ノ古城跡

注20

中村市江の村に所在し、中筋川右岸の標高58mを測る丘陵上に立地し、東西約210m、南北370mの規模を持ち、「土佐州郡志」によると江野摂津守の居城であったと記載された城跡である。長宗我部地検帳には「古城」と記載されており、検地の段階では廃城となっている。調査は中村宿毛間の高規格道路建設のため平成4年度にハナノシロ城跡とともに行われた。発掘は2ヶ所の平坦地形と西南斜面部のみと限られており、城跡全体を知り得ることはできなかったが、掘立柱建物跡等の遺構を検出した。また出土遺物からはハナノシロ城跡と同時期に機能しており、城跡の規模、位置関係から推察すると、江ノ村の本城として存在していたと考えられる城跡である。

17. 塩塚城跡

注21

県西部中村市の北西部、四万十川中流域の川登地区に所在する。標高51m前後を測る丘陵上に立地する「里の城」と90mを測る「タキモト城跡」から構成されている。『敷地軍記』及び『南路志』には天文2年（1533）に、敷地民部省輔藤康が一条氏より賜死をうけ、タキモト城において自刃したことが記されている。また長宗我部地検帳からは中村市式地本村にある敷地城跡を本城としており、塩塚城跡は敷地城跡の出城であったと考えられる。調査は川登地区における主要幹線道路新設のため里の城の西斜面部を発掘することとなった。トレンチを設定し掘削する調査方法であったが、城に属する遺構を検出している。また土師質土器、青磁等の15世紀後半から16世紀前半の遺物が多く出土しており、この年代に主に機能していたと考えられている。

18. 栗本城跡

注22

県西部中村市具同に所在し、東には四万十川、南には支流である中筋川を望む標高58mの丘陵上に立地した城跡である。同尾根上の北側には扇城跡が所在する。築城年代等については不詳であるが、天正2年（1574）一条氏と長宗我部氏の渡川合戦の際、一条氏が陣を張った城として栗本城跡の名が伝えられている。調査は詰、西部郭、北部郭が実施され、溝状遺構、柱穴群を検出している。城跡からは土師質土器、青磁・白磁等が出土しているが、遺物からは15世紀から16世紀前半代を中心とする時期と16世紀後半代を中心とした時期に分けられ、一条氏が渡川合戦の際に再利用した城跡であったと考えられている。

第Ⅲ章 環 境

第１節 高知県の概要

Fig.5 高知県の各市町村

土佐国高知県は、北は急峻な四国山脈に、南は太平洋に挟まれた地形を呈し、古来より温流の地として知られるように、ともすれば物流の遮断されやすい要素を持っている。現在も交通問題・人口の都市集中化現象・地方や山間の過疎化・高齢化社会・産業の立ち後れ等さまざまな課題を抱えている。その半面、近年では所謂地方が見直される時代となり、それぞれの地域で、またそれぞれの立場で懸命に活性化に勤めている。同時に、新しい時代のニーズに対応した高速道路や主要幹線道路の開通，港の整備や高知空港の拡張計画等が図られ大きく変貌を遂げようとしている。主要交通体系の整備は、物流・政治・経済・文化の発展に大きな影響を及ぼし、まさに高知県の大動脈として人々の生活を支えている。

高知県は東西に600㎞以上の海岸線を有し、その形は恰も扇をひろげた地形を呈している。その海岸線を大きく見ると、地殻変動の結果、両サイドの室戸岬・足摺岬では土地が隆起し全国的にも有名な海岸段丘が発達している。一方、中央部の高知平野では土地が沈降して、低くなっている現象が見られる。これは、プレートテクトニクスによるところのフィリピン海プレートが南海トラフに沈み込む際の圧縮に伴う歪みエネルギー（繰り返される南海大地震）によるものである。この内的営力に伴ない、地割れや液状化現象が沖積低地には多く見られ、中村市の中筋平野に所在する遺跡内においても数カ所確認されている。浦戸湾から浦ノ内湾・須崎湾・久礼湾・興津から佐賀にかけてはリアス式海岸が発達しており、天然の良港が多く形成されている。県西部に沈降海岸が多いことを示している。また、県の両端部の宿毛湾や甲浦湾にもそれが見られ、豊後水道や紀伊水道を挟んだ他地域との出入口としての機能を果たしてきた。一方、県境から海岸線までの南北の距離は約30㎞と狭く、県域の79％が山地という数字が示すように、平野は各河川の河口部に僅かにしか存在しない。

第２節 大方町の概要

大方町は、県都高知市から西へ約100km，幡多郡の東部に位置している。東を佐賀町，西と北の

大半を中村市，北の一部を大正町と境を接する。町内の主要交通体系は、東西の海岸線を国道56号線と土佐くろしお鉄道が横断し、国道から山間部には県道・町道が縦断している。面積112.87km²を有し、平成８年４月１日の推計人口は10,358人である。他の町村から比較すると児童・生徒数の割合が高く、この数値は町の活力源であり今後21世紀へ向けてあらゆる面で期待が持たれている。就業人口の約６割は農業に従事し、年間平均気温16℃，降水量2800㎜前後という気候のもと、設備投資と相俟って胡瓜・苺などの施設園芸やユリ・ガーベラなどの花卉栽培が盛んである。また、砂地を利用しての玉葱韮も特産品として知られ、「くじらっきょう」というユニークな名称をつけて売り出している。漁業は、沿岸漁業が中心であるが近年水揚げ量は落ち込んでいる。その一方で、「ホエールウオッチング」は全国で話題となり、「観光漁業」とでも言うべき、新しい時代のニーズに応えた取り組みは全国の先駆けとなっている。また、延長約３kmに及ぶ砂浜や並立する黒松の情景は西日本でも定評があり、その美しい入野の浜を利用した「砂浜美術館」・「はだしマラソン」・「Tシャツアート展」・「漂流物展」など、工夫を凝らした各イベントは県内外から高い評価を受けている。最近では上林暁文学館も建設され、国の指定を受けた風光明媚な入野松原との調和が保たれている。このように、豊かな自然と固有の文化と町民の創造力によって活気ある町づくりが進められている。

第３節　地理的環境

大方町は、高知県の地形的特色がそのまま反映されている。即ち、太平洋に面した扇形の地形を呈する町内は、北部の大半を山地が占め，海岸部では砂地が広がる。その北部山地からは、南の太平洋へ向けて河川が流入している。こうした地形的要因に制約され、集落は海岸に面した平野部と町内の６つの中小河川（伊田川・有井川・蜷川・湊川・加持川・蛎瀬川）やその支流沿いに多く分布している。町内に分布する遺跡も同様で、これら河川によって形成された沖積平野，町内の東と西に形成された海岸段丘上，各河川沿いの丘陵に位置している。これらは遺跡の立地条件として、陽当り・水との関係・災害からの隔離・地形の安定性・食料源・原料の入手といった自然環境と、他集団との関係やルートといった社会環境を満たしている。

曽我城跡は、大方町浮鞭域ノ谷口843～873に所在する。大方町に所在する城跡は、上記の各河川沿いの丘陵に立地する場合が多い。曽我城跡も例外ではなく、湊川下流右岸に細長く派生する丘陵尾根の先端部（北緯33度－02分－18秒，東経133度－01分－48秒前後）に立地している。湊川は、中村市との分水嶺より南流し、奥湊川・口湊川・浮鞭の集落を経て太平洋に注ぐ。城からは海が見渡せ、河口までの距離は約１kmである。この湊川沿いには曽我城跡の他にも、幾つかの山城や各時代の遺跡が多く所在している。言うまでもなく、各河川は重要な交通路であり（現在は、これらの河川沿いに必ず道路が並走している）、河口から離れた山間の集落にも多くの物資や情報等を流通させている。また、河川を堀の一部として利用することと併せて、各集落の地形上重要な場所には例外なく山城が形成されている。

第4節 地質構造

四国の地質帯は東西に帯状の構造を示している。即ち、中央構造線，御荷鉾構造線，仏像構造線と呼ばれる大きな断層によって、北から領家帯（主に花崗岩類からなる。），三波川帯（変成作用を受けており主に三波川結晶片岩類が分布。蛇紋岩・かんらん岩・変斑れい岩からなる。），秩父帯（北縁は御荷鉾緑色岩類が分布。枕状溶岩・石灰岩・チャート・凝灰岩・砂岩・泥岩等からなる。），四万十帯（主に砂泥互層のタービダイトからなる。）の4帯に区切られている。高知県内では嶺北地方に三波川帯が、県の中央部に秩父帯が、県の中央部南縁及び東部と西部に四万十帯が広がっている。四万十帯は更に中筋・安芸構造線により、白亜系の北帯と第三系の南帯に分けられる。高知県の四万十帯は、土佐湾の湾入によって大きく東部地域と西部地域に分けられ、岩相に相違点が見られるようである。当遺跡が存在する四万十帯西部地域の主要な岩相は、（a）砂岩・頁岩（泥岩）及び砂泥互層（b）赤色頁岩・灰色～緑灰色頁岩・同様色の珪質頁岩～シルト岩及び多色互層（c）層状チャート（d）緑色岩類等である。また、四万十帯の特徴は上記の岩石がさまざまな形態で変形し、入り交じって存在する混在岩が広く分布することである。

県西部の四万十帯は中筋構造線で画されているが、洪積世第2間氷期にはこの断層北縁に沿う所謂中筋地溝帯に海水が侵入し、（当時の下末吉海侵の最大は50～60mと言われる。）南側は四国本土から分離していたと考えられている。この時期に、中筋平野の戸内付近などの海峡部に近い淡水域で堆積したものが海退後に洪積中位段丘層となり、入野や平野付近の海岸に近い所では砂丘が形成されたと見られる。平野付近の古砂丘によって濃集された砂鉄は今でも有名である。この特異な地層（古砂層）は窪部落西端（加持川東方丘陵）から出現しはじめ、以西では次第に厚くなり入野小学校裏では7mに達するという確認もある。これらの分布は、新砂丘の分布する県立公園入野松原に比較的近接した地域と平野部落西方の丘陵上に限られており、これを大方砂層と呼んでいる。また、中村市平野北東部より大方町田野浦北方に至る海岸沿いには、平野黄色礫層というこれ又特異な地層が分布するようである。これらは地質学上第4紀地史を解明する上で重要な要素である。

第5節 歴史的環境

高知県教育委員会は、埋蔵文化財保護の周知徹底をはかり、かつ遺跡を保護するための基礎資料とすることを目的とした遺跡詳細分布調査を実施している。国庫補助事業として昭和61年度から10ヶ年計画で県内全域で行われ、幡多ブロックの結果によると総数670ヶ所余となっている。このうち大方町では87ヶ所が確認されている。大方町における各時代毎の割合は、縄文9％（14遺跡），弥生5％（8遺跡），古墳9％（15遺跡），奈良・平安32％（51遺跡），中世43％（69遺跡），近世2％（4遺跡）となっている。しかし、この数値はあくまで表面採集（観察）による数値であり、今後あらゆる機会に新たな発見を生じる可能性を多いに秘めている。

先述のように大方町内の遺跡の発掘調査例は3遺跡だけであり、各時代の詳しい内容が判明していないのが現状である。従って、ここでは視点を大きく広げて県下の調査成果をもとに、各時代で

No.	名称	所在地	種別	現況	時代	備考
1	伊田（井田）城跡	大方町伊田字古城	城跡	山林・墓地	中世	
2	有井城跡	〃 有井川字ホキノ畝	〃	山林	〃	
3	北有井川(有井川奥之谷)城跡	〃 〃 字シロクビ・ヌタノダバ	〃	〃	〃	
4	上川口城跡	〃 上川口字岡野鵜山	〃	〃	〃	
5	高山城跡	〃 〃 字高山	〃	〃	〃	
6	蜷川城跡	〃 蜷川3599-1・5・11～13	〃	〃	〃	
7	浮津城跡	〃 浮鞭字城山・上城山	〃	〃	〃	
8	南浮津城跡	〃 〃 字小城山	〃	〃	〃	
9	浮鞭城跡	〃 〃 字田城	〃	畑・荒蕪地	〃	
10	米沖（口湊川）城跡	〃 口湊川字城山	〃	山林	〃	
11	大平（湊川）城跡	〃 奥湊川字地蔵ノ上	〃	〃	〃	
12	曽我城跡	〃 浮鞭字城ノ谷口	〃	〃	〃	
13	小川城跡	〃 加持字平見	〃	〃	〃	
14	吹上城跡	〃 浮鞭字南旧城	〃	山林・荒蕪地	〃	
15	鹿持城跡	〃 加持字古城	〃	山林	〃	
16	本谷城跡	〃 加持川字下ケンギョウ・ケンキウロ	〃	〃	〃	
17	加持川城跡	〃 〃 字城山・北汐水・東汐水	〃	〃	〃	
18	宮ノ川城跡	〃 大井川字クサイガ峠山	〃	〃	〃	
19	大井川（二重）城跡	〃 〃 字城ノ谷	〃	畑・道路	〃	一部消滅
20	入野城跡	〃 入野字城山	〃	山林・畑	〃	
21	岩合城跡	〃 下田ノ口字ツボノソト	〃	山林	〃	
22	西本城跡	〃 〃 字タナダ・テッホウ田	〃	〃	〃	
23	馬荷城跡	〃 馬荷字城山	〃	〃	〃	
24	蚊瀬（田ノ浦）城跡	〃 田ノ浦字古城・古城東平・古城西平	〃	〃	〃	
25	出口城跡	〃 出口字寺田・寺田谷	〃	〃	〃	
26	伊の岬遺跡	〃 蕨字中ダバ	散布地	畑・荒蕪地	縄文	
27	伊田の火立場跡	〃 〃 字大松畝	狼煙場跡	山林	近世	
28	松山寺跡	〃 伊田字寺山	社寺跡	畑・墓地	中世～近世	
29	伊田遺跡	〃 〃 ホコデン	散布地	水田・畑	平安・中世	
30	清水出遺跡	〃 〃 字清水出	〃	〃	中世	
31	有井庄司墓	〃 有井川字八幡神社	墓	墓地	〃	県史跡
32	清源寺跡	〃 〃 字橋本	社寺跡	荒蕪地	中世・近世	
33	上川口遺跡	〃 上川口字西高山・中屋敷	散布地	畑・宅地	奈良～中世	
34	小樽山遺跡	〃 〃 字鳥羽ノ谷・板屋カダバ下モ	〃	畑・荒蕪地	縄文	
35	浮津遺跡	〃 浮鞭字南千次ヤシキ・代僧・休場他	〃	水田・畑	縄文・中世	
36	奥尾遺跡	〃 〃 字前奥尾・西奥尾・田中谷他	〃	畑	奈良～中世	
37	鞭遺跡	〃 〃 字東ダバ・奥ダバ・色見ダバ他	〃	畑・宅地	縄文～中世	
38	鹿々場窯跡	〃 〃 字鹿々場	窯跡	水田・畑	奈良・平安	
39	鞭窯跡	〃 〃 字ツエツチ	〃	畑・山林	〃	
40	防ノ駄馬遺跡	〃 〃 字防ノ駄馬・防ノ谷	散布地	畑	縄文～中世	
41	寺尾遺跡	〃 口湊川字岡寺尾	〃	〃	奈良～中世	
42	コウカ遺跡	〃 〃 字コウクワ	〃	畑・荒蕪地	中世	
43	高知神遺跡	〃 〃 字高知神・新田	〃	水田・畑	縄文～中世	
44	日原遺跡	〃 〃 字ヒビ原	〃	畑・宅地	奈良・平安	
45	奥湊川遺跡	〃 奥湊川字中地屋敷	〃	水田・畑	弥生・中世	
46	弘野遺跡	〃 浮鞭字弘野	〃	畑・荒蕪地	縄文～平安	
47	早咲遺跡	〃 入野字早咲	〃	水田・畑	弥生・中世	祭祀遺跡
48	田村遺跡	〃 加持字田村ヤシキ・土了谷口	〃	畑・宅地	奈良～中世	
49	正田畝遺跡	〃 〃 字正田畝	〃	畑・山林	平安・中世	
50	猿飼遺跡	〃 〃 字サ子トウシ	〃	畑・果樹園	縄文	
51	庄田遺跡	〃 〃 字庄田	〃	畑	弥生～古墳	
52	花井川遺跡	〃 〃 字上屋式	〃	〃	中世	
53	加持本村遺跡	〃 〃 字遺跡	〃	水田・畑	奈良～中世	
54	泉福寺跡	〃 〃 字寺中	社寺跡	畑	〃	
55	竹シマツ遺跡	〃 〃 字竹シマツ	散布地	畑・荒蕪地	〃	
56	宇町ノ前遺跡	〃 〃 ウチウマエ	〃	山林・畑	古墳・中世	
57	岡崎遺跡	〃 入野字岡崎	〃	〃	〃	
58	亀ノ甲遺跡	大方町入野字亀ノ甲	散布地	畑	古墳～中世	
59	高知駄馬遺跡	〃 〃 字高知駄馬・四拾石他	〃	〃	〃	
60	入野遺跡	〃 〃 字大谷・タバタ他	〃	学校・畑	古墳	
61	浜ノ宮遺跡	〃 〃 字浜の宮・上万行・神上	〃	畑・宅地	中世	
62	入野本村遺跡	〃 〃 字八幡屋敷	〃	〃	奈良～中世	
63	板取谷遺跡	〃 〃 字板取谷	〃	畑・墓地	〃	
64	芝遺跡	〃 〃 字サッヘイ・弓場・水留	〃	水田・畑	〃	
65	東ヲゴウ遺跡	〃 下田ノ口字東ヲゴウ・地ヲゴウ	〃	畑	古墳・中世	
66	カシワ遺跡	〃 〃 字カシワ	〃	〃	古墳～中世	
67	田ノ口古墳	〃 〃 字石ガミ	古墳	山林	古墳	県史跡
68	下田ノ口遺跡	〃 〃 字竜イケノ谷	散布地	畑	奈良～中世	
69	積善寺跡	〃 下田ノ口字イワカミ	社寺跡	山林	中世・近世	
70	上田ノ口遺跡	〃 上田ノ口字荒神下・苗代	散布地	畑・宅地	中世	

Tab.3 大方町遺跡一覧表

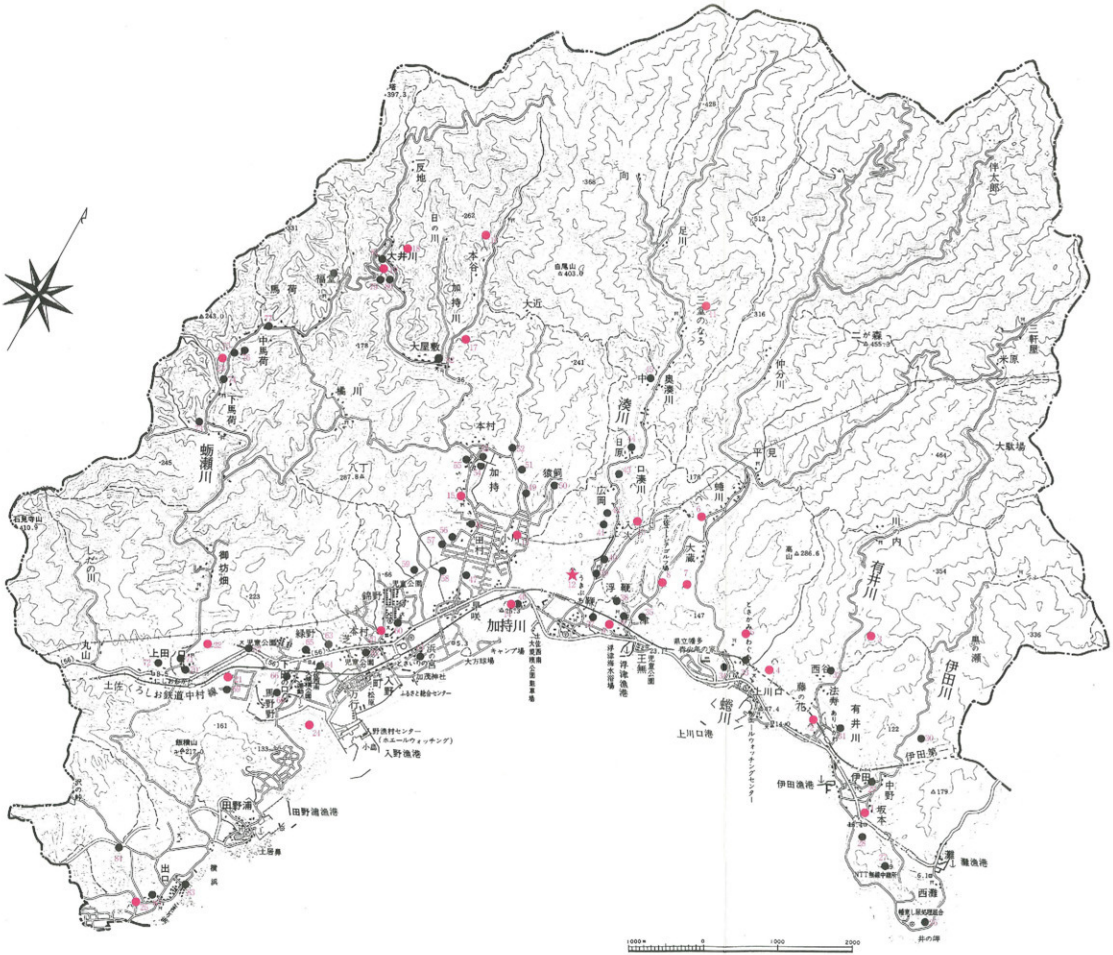


Fig.6 大方町遺跡分布図

No.	名称	所在地	種別	現況	時代	備考
71	コビロウカ遺跡	〃 〃 字ウヂカワ他	〃	〃	奈良～中世	
72	ムネノダバ遺跡	〃 〃 字山崎他	〃	畑	〃	
73	下馬何遺跡	〃馬何字コヤノダバ	〃	〃	縄文	
74	野中遺跡	〃 〃 野中・山方	〃	水田・畑	中世	
75	宗正寺遺跡	〃 〃 字寺敷山・ヨリマセ	〃	〃	縄文・中世	
76	天神駄馬遺跡	〃 〃 字天神駄馬	〃	畑	中世	
77	中馬何遺跡	〃 〃 上大田	〃	畑・宅地	〃	
78	福雲遺跡	〃 〃 カヂヤシキ	〃	〃	〃	
79	アリノ木遺跡	〃 加持川字上アリノ木	〃	畑	〃	
80	長丁頭遺跡	〃 〃 字長丁頭	〃	〃	〃	
81	大井川遺跡	〃 大井川字宮川壇敷	〃	水田・畑	〃	
82	大屋敷遺跡	〃 加持川字寺前・上林山・上林谷他	〃	畑・ハウス	縄文	
83	上駄馬遺跡	〃 山口字上ミノキシ・稽屋敷	〃	畑・宅地	縄文・中世	
84	小坂口遺跡	〃 〃 字小坂口・シシボリ・西坂本・新開	〃	水田・畑	縄文	
85	長門駄馬遺跡	〃 〃 字長門ダバ・ヤマメダ・長門	〃	畑	〃	

Tab.3 大方町遺跡一覧表

の比較や特色・課題等を概観してみたい。また関連のある事項については、大方町内の遺跡や県下の各市町村の遺跡についても触れることとする。

1．旧石器時代

県下の旧石器時代の遺跡は希薄で、段丘上を中心に十数ヶ所が分布しているだけである。しかも表面採集によって得られた数少ない資料が主で、幡多郡一円の各遺跡も例外ではない。大方町周辺では、中村市双海中駄馬遺跡（元大方町）でナイフ形石器が得られている。この遺跡は海岸段丘上に位置しており、同様の地形を有する大方町内においても旧石器時代の遺跡が存在するという、衆目の一致した考えである。近年では発掘調査によっても旧石器の確認がなされている。県西部では、少数ながらナシヶ森遺跡（大月町）と池ノ上遺跡（宿毛市）から頁岩性のナイフ形石器等が出土している。一方、県中央部の奥谷南遺跡（南国市）では、後期旧石器のナイフ形石器文化層と石器時代最終末のマイクロコア（細石核）・マイクロブレイド（細石刃）文化層から、チャート製の遺物が層位的にまとまって出土している。その内容は松村信博氏によって全国に紹介され、日本に数少ない旧石器時代の岩盤遺跡として、或いは太平洋ルートを結ぶ黒潮文化圏の主要遺跡として注目されている。

2．縄文時代

県下の縄文遺跡の分布は西高東低で、約７割が県西部に集中していると言っても過言ではない。この理由は研究者の有無と地形的要因に他ならない。即ち、大方町では安光敬雄氏を中心とした熱心な現地踏査が行われており、その結果によって縄文遺跡が確認されているのである。また、県西部は海岸段丘や河岸段丘の発達が顕著で、それら段丘上という立地条件のもとに県西部における縄文遺跡分布の特徴が見られるのである。この洪積台地上では、沖積平野に比べ堆積が薄いために表面採取が容易であるいうことにも繋がっている。曽我城跡前方に広がる海岸段丘上にも代表的な鞭遺跡が所在している。他の縄文遺跡でも同様であるように、確認された遺物は石鏃を中心としており、明確な縄文土器は見られない。各縄文遺跡のそれぞれの時期が推定されているが、安光氏も指摘するように石鏃の形態だけで時期判別するのは余りにも危険である。しかし、最近の前田光雄氏

の調査報告では、石器という観点に重点を絞って精力的に分類・研究が進められているようである。その中で類似相を見いだす程度は可能である。何れにせよ当地の石鏃や他の石器は、黒曜石（大分県姫島産）・サヌカイト（瀬戸内産）・チャート・頁岩から構成されており、当時の集落と生業の在り方や彼らの交流を窺い知ることができる。岡本健児氏らによって早くから調査・研究が進められた幡多郡では、宿毛貝塚（宿毛市）・中村貝塚（中村市）・片粕遺跡（土佐清水市）等の著名な指標遺跡が多々所在している。それに加え曽我貴行氏の国見遺跡・船戸遺跡（中村市）の報告資料は貴重なものである。しかし近年の発掘調査例は、一躍全国的に有名になった山間部の松ノ木遺跡（本山町）・低湿地の柳田遺跡（高知市）・丘陵が平野に没する谷部でドングリの貯蔵穴がまとまって検出された奥谷南遺跡（南国市）などを代表に県中央部の充実振りが目を見張る。その割合は、後期・晩期の比率が圧倒的に高い。

3．弥生時代

県中央部では各時代の中で最も多く調査機会が認められ、分けても近年の出原恵三氏の精力的且つ情熱的な研究によって大きな進展を見せている。弥生時代の遺跡では何と言っても、高知県を代表する遺跡である田村遺跡群（南国市）が有名である。田村遺跡は前期初頭から後期まで営まれた拠点的母村集落と言われており、その中で前期の村から検出された遠賀川式土器は最古の土器として特に注目されている。田村の東松木式土器は縄文晩期土器を伴わない成立期の遠賀川式土器と考えられ、県西部の入田遺跡（中村市）等とは異なった様相を示している。遠賀川式土器の成立をもって弥生社会（文化）の形成という観点に立てば、従来唱えられいる高知県の弥生文化の成立及び稲作伝播論に一石を投じるものとなっている。現在、田村遺跡群は高知空港の新たな拡張計画に伴い、県内では類例のない大規模な発掘調査が始まっている。森田尚宏氏を中心とした調査体制によって多大な成果を収めつつある。弥生時代の集落は各時期を通して高知平野の中で確認されており、社会構造の変化や政治的背景のもとで集落形成のパターンが認められるようである。例えば、弥生前期末の人口増加に伴う分村や弥生中期に形成される高地性集落，或いは弥生後期の洪積台地上へ集落移動などを挙げることができる。それぞれの画期を示す調査例を挙げると、まず出原氏による下分遠崎遺跡（香我美町）がある。この遺跡は前期末に成立し中期前半で終わる比較的短命な集落である特徴を有する。出土した多くの木製品や獣骨・魚骨・各種種子などの自然遺物は、生業の一端を知る貴重な資料である。次に弥生中期後半から後期前半の一括資料は、坂本憲昭氏によって調査された本村遺跡（野市町）がある。丘陵部に営まれた集落内の凹線文を有する土器からは、この時期に県中央部が瀬戸内の強いインパクトを受けたことを看取できる。また、ヒビノキ遺跡（土佐山田町）に代表される後期後半では集落が著しく増加する傾向にある。当該期の竪穴住居址確認例は優に100棟を超しており、その実態が明らかになりつつある。このように県中央部の資料は非常に充実している。大方町内の早咲遺跡では、後期後半の竪穴住居址が確認されており、タタキ目を有する土器からは県中央部同様、畿内の影響を多分に受けていることを知ることができる。県西部の弥生時代の集落は希薄であり貴重なものとなっている。他に町内の奥湊川遺跡や庄田遺跡からは中期を示す遺物が表採されているようである。

4．古墳時代

古墳時代を象徴する古墳の代表的調査は、県西部の高岡山古墳群＝前期古墳・曽我山古墳＝県下唯一の前方後円墳（宿毛市），県中央部の伏原大塚古墳＝後期最大規模の方墳（土佐山田町）・長畝古墳群＝前期古墳（南国市）がある。前者は山本哲也氏によって，後者は廣田佳久氏によって調査が行われており、波多国及び土佐国の古墳時代の政治史を考える上で重要な要素を提供している。高知県では「小円墳・横穴式石室・群集」といった特徴を有する後期古墳が、県中央部山麓を中心に多く存在していることが知られており、大方町においては田ノ口古墳（県史跡）が有名である。田ノ口古墳は、昭和40年に発見された東西約30m，南北約10mの横穴式石室を有する円墳である。現在、大方町で唯一の古墳であるが、その残存状況は良好なものとは言えない。幡多郡では古墳の分布が少ないとされるが、具同中山遺跡群・吉津賀遺跡（中村市）などの祭祀遺跡からは多量の遺物が出土しており、その量たるや県下有数である。その共同体を司る人物の存在や、その墳墓が存在してもおかしくないはずである。また、それに伴う集落の確認例が非常に少ないのも不可解である。そうした状況の中で、竹シマツ遺跡で古墳時代後期の竪穴住居址２棟と土坑などが確認されたのを初め、早咲遺跡でも前期（４世紀前半）・後期（５世紀後半から６世紀前半）の竪穴住居址が数棟それぞれ確認されている。集落の立地条件を知る上で指標となるものである。また、早咲遺跡からは手捏土器や土製模造品（玉・鏡・円盤），石製模造品（円盤）などの祭祀に関わる遺物が、須恵器・土師器と共に纏まって出土している。当該期の祭祀遺跡として全国的に有名である具同中山遺跡群（大規模な河川祭祀跡）などと時期が重なり注目される。５世紀後半から６世紀前半の祭祀形態の在り方やその信仰対象物を知る上で貴重な資料である。

5．奈良・平安時代

古代に入り律令国家体制が整うと、国郡制が定められ、土佐国の歴史の主要舞台は高知平野に移る。土佐国府跡・国分寺・比江廃寺（南国市）といった重要な遺跡の調査も進められてきた。文献上からすると郡衙は、初め安芸，土佐，吾川，幡多の４郡が設置され、その後高岡，香美，長岡が加えられ、所謂土佐七郡が成立している。また、各郡はいくつかの郷から成っており、大方郷は幡多五郷のひとつとして知られている。県中央部の野市町や土佐山田町では発掘調査によって、郡衙などの官衙跡やそれに関連するものと考えられる遺跡が数例確認されている。同時に古代の資料も整いはじめ、その様相が少しずつ解りかけてきている。それに比べ幡多郡の古代の様相は、文献面のみならず考古学的側面においても不鮮明である。幡多郡の発掘調査によって資料が得られている遺跡は、風指遺跡・アゾノ遺跡・船戸遺跡（中村市），宮崎遺跡（大方町）などである。宮崎遺跡は平安時代前期（９世紀後半）の官衙関連遺跡に位置付けられている。出土した黒色土器や緑釉陶器，硯，墨色・刻書土器などは数少ない古代の重要な資料として注目されている。製塩土器は大方町の地形的特質を表徴するものである。また、早咲遺跡からは10世紀の掘立柱建物跡も検出されており、これらによって古代の一様相を垣間見ることができる。大方町において今一つ特筆すべきことは、幡多郡唯一の古代の窯跡が立地している点である。鞭窯跡と鹿々場窯跡は共に近接して所在し、この立地条件は資源や地形に起因するものに他ならず、特に周辺部で良質の粘土が得られるものと推

察される。鞴窯跡は既に破壊されており詳しいことは解らないが、鹿々場窯跡（昭和40年に大方町教育委員会によって調査が行われている）は4基以上の須恵器窯で構成されていたと見られ、その出土遺物から8世紀後半から9世紀頃の所産と考えられる。製品が幡多郡一円を中心に流通していることが推測され、幡多郡の古代の様相を知る上で避けては通れない遺跡である。近年では自然科学的分野（各遺跡から出土する土器の胎土分析等）からのアプローチも進んでおり、流通や様々な事項を証明する上でも是非とも窯跡の詳しい内容を知る必要がある。今後の学術的発掘調査を期待したい。

6．鎌倉・室町（戦国）・安土桃山時代

中世の遺跡は全体の中でも高い割合を示し、大方町においても半数近くを占める。また、山城の占める割合も高く、大方町では25ヶ所が確認されている。大方町の城跡は大方町教育委員会によって、調査記録報告書が刊行されている。中世前期の纏まった資料としては、松田直則氏の中筋川流域を対象とした調査・研究がある。具同中山遺跡群を中心として、対岸に連続する風指遺跡・アゾノ遺跡・船戸遺跡から検出された掘立柱建物群跡は香山寺を取り巻くように立地しており、その変遷を追うことができる。また、集落の盛衰が香山寺の勢力と符合しており興味深い。中世後期では山城の調査例が圧倒的に多い。比較的小規模な城の調査が多い中で、森田尚宏氏によって調査された、長宗我部元親の居城である岡豊城（南国市），或いは吉成承三氏によって調査された、長宗我部元親最後の拠城である浦戸城跡（高知市）や土佐七守護の一人と言われる津野氏の居城である姫野々城跡（葉山村）は特に注目を集めた。他に細川氏の田村城館（南国市）や在地領主の館跡（佐川町）なども調査されている。この時期は中世の商業形態及びその流通経路が確立する時でもあり、東播系須恵器（現兵庫県），瀬戸系（現愛知県），和泉・楠葉産瓦器（現大阪府），備前（現岡山県），常滑（現愛知県），龍泉窯系（中国浙江省），同安窯系（中国福建省）などからの搬入品が各遺跡から出土する。それらは各河川の奥深くまで入り込んでおり、河舟を使った流通を物語っている。大方町に関わる事象として、後醍醐天皇の第一皇子である尊良親王にまつわる伝説や推論は有名である。親王が元弘の変の後に、京都から大方町王無の浜に流された事や、親王を支えたとされる大平弾正や有井庄司については多くの町民によって語られている。2人の墓は町史跡・県史跡として今も残っており、大切に整備されてる。

7．江戸時代

従来、近世の分野においては鹿持雅澄邸跡・能茶山窯（高知市）や五藤家屋敷跡（安芸市）と言った特定の遺跡以外は見逃されがちであった。しかし、最近では高知城（高知市）や小籠遺跡・陣山遺跡（南国市）などを中心に県中央部で発掘調査例が増えている。遺物資料も18世紀末から19世紀中頃にかけてのものが整いはじめ、藤方正治氏を中心として研究も進んでいる。現在、大方町で取り扱っている近世の遺跡は、寺跡が3遺跡，幕末の狼煙場1遺跡、合計4遺跡だけである。しかしながら、早咲遺跡でも見られるように、複合遺跡内において近世の遺構・遺物が検出されることも多々生じよう。今後、大方町内で近世の遺跡が更に増加することは間違いない。

近年の開発に伴う発掘調査数は膨大な量となっており、現在留まることを知らない。高知県においても例外ではなく、平成６年度では、試掘調査や市町村の調査を含めると年間で実に65遺跡を数える。遺跡が次々に壊されるのは誠に残念であるが、先学や現調査員及び研究者，或いは県民の歴史学・考古学への探求の繰り返しによって、共有財産が今に生かされている。今後、高知県の考古学は上記の調査員を中心に更に大きな進展を見るであろう。

第Ⅰ章～Ⅲ章参考文献

『日本城郭体系』別巻　新人物往来社

『大方町史』　大方町教育委員会

『大方町の農業』　農業構造改善推進活動資料

『角川日本地名事典　高知県』　角川書店

平朝彦　『日本列島の誕生』　岩波新書

平朝彦他　「高知県四万十帯の地質とその起源」『四万十帯の地質学と古生物学・甲藤次郎教授還暦記念論文集』

甲藤次郎他　「高知県西南部の中位段丘堆積層」『高知大学学術研究報告　自然科学』第17巻第６号

中川衷三他　「高知県土佐中村市付近の後期第四系」－四国の後期第四系の研究その２－

山崎正明他　「中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」『具同中山遺跡群Ⅱ－１』　高知県埋蔵文化財センター　1996

松村信博・山本純代　「平成８年度奥谷南遺跡現地説明会資料」（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996

前田光雄　『木屋ヶ内遺跡』　高知県幡多郡大正町教育委員会　1995

前田光雄　『十川駄馬崎遺跡』　高知県幡多郡十和村教育委員会　1996

曽我貴行　『国見遺跡』　高知県中村市教育委員会　1994

出原恵三　「南四国における弥生文化の成立」『土佐史談』　1996

坂本憲昭　『野市町本村遺跡調査報告書』　野市町教育委員会　1993

山本哲也　「四万十川流域における前期古墳の成立とその背景」『海南史学』第35号　1997

廣田佳久　『伏原大塚古墳』　高知県土佐山田町教育委員会　1993

松田直則　「四万十川流域の遺跡」『中世土器の基礎研究』XI　日本中世土器研究会編　1996

森田尚宏　『岡豊城跡』－第１～５次発掘調査報告書－　高知県教育委員会　1990

吉成承三　『姫野々城跡Ⅰ』　高知県葉山村教育委員会　1995

藤方正治　「小籠遺跡出土の近世陶磁器について」『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997

他、各遺跡発掘調査報告書

【注】

1．『国営農地開発事業　高知西南開拓建設事業計画概要』　農林水産省中国四国農政局高知西南開拓建設事業所　1994

2．山崎正明　『曽我城跡発掘調査概要報告書』－高知西南開拓建設事業ヤモウジ団地農地造成工事に伴う－　大方町教育委員会　1995

3．廣田佳久・吉原達生　『竹シマツ遺跡・宮崎遺跡』　高知県大方町教育委員会　1992

4．廣田佳久　『早咲遺跡』－県道大用大方線改良工事に伴う－　高知県大方町教育委員会　1991

5．山本哲也　『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書』　土佐山田町教育委員会　1992

6．森田尚宏・松田直則・岡本桂典　『岡豊城跡』第１～５次発掘調査報告書　高知県教育委員会　1990
森田尚宏　『岡豊城跡Ⅱ』第６次発掘調査報告書　（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992

7．吉成承三　『浦戸城跡』　高知市教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995

8．近森泰子　『史跡高知城跡Ⅰ』　高知県教育委員会　1994
宮地早苗・曽我貴行　『高知城跡』　（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995

9．宅間一之・出原恵三　『芳原城跡発掘調査報告書』　高知県教育委員会　1984
松田直則　『芳原城跡Ⅱ』第２～４次発掘調査報告書　春野町教育委員会　1993
松田直則　『芳原城跡Ⅲ』第５次発掘調査報告書　春野町教育委員会　1994

10．宅間一之　『木塚城跡』　春野町教育委員会　1988

11．宅間一之　『吉良城跡Ⅰ』　春野町教育委員会　1985　『吉良城跡Ⅱ』　春野町教育委員会　1986
山本哲也　『吉良城跡Ⅲ』　春野町教育委員会　1987
廣田佳久　『吉良城跡Ⅳ』　春野町教育委員会　1988

12．吉成承三　『姫野々城跡Ⅰ』　葉山村教育委員会　1995
吉成承三　『姫野々城跡Ⅱ』　葉山村教育委員会　1996

13．廣田佳久　『岩井口遺跡・二ノ部遺跡・城跡』　佐川町教育委員会　1995

14．松田直則　『和田城跡』　檮原町教育委員会　1990

15．岡本健児・前田和男・宅間一之　『久礼城跡』　中土佐町教育委員会　1984

16．松田直則他　『中村城跡』　中村市教育委員会　1985

17．森田尚宏・吉成承三　『屋城跡』　（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992

18．吉成承三　『チシ古城跡』　（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992

19．松田直則・竹村三葉「ハナノシロ城跡」『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1993

20．曽我貴行「江ノ古城跡」『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1993

21．山本哲也　『塚塚城跡』　中村市教育委員会　1987

22．木村輝郎他　『栗本城跡』　中村市教育委員会　1985

23．『高知県遺跡地図』－嶺多ブロック－　高知県教育委員会　1988

24．『大方の中世城跡』－調査記録報告書－　大方町教育委員会　1990

第Ⅳ章　曽我城跡の様相

第１節　概要

曽我城跡は、他の丘陵とは分けられて細長く派生した尾根の先端に位置している。その丘陵の形は一見前方後円墳のような地形を呈している。丘陵先端部の約200ｍの間には、最上部（標高約45m）に位置する曲輪（主郭と考えられる）を中心として幾つかの曲輪や平場が形成されており、城が機能した時期のものかどうかは別として、主郭を中心とした各曲輪及び平場の名称を１郭～７郭，平坦部１～10，段状部１～５と各々仮に名称を付けた。各々の位置及び規模等はFig8，Tab4のとうりである。

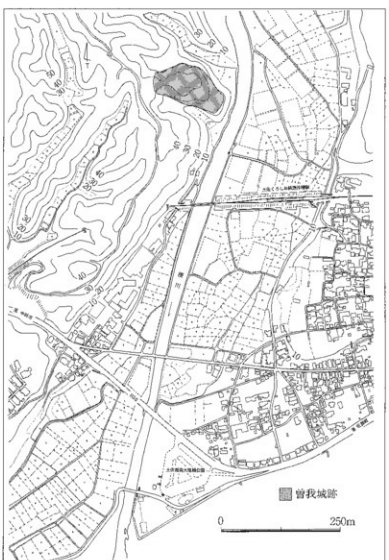


Fig.7　曽我城周辺地形図

主郭を中心にして目を転じてみると、１郭は各曲輪の中で最も広い面積を有し、西端部には長さ24ｍに渡って土塁を構築している。主郭部より西側では、腰曲輪状を呈した２郭・３郭に向けて切岸となって急激に落ち込んでおり、更に２郭西の鞍部には堀切が配されて尾根が遮断されている。その外側には平坦部が階段状に連続する。２郭の北側には１段落ちて３郭が配され、その北側には更に１段落ちて７郭が谷部へ向けて張り出している。

一方、主郭部より東側では、やはり強い比高差をもって４郭・５郭へ切岸状に落ちる。しかし、１郭の東端中央部には地形が窪む部分が観察でき、この方向から出入りする虎口である可能性が強い。４郭は１郭に次いで広い面積を有しており、しかも縄張り内の位置・風向き・陽当り等を考慮すると重要な空間であると言える。４郭・５郭の１段落ちた所には６郭がL字状に巡る。また、４郭より南東方向に切岸となって高い比高差をもって落ちた所からは、平坦部が階段状に連続して標

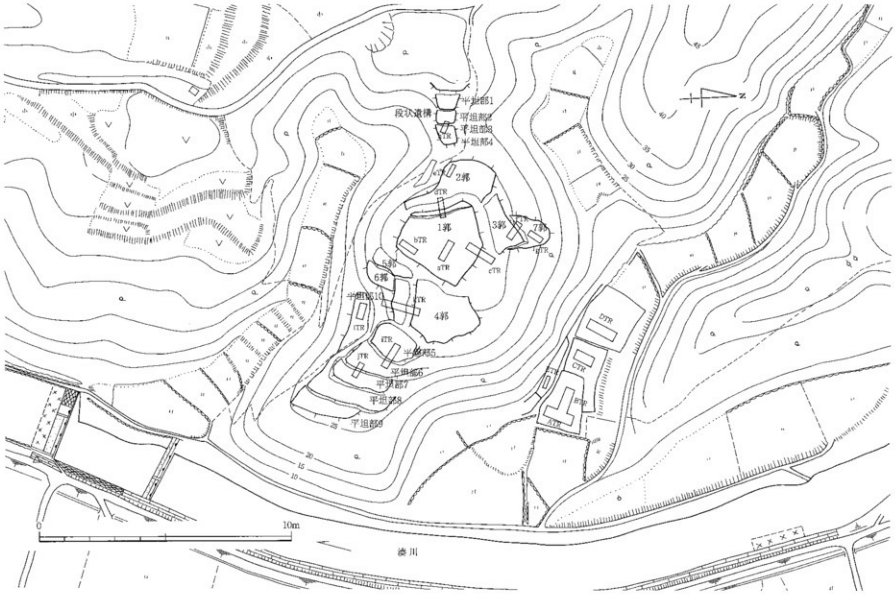


Fig.8　曽我城跡全体図及び試掘トレンチ位置図

	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	備　　考		長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	備　　考
1郭	31.3	30.5	735.0	aTR･bTR･cTR･dTR	平坦部5	18.0	12.5	185.0	iTR
2郭	34.5	13.0	320.1	eTR　今次調査範囲	平坦部6	22.5	8.5	146.6	iTR・jTR
3郭	20.5	8.5	170.2	fTR	平坦部7	23.0	6.0	136.4	jTR
4郭	26.5	19.0	446.4	kTR	平坦部8	31.0	6.0	223.3	
5郭	17.0	4.0	80.6		平坦部9	24.0	6.8	154.9	
6郭	28.5	6.0	175.9	kTR	平坦部10	22.5	6.5	142.2	iTR
7郭	17.0	12.0	111.8	fTR・gTR	段状部1	20.7	1.4	12.5	今次調査範囲
平坦部1	15.0	6.5	87.1	今次調査範囲	段状部2	15.5	1.8	25.2	〃
平坦部2	8.0	5.8	47.2	〃	段状部3	28.5	1.4	36.5	〃
平坦部3	7.5	5.0	37.9	hTR　〃	段状部4	27.6	1.5	27.7	〃
平坦部4	7.3	6.8	50.6	hTR　〃	段状部5	21.8	1.8	44.8	〃

Tab.4　曲輪及び平坦部計測表

高を下げて行く。これら平坦部南端には山道が通っている。

南北両斜面は急峻である。強いて言えば現在山道が通る湊川へ向けた城の前方部（以下前方部）及び2郭以西の南斜面がやや傾斜を弱める。

城の周りの地形について見てみると、丘陵上で気になる場所が2ヶ所存在した。一つは堀切を挟んだ尾根の西側に位置する平坦部の頂部である。この頂部は、現在旧水道タンクが設置されて破壊を被っているが、平場状の広がりが見られる。今一つは城の南側の丘陵頂部上に位置する広い平場である。この2ヶ所は城の位置より標高が高く、ともすれば城の主体部が逆転する可能性を秘めていたのである。しかしながら、現地踏査の結果では城郭の防御施設と見られるものが周囲に存在せず、山城の縄張りとして認定することはできなかった。標高の差などの地形的ハンデを補うのが城の両サイドに巡る谷部であり、尾根線上の防御施設と考えられる。

南谷部の幅は開口部で約50mを測り、全体的には約14～17mを測る。その奥行きは約150mを有する。北谷部の幅は開口部で約55mを測り、幅を縮めながらも20m前後で北西方向へ約300m程入り込んでいる。その中央部付近から一段上がった所にも城の北西堀部を巡るように谷部が約100m程入り込んでいる。これらの谷部は、自然の堀としての機能を有している。また、湊川自体も自然の堀としての役割が考えられるが、本来の湊川は平野の中央部付近を流れていたようである。近世以降の改修によって現在の流れとなっている。

第2節　試掘調査

山城東側の山裾部と丘陵部について、それぞれ任意のトレンチを数カ所設定して調査を行った。先述したように、試掘調査段階では城郭全体の本調査実施という前提があったため、試掘トレンチは斜面や縁辺部に集中した。堆積土量の確認などが主となり、遺構・遺物の検出は後回しになる結果となった。ここで各トレンチについて今一度概述し、曽我城跡全体の様相を知るための手掛かりとしたい。尚、出土遺物については後項で詳しく触れることにする。

1．山裾部トレンチ

A－TR（4×12m）・B－TR（4×10m）・C－TR（4×8m）・D－TR（4×12m）・E－TR（1.5×5m）について各々調査を行った。いずれのトレンチも遺構・遺物の確認には至らず、砂礫の流れ込みと水捌けの悪い状態が繰り返された堆積状況や客土による整地状況が看取でき、中には湧水が見られるものもあった。

2．丘陵部トレンチ

（1）a－TR（2×8m）

1郭（詰）の様相を知る目的で、曲輪のほぼ中央部に設定した。層厚約16cmの耕作土直下で岩盤となり、その岩盤を掘り込んだピットが13基検出された。ピットの規模は、幅22～54cm，深さ約26～60cmを測る。その中のピットの埋土中からは青磁稜花皿が1点出土した。僅かな範囲から纏まってピットが検出されたことで、詰の中央部を中心とした掘立柱建物の存在や城の展開が看取できる。

（2）b－TR（2×7m）

1郭の南東隅に設定した。この位置は前方部の河川や海に対して最も展望が開けている。予想された構列等の遺構検出には至らなかったが、青磁の口縁部片が2点出土した。そのうち1点の外面には細蓮弁文が施されている。中央部に設定したトレンチとは様相が異なり地山面がなかなか確認できず、南側に盛土がされているようである。

（3）c－TR（2×14m）

1郭から北側の斜面に向けて設定した。中央側の堆積は浅いが、斜面の落ち際では約80cmの堆積部分もある。トレンチ北端より下方に向けては竪堀状に落ち込んでいる可能性を残す。青磁片が1点出土した。

（4）d－TR（1.5×7m）

土塁の確認を行った。地山の削り出しによる成形ではなく、客土としての土砂を盛り上げて構築している。土塁の層厚は1m36cmを測る。出土遺物が皆無であり、構築時期については疑問が残るものの、土塁の位置としては尾根側の防御を意識した重要な場所に所在する。

（5）e－TR（2×7m）

2郭の堀切に面した部分に設定した。構列等の検出が予測されたが皆無であり、出土遺物も城の年代に対応するものは見られなかった。東側へは厚く盛土がされていた。

（6）f－TR（2×7m）

3郭から7郭へ向けて設定した。表土層以下において整地の為と考えられる礫を多く検出した。

（7）g－TR（2×8m）

北側に向けて張り出した7郭へ設定した。北側斜面に対応する重要な位置であり、その構造を確認することを目的とした。表土層直下ですぐに地山となりこれといった遺構は検出できなかった。しかし斜面側で意図的に掘り込んだ様な落ち込みを確認した。

（8）h－TR（2×6.5m）

堀切を挟んだ尾根側の平坦部3から4にかけて設定した。連続する平坦部の様相を知る目的であ

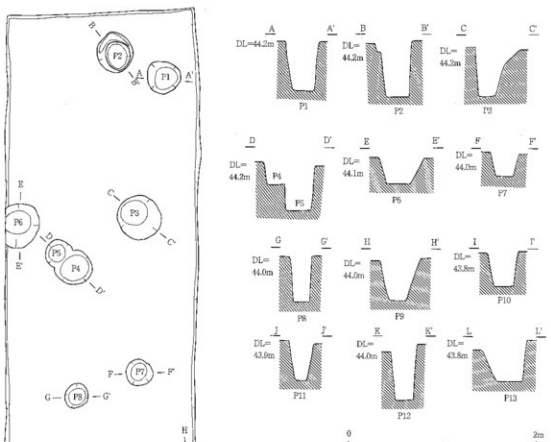


Fig.9 a-TRピット平面及び断面図

ピットNo.	平面規模	深さ	平面形態
P1	径37cm	52cm	円形
P2	45cm	60cm	方形
P3	47cm	71cm	円形
P4	22cm	22cm	円形
P5	54×37cm	46cm	円形
P6	48cm	28cm	円形
P7	28cm	26cm	円形
P8	25cm	50cm	円形
P9	44cm	45cm	円形
P10	31cm	37cm	円形
P11	26cm	43cm	円形
P12	27cm	59cm	円形
P13	47cm	44cm	楕円形

Tab.5 a-TRピット計測表

る。非常に堆積が浅く表土層直下ですぐに岩盤となった。

（9）i－TR（2×12m）

平坦部5から6へかけて設定した。4郭以下の前方部に連続する平場を知る目的である。トレンチ中央部が若干窪むが、耕作土直下で岩盤となる。遺構・遺物の確認には至らなかった。

(10) j－TR（2×8m）

平坦部6から7へかけて設定した。i－TRと同様である。

(11) k－TR（2×15.5m）

4郭から6郭へかけて設定した。基盤層の確認が難しく大きな課題となった。出土遺物は、青磁4点と土師質土器及び鉄滓が確認された。青磁碗の口縁部は外反・肥厚するタイプである。土師質土器については細片で観察不能であった。

(12) l－ TR（2×6m）

南側へ形成された平坦部10に設定した。後世の石垣が見られ、かなり改変されているようであるが、6郭方向からの斜面に位置する竪堀或いは溝状遺構と考えられる先端部分を確認した。

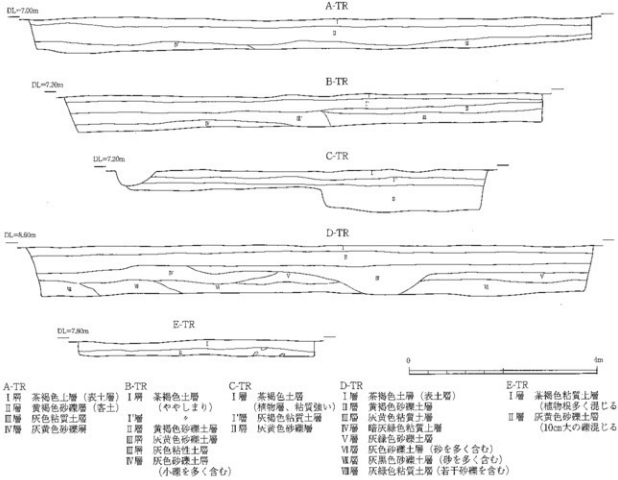
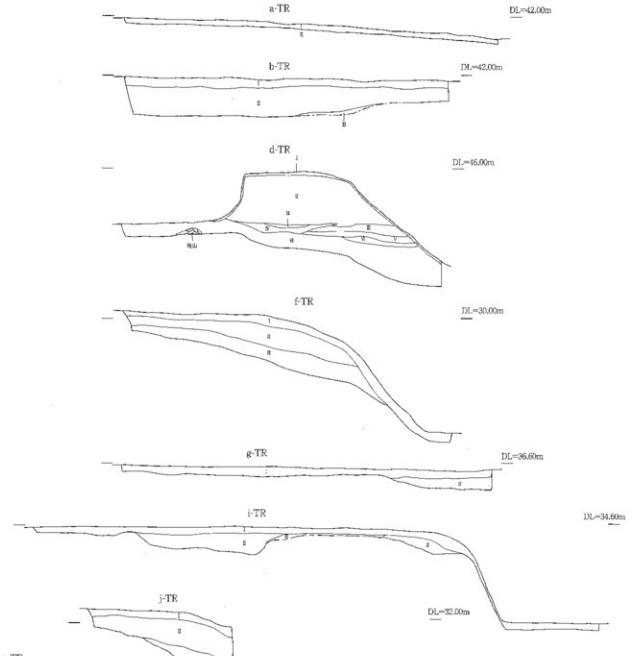


Fig.10 山裾部試掘トレンチセクション図



a-TR
Ⅰ層 黒褐色土層（表土層。）
Ⅱ層 黄褐色礫層（地山。）

b-TR
Ⅰ層 黒褐色土層
（表土層。）
Ⅱ層 黄褐色砂礫土層
（粘質あり、小礫多く含む。）
Ⅲ層 黄褐色砂礫土層（地山。）

d-TR
Ⅰ層 表土層
Ⅱ層 明褐色土層（礫多く含む、客土。）
Ⅲ層 明黄褐色土層（小礫多く含む。）
Ⅳ層 暗褐色土層（小礫含む、炭化物多く含む。）
Ⅴ層 褐色土層（小礫含む、炭化物若干含む。）
Ⅵ層 黄褐色土層（小礫含む、炭化物若干含む。）
Ⅶ層 明褐色土層（礫多く含む。）

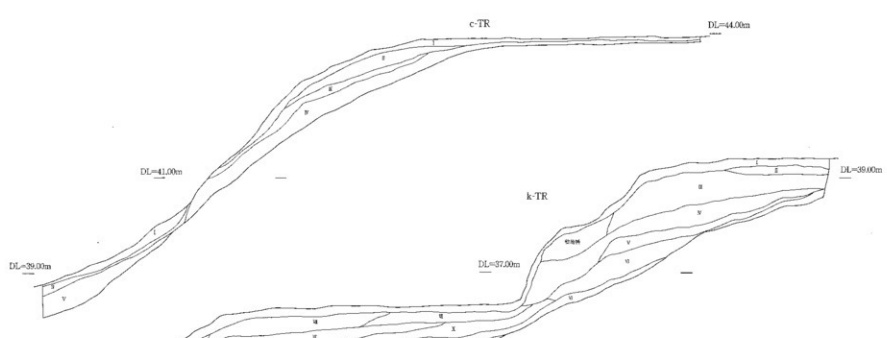
f-TR
Ⅰ層 暗茶褐色土層（表土根多い。）
Ⅱ層 茶褐色礫層（整地の為と思われる。）
Ⅲ層 黄褐色砂礫土層（小礫多く含む。）

g-TR
Ⅰ層 茶褐色土層（表土層。）
Ⅱ層 黄褐色土層（小礫多く含む。）

i-TR
Ⅰ層 黒褐色土層（表土層。）
Ⅱ層 黄褐色砂礫土層（客土、小礫多く含む。）
Ⅲ層 黄褐色礫層（地山、岩盤。）

j-TR
Ⅰ層 黒褐色土層（表土層。）
Ⅱ層 黄褐色砂礫土層（客土、小礫多く含む。）
Ⅲ層 黄褐色礫層（地山、岩盤。）

Fig.11 丘陵部試堀トレンチセクション図1



c-TR
Ⅰ層　表土層
Ⅱ層　本茶褐色土層（小礫多く含む）
Ⅲ層　暗茶褐色土層（炭化物含む）
Ⅳ層　黄褐色土層（小礫多く含む）

k-TR
Ⅰ層　褐色十層10yr4/4（表土層）
Ⅱ層　黄褐色土層10yr5/6（やや粘質あり）
Ⅲ層　黄褐色礫層10yr5/8（小礫層）
Ⅳ層　明黄褐色土層10yr6/8（小礫多く含む）
Ⅴ層　褐色土層10yr4/4（小礫、炭化物含む）
Ⅵ層　明褐色十層7.5yr5/6（炭化物、小礫含む）
Ⅶ層　褐色土層10yr4/6（やや粘質、炭化物・小礫含む）
Ⅷ層　黄褐色土層10yr5/6（炭化物若干含む、小礫多く含む）
Ⅸ層　黄褐色土層10yr5/8（炭化物含む、小礫多く含む）
Ⅹ層　褐色土層7.5ye4/4（炭化物・小礫含む）
ⅩⅠ層　黄褐色土層10yr5/6（炭化物、小礫若干含む）
ⅩⅡ層　褐色土層10yr5/6（締まりなし、炭化物若干・小礫含む）
ⅩⅢ層　暗褐色土層10yr3/4（炭化物・礫含む）
ⅩⅣ層　明黄褐色土層10yr6/8（炭化物多く含む）
ⅩⅤ層　明黄褐色土層10yr6/8（炭化物含む、小礫若干含む）

l-TR
Ⅰ層　表土層
Ⅱ層　褐色土層10yr4/6（炭化物・小礫含む）
Ⅲ層　暗褐色土層10yr3/4
Ⅳ層　明黄褐色10yr6/8（炭化物若干含む）
Ⅴ層　にぶい黄橙色小礫層10yr3/7（粘質あり、小礫多く含む、地山層か）
Ⅵ層　にぶい黄橙色小礫層10yr5/4（礫を多く含む）
Ⅶ層　灰色粘質土層10yr5/4
c・kTRは本調査対象地の為省略

Fig.12　丘陵部試掘トレンチセクション図2

第Ⅴ章　本調査の成果

第1節　調査区内の概要

今次調査対象区は、通常敵が侵入してくると言われる尾根伝いが中心となった。曽我城の防御施設は尾根側に対して土塁・切岸・堀切などが配されており、外敵を遮断する様相を強く示し、城の防御性が特に優れていることが看取できる。また、堀切以西の尾根伝いは丘陵が細長くなっており、城の主体部からの迎撃が容易になっている。堀切は尾根の最狭部に構築され、防御の要となっている。堀切以西の尾根は次第に標高を上げて行くが、その尾根上に平坦部が4ヶ所（平坦部1～4）形成されている。また、南側の斜面には幅1.4～1.8m程の空間を有する細長い平場（段状部1～5）が階段状に連続する。

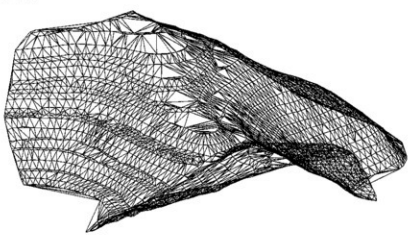


Fig.13　曽我城跡鳥瞰図（調査対象区）

今回の計画工事範囲は丁度堀切の中央部以西であった。しかし、今回の調査においては尾根伝いの防御施設の在り方を探ることが最重要点であり、調査設定範囲は切り離すことができないひとつのセットとして捉えるべきものである。つまり今回の調査範囲は、一度の発掘調査を行うにあたって、どうしても必要なひとつの「面」と考えたのである。

第2節　調査の方法

曽我城跡全体には4mグリッドを設定している。このグリッドは任意の2点（ポイント1，ポイント2）を基準点として地形の長軸方向に合わせて設定している。この2点には光波を用いて公共座標を測り込み、随時その座標を活用した。グリッドは調査区の西隅を基準に、丘陵尾根を横切る方向にアルファベット（A～U）で，山裾に向かって数字（1～41）で表記し、その交点をグリッド名とした。その段階で各曲輪の基準杭を利用して平板で地形測量を行った。丘陵部の試掘トレンチは、基本的にこの座標に沿って設定されており、セクション等の図面もメッシュに沿ったものとなっている。しかしながら、本調査対象区の地形は長軸方向がこのグリッドに適わず、ベルトの設置・図面作成上で問題が生じそうであった。従って本調査では、各地点の主要な所で任意の方向にベルトを残し、人力によるトレンチを先行させて基盤層及び遺構・遺物の遺存状態を確認した後、全面発掘を行った。平坦部の調査は全て人力による手掘り作業で行い、斜面部は人力によって基盤

層を確認した後に、重機で表土層及び客土等の無遺物層を掘削と人力による手掘りを繰り返した。また、細かい作業や遺構・遺物の検出及び遺構の掘削は人力によって作業を進めた。調査の進行に応じて、必要な写真及び図面等によって記録を残した。この際にもグリッド設定杭を利用している。また、調査終了後には所要時間の短縮と測量精度の向上を期し、株式会社ＩＣに航空写真測量を委託した。作成図面はＳ＝1／200，1／100，1／40である。

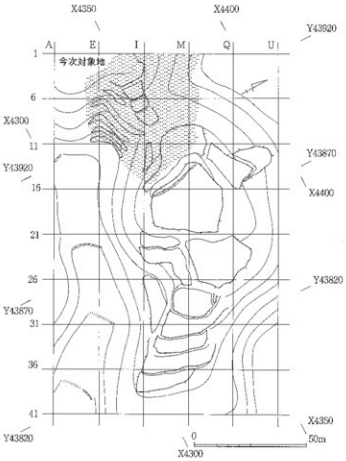


Fig.14　調査対象区及びグリッド設定図

第３節　調査区の堆積状況

曽我城の立地する丘陵山地は，褶曲の強い泥砂岩を基盤とし，風化抵抗力は総体的に弱い。岩種と風化抵抗性の相違から基盤の組成を大別すると，次の４相に分類し得る。

灰色砂岩相：晶質、非晶質の石英粒子を主とし，白色の固溶体を多含する他，黒灰色の頁岩粒子や黒色鉱物を少含する。岩塊は硬質ながら，水酸化鉄やマンガン、炭素その他雑質が膜状に集積しており，それらに沿って小塊に剥離するものが多い。水研に対する抵抗力は強めであり，小礫程度の粒度を保ち得る。

優白質砂岩相：風化を来した白色固溶体の割合が高い岩体であり，硬度が下がり，石英その他硬質粒子の離脱を生じ易い。軽い衝撃で角塊状に破砕し，水研では，砂粒成分と粘土成分に分離する。

灰色泥岩相：硬質ながら岩体の結合が脆く，打撃に対しては，片状に剥離する部分が多い。水研に対する抵抗力は比較的強く，粗粒砂レベルの粒度を保ち得る。

優白質泥岩相：鉄分の溶脱した粘土成分を主体とし，若干の石英粒子や雑多な礫砂を含む。極めて軟脆であり，風化抵抗力は最も弱く，二次堆積粘土の主要供給源となる。粘土成分は，粘性の低い部類に属し，1300℃の実験焼成でも，ほとんど変形を来さない等の点から，相当量のアルミナ分を含む酸性土と見られる。近隣地区に遺存する須恵器窯址では，この種の原料で器を製したものと推定し得る。

現状の山勢は，上記した各岩相の物性に従う自然作用に，築城期以後の人的土地利用行為が加わって形成されたものであり，発掘調査を通じ，各所の上部堆積層と各岩相分布との対比から，両者の関係を探った。各部分の堆積状況は，以下のように整理される。

Fig.15　調査対象区全体図

1．尾根線の堆積状況

（1）西尾根上に連続する段状平坦部（Fig.16の堀切以西）

西から東に向けて緩降する尾根線の上に，大きく分けて4つの平坦面を削り出している。最も西に位置する平坦部1では，その東端面が更に50cmほど低下する。枯死した植皮が分解過程に在るⅠ層（表土）を除き，全て成熟度の極めて低い客土に覆われる。Ⅲ～Ⅳ層は，厚さ約30～70cmを測る大礫層であり，それぞれ径約5～10cm，15～25cmの泥砂岩礫を敷き詰めている。西側に隣接する配水槽の建設工事に伴い，掘削土の処理と整地を兼ねて敷設したものであろう。また，Ⅶ～Ⅶ′層は，SK-2とSK-3を掘削した折りの排土と見られる。平坦部2～4の堆積は極めて薄く，砂岩の優勢な基盤を厚さ30cm足らずの表土が覆うのみである。

（2）堀切（Fig.16の凹低部分）

東西の尾根線が交わる部分の基盤は，風化抵抗力の最も弱い優白質泥岩が優勢であり，尾根の幅度が急減している。この軟弱な部分が断面Ｖ字形に開削されている。底部付近は，昭和の水道管埋設工事によって既に破壊されており，原堆積を推定する術はない。

（3）2郭（Fig.16の堀切以東）

基盤は，風化抵抗力の弱い優白質泥岩が優勢であり，詰寄りの部分では，灰色の泥砂岩が増す。水平に削平された基盤面を，団粒度の低い厚さ20cm前後の表土が覆うのみである。

（4）南斜面連段削整部（Fig.17）

南斜面の基盤は，亀裂を多発して剥離し易い泥砂岩の合間に，酸化鉄の溶脱した粘土層や，逆に酸化鉄の集積した粘土層が竪の走脈を成す。やはり，風化抵抗力の弱い部分であり，山腹は内弯形の平面を呈する。この斜面には，幅1.0～1.5mの細長い平場が2.0～2.4m前後の垂直間隔で削り出されている。薄い表土の下は，切り盛土型の堆積を呈し，いずれも角礫を交える灰褐色土から成る。これらの土壌は，若干の有機成分を含むが，団粒度は低く，未熟土の性質を帯びる。

（5）南斜面東部（Fig.17）

最も堆積の厚い部分であり，1.0～3.8m以上の厚みを測る。やはり，表土は薄く，厚さ25cm以下に止まる。表土より下方の堆積は，次の三群に大別される。

a群．詰下の通路拡幅に伴って投入されたと見られる客土層であり，Ⅱ-L1、Ⅱ-L2の角礫層とⅢ-1、Ⅲ-2の角礫混灰褐色土層から成る。

b群．切り盛土型の堆積を示す段畑造成層であり，上記を除くⅧ各層以上の部分が該当する。

c群．人為と自然の絡む急速な自然堆積の一種か，それとも一時に投入された客土であるか，判断に苦しむ斜面堆積であり，Ⅸ-1からⅩ各層までが，これに該当する。

a群の角礫層は，いずれも優白質の泥砂岩を主体とし，上位では径10cm以下，下位では径15cm以下程度の大礫から成り，土壌を交えない。明らかに基盤の開削と盛土に由来する。

b群の各層から採取した土壌基質中では，0.8～0.2mm以下の微細な炭化物が高密分布するものが多く，植物圏の証である管状気孔や未分解の根系が多在する。土色は，黄白色から暗灰色の範囲で多様な色相に分かれ，混礫度も一定しない点等から，植皮部分や基盤付近に所在した成分が累重するものと考えられる。

c群の各層には，未分解の微細な植物組織が分布するが，有機成分は概して少なく，炭化物粒子の密度は，サンプリンク部位による差が激しい。c群各層の下には，鉄分や炭素に富む黒灰色の基盤泥岩が見られる。

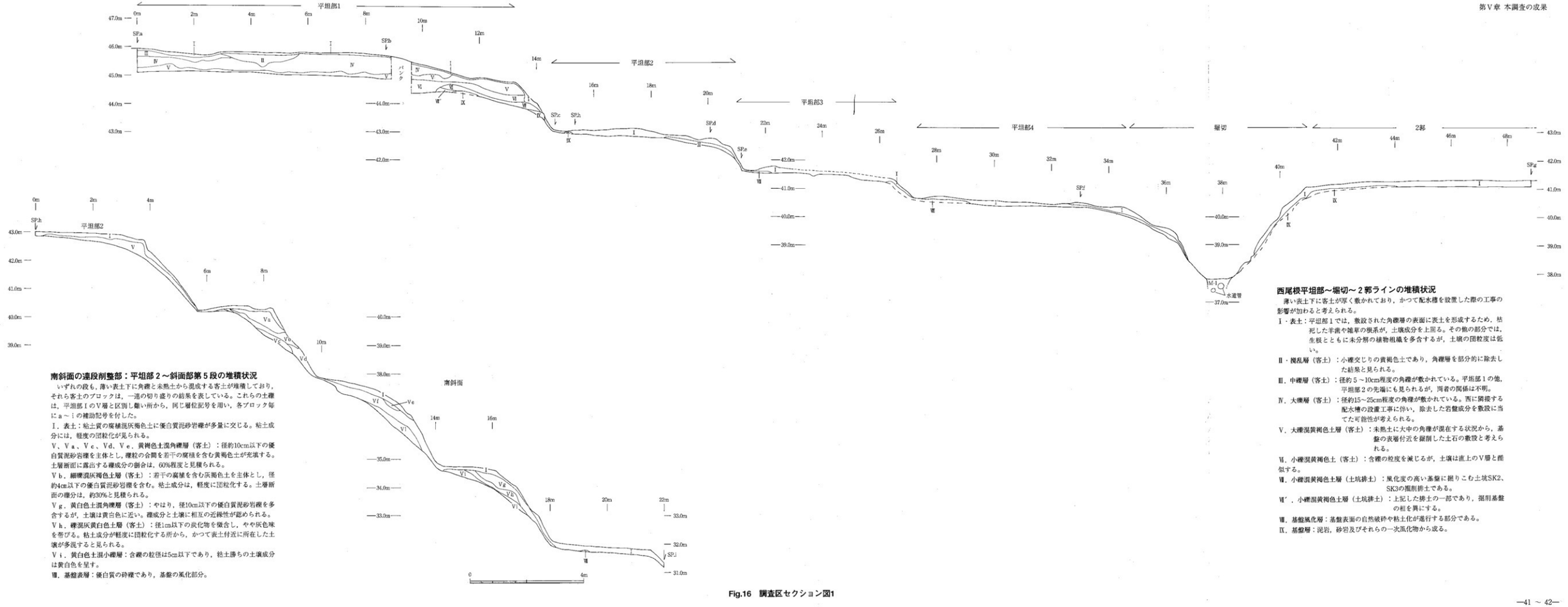
採取した土壌25g前後（含水）に含まれる砂粒（径2～0.02㎜）と小礫粒（径10㎜程度～2㎜）について整理した乾燥重量比（砂粒／小～細礫）は，次表の通りである。この数値を，風化度の目安として，上位のb群に属する各層21点のサンプルと，c群に属する各層21点のサンプルを比較すると，前者の数値は0.26から5.30の間にあって，振幅が大きく，その平均値は1.14となる。後者の数値は，0.2から2.14の間にあって，振幅が小さく，その平均値は0.81を示す。一方，堀切部分から南下する自然小流路の現積層から採取したサンプル21点では，0.46から2.73の間にあって，振幅は小さいが，その平均値は1.24という最も高い風化度を示している。ここでは，炭化物の分布が少ない反面，未分解の有機成分が多在する。これらの結果を総合すると，b群各層の間では風化度の差が激しく，土壌の外観の多様さを裏付ける。また，c群各層の間には，風化度の差が小さく，土壌相互の外観が近似する点と一致する。雑多な成分の堆積するb群よりも，更に風化度が低めであり，堀切下の自然小流路のような水碓を経た堆積は考えにくい。均質な堆積を可能とする水成堆積以外の作用が働いたものと考えられるが，具体的に絞りきれない。

(6) 北斜面

北斜面には，西側尾根線や2郭の削平に伴う切り盛り土のほか，林道の開削と水道管の埋設に伴う排土の堆積が見られる。それより下方では，厚さ10～30㎝前後の表土下に，基盤層の風化や上方からの滑落等による礫交じりの黄褐色土が堆積する。黄褐色土層の下には，基盤の風化成分とも二次堆積土とも判別し難い礫交じりの黄褐～灰白色粘土が堆積している。斜面の勾配は，約37度である。

b群採取層	砂成分g	礫成分g	砂／礫	c群採取層	砂成分g	礫成分g	砂／礫	採 取 層	砂成分g	礫成分g	砂／礫
TR南壁Ⅱ M-5	2.8	2.0	1.40	TR北壁X-1	3.3	2.3	1.43	堀切南SR-S1A	8.4	18.2	0.46
TR南壁Ⅱ M-4	3.1	1.8	1.72	TR北壁X-1	2.8	4.3	0.65	堀切南SR-S1B	5.0	3.0	1.66
TR南壁M-2	2.7	1.9	1.42	TR北壁X-1	3.0	1.4	2.14	堀切南SR-S2A	4.9	4.1	1.19
TR南畔M-1	2.2	8.4	0.26	TR北壁X-1	2.4	1.9	1.26	堀切南SR-S2B	6.6	2.8	2.35
TR南壁Ⅰ'	2.9	3.4	0.85	TR北壁X-2	3.0	2.3	1.30	堀切南SR-S3A	4.0	2.0	2.00
TR南畔Ⅰ'	4.4	2.8	1.57	TR北壁X-4	3.9	3.0	1.30	堀切南SR-S3B	3.8	5.4	0.70
TR南壁Ⅵ－2	3.2	4.2	0.76	TR北壁X-4～7	3.1	5.4	0.57	堀切南SR-S4A	5.4	3.7	1.45
TR南壁Ⅵ－3	2.5	0.9	2.77	TR北壁X-7	4.4	5.7	0.77	堀切南SR-S4B	6.6	6.5	0.98
TR南壁Ⅰ-L	2.6	0.9	2.88	TR北壁X-8	25.9	26.3	0.98	堀切南SR-S6A	5.0	2.1	2.38
TR南壁Ⅱ M-7	3.8	2.2	1.72	TR東壁X-1	2.7	1.8	1.50	堀切南SR-S6B	6.3	7.4	0.85
TR南壁Ⅱ M-5	4.0	2.0	2.00	TR東壁X-1	2.7	3.6	0.75	堀切南SR-S7A	9.5	4.0	2.37
TR南壁Ⅰ	5.6	4.0	1.40	TR東壁X-2～4	2.9	3.0	0.96	堀切南SR-S7B	7.8	4.4	1.77
TR南壁Ⅵ-1	3.6	1.8	2.00	TR東壁X-4	2.1	5.1	0.41	堀切南SR-S10B	5.2	3.7	1.40
TR南壁V-4	3.7	2.1	1.76	TR東壁X-7	3.0	3.5	0.83	堀切南SR-S11B	5.2	1.9	2.73
TR南壁V-4	3.6	1.8	2.00	TR東壁X-7	2.3	4.8	0.47	堀切南SR-S12B	5.3	4.4	1.20
TR南壁Ⅳ	2.8	8.6	0.32	TR東壁X-1	1.0	1.2	0.83	堀切南SR-S13B	4.7	3.3	1.42
TR南壁V-2	3.0	1.2	2.50	TR東壁X-1	1.3	1.5	0.86	堀切南SR-S14B	6.7	4.5	1.48
TR南壁Ⅱ M-7	3.2	0.6	5.30	TR北壁X-2	1.0	4.9	0.20	堀切南SR-S16B	5.8	4.7	1.23
TR南壁Ⅱ M-6	4.0	5.7	0.70	TR東壁X-4	1.5	2.5	0.60	堀切南SR-S17B	3.4	3.2	1.06
TR南畔Ⅱ M-6	5.5	2.7	2.03	TR東壁X-7～8	2.2	2.4	0.91	堀切南SR-S18B	4.6	3.2	1.43
南TR拡	4.2	5.1	0.82	TR東壁X-8	7.0	12.3	0.56	堀切南SR-S20B	2.9	1.9	1.52
合計	73.4	64.1	1.14	合計	81.5	99.3	0.81	合計	117.1	94.4	1.24

Tab.6　曽我城跡の堆積土壌計量表



南斜面の連段削整部：平坦部２～斜面部第５段の堆積状況

いずれの段も，薄い表土下に角礫と未熟土から混成する客土が堆積しており，それら客土のブロックは，一連の切り盛りの結果を表している。これらの土礫は，平坦部Ⅰの Ⅴ層と区別し難い所から，同じ層位記号を用い，各ブロック毎に a～i の補助記号を付した。

Ⅰ．表土：粘土質の腐植混灰褐色土に優白質泥砂岩礫が多量に交じる。粘土成分には，軽度の団粒化が見られる。

Ⅴ、Ⅴa、Ⅴc、Ⅴd、Ⅴe．黄褐色土混角礫層（客土）：径約10cm以下の優白質泥砂岩礫を主体とし，礫粒の合間を若干の腐植を含む黄褐色土が充填する。土層断面に露出する礫成分の割合は，60%程度と見積られる。

Ⅴb．細礫混灰褐色土層（客土）：若干の腐植を含む灰褐色土を主体とし，径約4cm以下の優白質泥砂岩礫を含む。粘土成分は，軽度に団粒化する。土層断面の礫分は，約30%と見積られる。

Ⅴg．黄白色土混角礫層（客土）：やはり，径10cm以下の優白質泥砂岩礫を多含するが，土壌は黄白色に近い。礫成分と土壌に相互の近縁性が認められる。

Ⅴh．礫混灰黄白色土層（客土）：径1cm以下の炭化物を微含し，やや灰色味を帯びる。粘土成分が軽度に団粒化する所から，かつて表土付近に所在した土壌が多混すると見られる。

Ⅴi．黄白色土混小礫層：含礫の粒径は5cm以下であり，粘土勝ちの土壌成分は黄白色を呈す。

Ⅵ．基盤表層：優白質の砕礫であり，基盤の風化部分。

西尾根平坦部～堀切～２郭ラインの堆積状況

薄い表土下に客土が厚く敷かれており，かつて配水槽を設置した際の工事の影響が加わると考えられる。

Ⅰ・表土：平坦部１では，整設された角礫層の表面に表土を形成するため，枯死した羊歯や雑草の根系が，土壌成分を上回る。その他の部分では，生根とともに未分解の植物組織を多含するが，土壌の団粒度は低い。

Ⅱ・撹乱層（客土）：小礫交じりの黄褐色土であり，角礫層を部分的に除去した結果と見られる。

Ⅲ．中礫層（客土）：径約５～10cm程度の角礫が敷かれている。平坦部１の他，平坦部２の先端にも見られるが，両者の関係は不明。

Ⅳ．大礫層（客土）：径約15～25cm程度の角礫が敷かれている。西に隣接する配水槽の設置工事に伴い，除去した岩盤成分を整設に当てた可能性が考えられる。

Ⅴ．大礫混黄褐色土層（客土）：未熟土に大中の角礫が混在する状況から，基盤の表層付近を掘削した土石の敷設と考えられる。

Ⅵ．小礫混黄褐色土（客土）：含礫の粒度を減じるが，土壌は直上のⅤ層と酷似する。

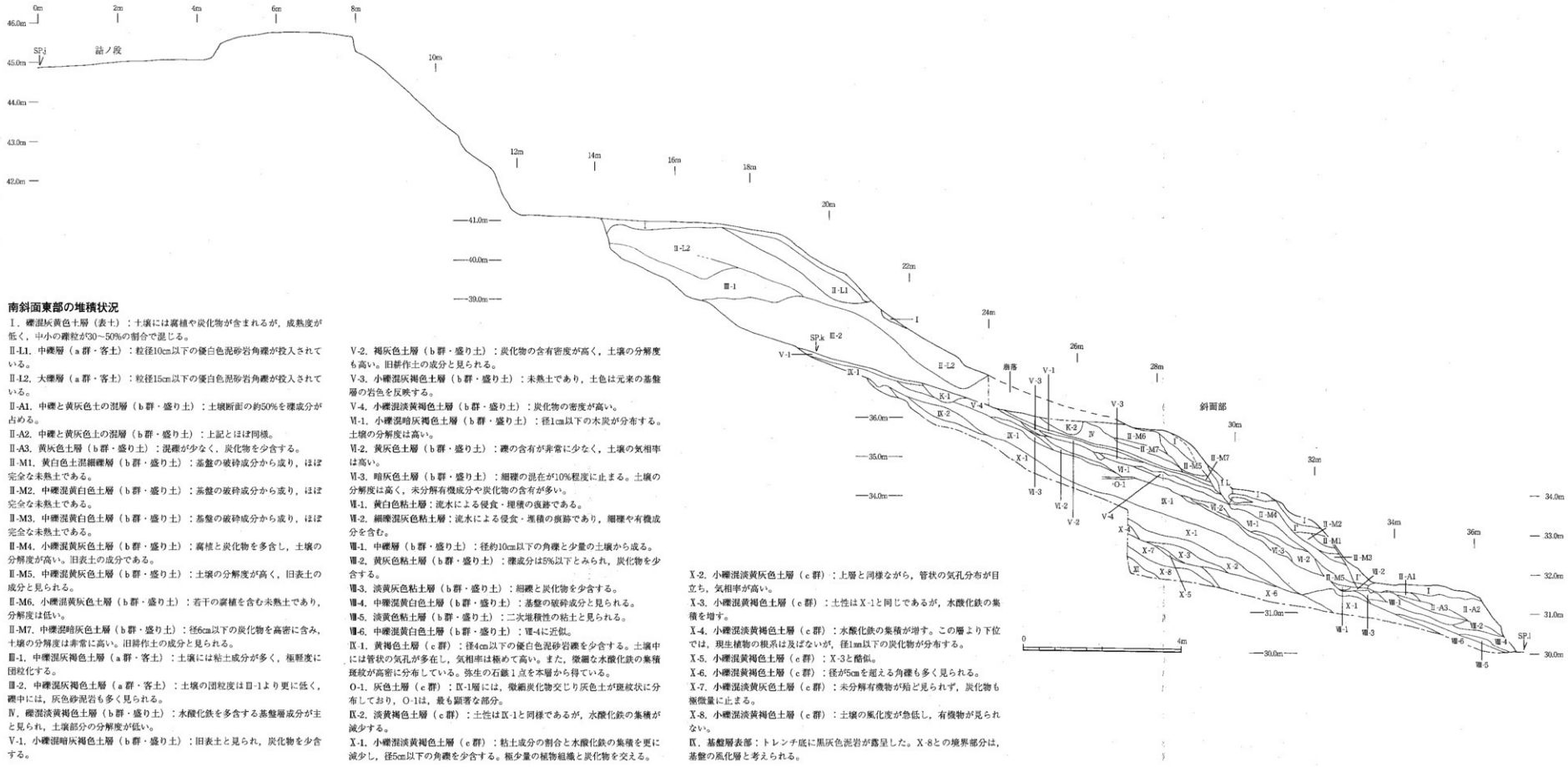
Ⅶ．小礫混黄褐色土層（土坑排土）：風化度の高い基盤に掘りこむ土坑SK2、SK3の掘削排土である。

Ⅶ′．小礫混黄褐色土層（土坑排土）：上記した排土の一部であり，掘削基盤の相を異にする。

Ⅷ．基盤風化層：基盤表面の自然破砕や粘土化が進行する部分である。

Ⅸ．基盤層：泥岩，砂岩及びそれらの一次風化物から成る。

Fig.16　調査区セクション図1



南斜面東部の堆積状況

Ⅰ．礫混灰黄色土層（表土）：土壌には腐植や炭化物が含まれるが，成熟度が低く，中小の礫粒が30～50%の割合で混じる。

Ⅱ-L1．中礫層（a群・客土）：粒径10cm以下の優白色泥砂岩角礫が投入されている。

Ⅱ-L2．大礫層（a群・客土）：粒径15cm以下の優白色泥砂岩角礫が投入されている。

Ⅱ-A1．中礫と黄灰色土の混層（b群・盛り土）：土壌断面の約50%を礫成分が占める。

Ⅱ-A2．中礫と黄灰色土の混層（b群・盛り土）：上記とほぼ同様。

Ⅱ-A3．黄灰色土層（b群・盛り土）：混礫が少なく，炭化物を少含する。

Ⅱ-M1．黄白色土混細礫層（b群・盛り土）：基盤の破砕成分から成り，ほぼ完全な未熟土である。

Ⅱ-M2．中礫混黄白色土層（b群・盛り土）：基盤の破砕成分から成り，ほぼ完全な未熟土である。

Ⅱ-M3．中礫混黄白色土層（b群・盛り土）：基盤の破砕成分から成り，ほぼ完全な未熟土である。

Ⅱ-M4．小礫混黄灰色土層（b群・盛り土）：腐植と炭化物を多含し，土壌の分解度が高い。旧表土の成分である。

Ⅱ-M5．中礫混黄灰色土層（b群・盛り土）：土壌の分解度が高く，旧表土の成分と見られる。

Ⅱ-M6．小礫混黄灰色土層（b群・盛り土）：若干の腐植を含む未熟土であり，分解度は低い。

Ⅱ-M7．中礫混暗灰色土層（b群・盛り土）：径6cm以下の炭化物を高密に含み，土壌の分解度は非常に高い。旧耕作土の成分と見られる。

Ⅲ-1．中礫混灰褐色土層（a群・客土）：土壌には粘土成分が多く，極軽度に団粒化する。

Ⅲ-2．中礫混灰褐色土層（a群・客土）：土壌の団粒度はⅢ-1より更に低く，礫中には，灰色砂泥岩も多く見られる。

Ⅳ．礫混淡黄褐色土層（b群・盛り土）：水酸化鉄を多含する基盤層成分が主と見られ，土壌部分の分解度が低い。

Ⅴ-1．小礫混暗灰褐色土層（b群・盛り土）：旧表土と見られ，炭化物を少含する。

Ⅴ-2．褐灰色土層（b群・盛り土）：炭化物の含有密度が高く，土壌の分解度も高い。旧耕作土の成分と見られる。

Ⅴ-3．小礫混灰褐色土層（b群・盛り土）：未熟土であり，土色は元来の基盤層の岩色を反映する。

Ⅴ-4．小礫混淡黄褐色土層（b群・盛り土）：炭化物の密度が高い。

Ⅵ-1．小礫混暗灰褐色土層（b群・盛り土）：径1cm以下の木炭が分布する。土壌の分解度は高い。

Ⅵ-2．黄灰色土層（b群・盛り土）：礫の含有が非常に少なく，土壌の気相率は高い。

Ⅵ-3．暗灰色土層（b群・盛り土）：細礫の混在が10%程度に止まる。土壌の分解度は高く，未分解有機成分や炭化物の含有が多い。

Ⅶ-1．黄白色粘土層：流水による侵食・堆積の痕跡である。

Ⅶ-2．細礫混灰色粘土層：流水による侵食・堆積の痕跡であり，細礫や有機成分を含む。

Ⅶ-1．中礫層（b群・盛り土）：径約10cm以下の角礫と少量の土壌から成る。

Ⅶ-2．黄灰色粘土層（b群・盛り土）：礫成分は5%以下とみられ，炭化物を少含する。

Ⅶ-3．淡黄灰色粘土層（b群・盛り土）：細礫と炭化物を少含する。

Ⅶ-4．中礫混黄白色土層（b群・盛り土）：基盤の破砕成分と見られる。

Ⅶ-5．淡黄色粘土層（b群・盛り土）：二次堆積性の粘土と見られる。

Ⅶ-6．中礫混黄白色土層（b群・盛り土）：Ⅶ-4に近似。

Ⅸ-1．黄褐色土層（c群）：径4cm以下の優白色泥砂岩礫を少含する。土壌中には管状の気孔が多在し，気相率は極めて高い。また，微細な水酸化鉄の集積斑紋が高密に分布している。弥生の石鏃1点を本層から得ている。

O-1．灰色土層（c群）：Ⅸ-1層には，微細炭化物交じり灰色土が斑紋状に分布しており，O-1は，最も顕著な部分。

Ⅸ-2．淡黄褐色土層（c群）：土性はⅨ-1と同様であるが，水酸化鉄の集積が減少する。

Ⅹ-1．小礫混淡黄褐色土層（c群）：粘土成分の割合と水酸化鉄の集積を更に減少し，径5cm以下の角礫を少含する。極少量の植物組織と炭化物を交える。

Ⅹ-2．小礫混淡黄灰色土層（c群）：上層と同様ながら，管状の気孔分布が目立ち，気相率が高い。

Ⅹ-3．小礫混黄褐色土層（c群）：土性はⅩ-1と同じであるが，水酸化鉄の集積を増す。

Ⅹ-4．小礫混淡黄褐色土層（c群）：水酸化鉄の集積が増す。この層より下位では，現生植物の根系は及ばないが，径1mm以下の炭化物が分布する。

Ⅹ-5．小礫混黄褐色土層（c群）：Ⅹ-3と酷似。

Ⅹ-6．小礫混黄褐色土層（c群）：径が5cmを超える角礫も多く見られる。

Ⅹ-7．小礫混淡黄灰色土層（c群）：未分解有機物が殆ど見られず，炭化物も極微量に止まる。

Ⅹ-8．小礫混淡黄褐色土層（c群）：土壌の風化度が急低し，有機物が見られない。

Ⅸ．基盤層表部：トレンチ底に黒灰色泥岩が露呈した。Ⅹ-8との境界部分は，基盤の風化層と考えられる。

Fig.17　調査区セクション図2

第4節 遺構

今次調査によって確認された、遺構及びその可能性のあるものについて以下に列挙する。

1．2郭

2郭の西側半分について調査を行った。調査前の状況は長軸34.5m，短軸19.2mを有する平場であったが、南斜面に多量の礫・土砂を埋めていることが判明した。調査後の面積は約130m２となった。2郭の幅はほぼ尾根線の続きで伸び、主郭側にかけて若干広がりを持つ曲輪である。また詰の南西裾部へかけて2.5m幅で広がる所も平場として機能しているのではなく、本来は詰からそのまま谷部へ落ち込んでいたものと考えられる。おそらく後世に、この斜面の土砂を利用して下方の平場を拡張したものであろう。2郭の堆積は薄く、岩盤が露出する部分もある。

2郭南東隅には、斜面へ向けて「コ」の字状に作出された部分がある。その目的・用途は良く解らないが、下方に位置する遺構（その他）との関連があるのかも知れない。また、2郭西の堀切斜面部には斜め方向に細長い平坦面が認められた。

2．平坦部１～４

尾根線上に４段に渡って連続する平場で、調査前は畑として利用されていた場所である。調査後の各平坦部を見てみると、平坦部１は長軸12.8m，短軸5.5mであり、地山の上に多量の礫と土砂を敷くことにより、平坦面を拡張して畑を作り出していた。旧水道タンクを設置した際の土砂と考えられる。平坦部２は長軸6.0m，短軸4.0mであり、南側は段状部１へ続く。比較的堆積の薄い平坦部３は長軸5.6m，短軸3.5mであり、平坦部４は長軸7.0m，短軸4.0mである。各平坦部の比高差は約0.8～1.0mである。

3．段状部１～５

南斜面に連続する細長く広がる平場で、調査前は果樹等が植えられていた。各々の幅は約0.4～1.8mであり、その長さは段状部１が11.2m，段状部２が15.4m，段状部３が28.5m，段状部４が27.6m，段状部５が21.8mである。これらは地形に沿って形成されており、段状部３の先端は堀切に回る。各段状部の比高差は約1.4～2.2mである。

4．堀切

丘陵尾根と２郭の間に掘られている、現在確認されている唯一の堀切である。下底は現山道の下に埋設された水道管工事により既に破壊を被っているが、その形状はほぼＶ字形を成すものと考えられる。平坦部４と２郭間の堀切上部幅は約6.8mを測り、下底への比高差は平坦部４側が2.4m，２郭側が3.2mであり、城郭本体側を高く築いている。しかも、その勾配は平坦部４側の中段までが約30度，そこから下方までが約50度として丸みを持たせており、一方２郭側は直線的に約40度で掘削しており、城郭本体側が急傾斜である。尾根を遮断した堀切の両開口部間は約7.0mであり、その側方にも堀切の延長と考えられる部分が続く。特に北斜面には断面Ｕ字形の掘り込みが認められ、埋土中より遺物（青磁）が出土している。

5．土坑

（1）ＳＫ－1

南斜面段状部３の西隅で一段下がった所に位置する。長軸118cm，短軸114cmの円形プランを呈している。検出面からの深さは36cmを測る。岩盤を掘り抜いており、回りには大きな礫が露出していた。埋土は１層：小礫を多く含んだ黄褐色土であり，２層：黄褐色土で両壁面に沿って堆積している。炭化物が若干認められたが、出土遺物は皆無である。

（2）ＳＫ－2・ＳＫ－3

平坦部１東寄りに位置し、ＳＫ－３がＳＫ－２を切っている。ＳＫ－２の現存する長軸は108cmで、深さは98cmを測り、掘り方断面は逆台形状を呈する。埋土は黄褐色粘質土単純一層で、10cm以下の泥砂岩礫を多く含み締まりが弱い。また、ＳＫ－２の横には幅28cm，深さ34cmの溝状遺構が付随している。何らかの集水口として機能していたものであろうか。ＳＫ－３は、長軸96cm，短軸72cmを測り、楕円形を呈する。その掘り方断面はＵ字形を呈し、検出面から垂直方向に82cm落ちる。埋土は１層：黄褐色礫層で小礫を多く含み，２層：暗褐色礫層で大礫を多く含む。共に締まりが弱い。ＳＫ－１及びＳＫ－２・３は、出土遺物が皆無であり時間的なことが明確でないが、その位置・形状・埋土等からすると城の機能した時期或いは城に関連するものとは考えにくい。おそらくその性格は土坑墓・貯蔵用の穴といったものであると考えられる。

（3）ＳＫ－4

北斜面で検出した長軸150cm，短軸90cmの方形をした土坑であり、その横には2.4m程の平坦面が付随する。しかし、現表土層が埋土となっており近年に形成されたものである。

6．溝状遺構

竪堀とは考えにくい斜面に沿った細い溝状のプランを２条確認した。一つは堀切の南側に落ちているもので、幅が約60cm，長さ6.0mを測る。断面形がＵ字状を呈し、その深さは上部で約28cmを有し、下方ではしだいに浅くなり判らなくなる。堀からの水の流れによって形成されたものであろうか。今一つは２郭側方の斜面に位置し、幅約90cm，長さ12mを測り、断面形が緩やかなＶ字状を呈する深さは平均48cmである。これもまた下方で判らなくなる。

7．その他

（1）平場状遺構Ａ

２郭南のやや下がった所に位置する。尾根からのラインが強くカーブを描く部分に沿って斜面を掘削した細い平坦面が続く。途中で途切れる所もあるが、幅40～120cmの三日月状を呈する。その平坦面の西側からは礫が纏まって出土した。また、同じような規模の平坦面が堀切以西の南斜面でも一部認められた。

（2）平場状遺構Ｂ

２郭側方の斜面部に位置する。斜面を掘削して半円形状に成形しており、長軸5.8m，短軸1.8mを測る。精査したがピット等の掘り込みは認められなかった。

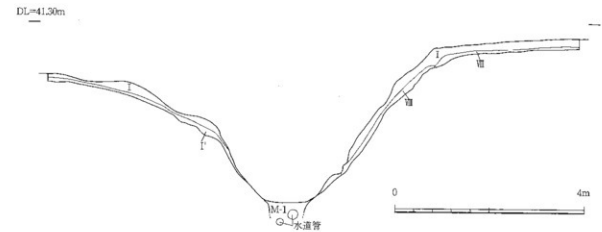


Fig.18 堀切断面図

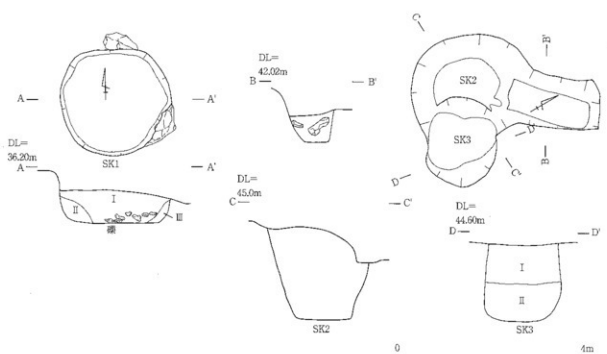


Fig.19 土坑（SK1～3）平面及び断面図

堀切部分の堆積状況：堀切付近の基盤層は，風化度の高い優白質泥岩が優勢であり，岩盤が脆い。堀切の底部付近は昭和の水道管埋設工事の際に破壊されている。側面の斜面に，厚さ20㎝前後の表土を見るのみである。

土坑SK1の埋積状況：岩盤に掘削した不整円の平面形を呈する浅い土坑であり，底部は平らである。埋積土は，水酸化鉄が相対的に多い未熟土であり，底部付近には，径10㎝前後の角礫が含まれる。

土坑SK2・SK3の埋積状況：基盤は風化度の高い優白質の砂岩および泥岩であり，SK2が掘られた後，その東南縁部にSK3が掘り込まれている。更に，SK2の北東肩には，幅約55㎝の溝が有り，土坑内部に向かって斜降する。いずれの埋積土も気相率の高い礫混未熟土であり，SK3では，より多くの角礫を含む。

第5節　遺物

曽我城跡の調査で得られた遺物点数は，試掘の75点と本発掘の198点を合わせた総計273点であり，それぞれの器類別内訳は次表の通りである。詰や郭を主な対象に実施した試掘調査に比べ，その西側に連接する尾根の斜面部が大きな割合を占めた本発掘調査では，近代以降の陶磁器類の比率が上回る点を除くと，ほぼ類似の遺物構成を持つ。また，両者共に近世以降の遺物が大部分を占める点のほか，表土（Ⅰ層）やその直下層（Ⅱ層）からの出土が圧倒的であって，遺物包含の浅い点も共通している。本節では，これらの遺物を試掘調査，本発掘調査の順に器類，器種別に紹介した後，築城以前から廃城以後に至る人的活動の遺留としての視点から，遺物の時期を大別する。また，試掘で出土した龍泉窯系白胎青磁碗に挟在する黒胎部分の重要な含意について付論したい。

遺物の器類	試掘調査	本調査	小　計
石製ポイント		1	1
石鏃		1	1
砥石	1	2	3
土錘		1	1
土師器		1	1
須恵器		2	2
中国産青磁器	7	3	10
産地不明青磁器	1		1
国内産白磁器	7	24	31
国内産染付磁器	32	72	104
国内産鋼緑彩磁器		5	5
国内産多彩磁器		1	1
国内産色絵磁器	1	3	4
国内産鉄釉磁器		1	1
国内産多彩釉磁器		3	3
磁器製碍子		1	1
国内産鉄釉陶器	7	22	29
国内産鉄釉粗陶器	2	2	4
国内産銅緑彩釉陶器	2	1	3
国内産銅緑釉陶器		13	13
国内産灰釉陶器	5	4	9
国内産白泥釉陶器		2	2
国内産陶製擂鉢		1	1
国内産焼締粗陶器		1	1
国内産低温粗陶器		1	1
燻し瓦	1	30	31
タタラ製鉄滓	4		4
焼土塊	5		5
	小計75点	小計198点	総計273点

Tab.7　曽我城跡発掘調査の器類別出土点数対照表

1．　試掘調査の出土遺物

（1）石製品（Fig.20-1）

砥石の破片を1点のみ表面採取している。灰色の泥岩製であり，平滑な研磨使用の後，鋭器の先端で強く条研を重ねて使用を終えている。

（2）中国産青磁器（Fig.20-2～6）

微小な破片を含め，7点を得ている。いずれも浙江省南部の山間地帯で焼造された龍泉窯系青磁の特徴を持ち，詰や郭に設定したトレンチからの出土である。2、3は碗，4～6は皿に属す。

2は体部の丸い「円腹形」とし，口縁端を外反する。胎部の外面には，弁先の丸い広幅の蓮弁紋を浅刻する。厚さ0.5㎜の釉層には，微細な気泡の密在に加え，細かな貫入が多在するため，蓮弁紋の輪郭は不明瞭である。この破片については，灰白色の胎基質に“紫金土”の特徴を具える暗褐色の異相部分が明瞭に挟在するため，窯工業技術史の観点から，本章の「まとめ」において別論する。3は体部を直伸し，線刻の輪郭によって細長な弁紋を簡略に描き出す碗器である。破砕面の観察では，幅2㎜程の浅い片切彫り，すなわち劃花の技法によって胎表に細長い弁紋の輪郭を削り出す。4は，

口縁の数箇所を弁先状に張り出す菱花型の皿であり，「稜花皿」と称される。輪高台の外側で折腰したのち，口縁を緩く外反し，その内端と内底に，それぞれ二条の劃花をめぐらす。輪高台は轆轤左旋によって削り出し，内部を無釉とする。釉は若干酸化を帯びた緑灰色を呈し，外底の露胎は，冷却時の二次酸化によって紫褐色に変化している。釉中の気泡は不顕著ながら，微細な貫入が多在する。5は，4と同類の稜花皿に属す。6は，口縁を緩く内弯する円形の小皿であり，胎釉は4の稜花皿と酷似する。

（3）染付磁器（Fig.20-7～16）

酸化コバルトを呈色剤として，磁器の釉下に彩絵する染付磁は，合計32の破片を得ており，いずれも近世以降の国内製品である。絵付けの技法から類別すると，筆描22点，型紙摺印版5点，墨弾き2点，原体の特定が困難な印版によるもの2点，吹墨1点の順となる。

7、8は，墨弾きの手法を用いる角型器である。7は，外面に花弁と見られる文様の一部が見え，内面には紗綾捺紋を施す。8は，角部の口縁が高い器型であり，紋様のモチーフは不明である。両器ともに，胎土は純白であり，孔隙が少ない。釉中には粒径0.15㎜以下の気泡が浮留するが，その密度は低く，透光性、光沢ともに極めて強い。また，釉表まで拡散する青料中に径約0.05㎜以下の未溶顆粒が密在する点でも，共通性を持つ。

9～11は，筆描の碗器である。9は，純白の胎中に鉄斑が僅少であり，孔隙も少ない。熔釉の粘性は強めであり，釉表の露泡痕がやや目立つ。青料は若干灰色味を帯び，径0.1㎜以下の未溶顆粒が低密に分布する。10は，薄手の丸碗であるが，磁胎の透光性は低い。熔釉の粘性が強く，釉ムラを随見するほか，表面張力の強まる高台際では釉切れを生じている。厚さ0.2㎜を前後する釉層には，粒径0.15㎜以下の気泡が多留する。絵付けの青料は，やや紫色を帯び，径0.05㎜以下の未溶顆粒が散見される。11は，二重格子の紋様を染付する小型器の口縁片であり，胎のガラス化度が高く，半透光質である。釉中の気泡は低密ながら，釉表には微細な露泡痕が多留する。灰色味を帯びる青料中には，径0.03㎜以下の未溶顆粒が高密に分布するほか，鉄分あるいはマンガン等の挟雑が多く，特に絵付けの濃い口縁内端の圏線には，径0.4㎜以下の褐色斑が顕著に見られる。12は小皿であり，胎の光沢は鈍く，径0.4㎜以下の鉄斑が散見される。内面にのみ，濃い青料の点画を素早く施す。青料は未溶顆粒が不顕著ながら，灰青色を呈する。熔釉の粘性は高く，粒径0.1㎜以下の気泡が密留し，透光性は弱い。

13は文字紋を施すそば猪口である。胎はガラス化度が高く，孔隙が少ない。釉中には，径0.25㎜以下の大粒の気泡が多留するほか，斜長石の針晶が主と見られる乳白色の微細な集合体が高密に分布する。濃厚に筆描された絵付け箇所では，青料の拡散部分に針晶集合体が希薄なことから，釉層白濁の主因は，胎釉の過激な反応であろう。青料中には，径0.05㎜以下の未溶顆粒が分布する。

14、15は，型紙摺で染め付ける口縁片である。前者の内面に見られる連続紋は，略化した輪宝繋と解される。後者の外面を飾る主紋は，桐葉であろう。また，後者内面の圏線帯には，青料の飛散が著しい。両者の胎釉に大差を見ないが，青料の溶解と拡散の状況には，大きな相違が有る。前者の未溶顆粒は，高密ながら径0.01㎜以下の微粒に止まるが，後者では，径0.3㎜以下の粗粒が多在し，釉中への拡散度も低い。呈色は，後者の赤味がやや強く，濃所からは青紫色の視感を受ける。

16は，体部に染付を施し，口縁に酸化鉄の点彩を飛ばす小盃であり，磁胎は純白で，ガラス化度が非常に高い。釉中気泡の粒径は1㎜以下であり，浮留密度が非常に低く，釉の透光性は高い。この胎釉の性能は，現代の精磁の水準に達している。

（4）鉄釉陶器（Fig.20-17）

気密性の高い暗褐色胎の鉄釉陶片6点や，粗陶タイプの鉄釉陶片2点のほか，17に図示する輪高台付き皿片を1点のみ得ている。亀裂を多発した橙色の胎中には，径0.4㎜以下の白色長石や赤色の珪長質粒子の他，径0.2㎜以下の石英粒子が含まれる。ガラス化度の高い0.8㎜厚の釉中には，粒径0.5㎜以下の気泡が低密に浮留する一方，釉表に脱泡痕（ピンホール）が多留する点から，熔融の強い粘性が看取される。貫入の密度は低めであり，胎釉の接触面には，厚さ0.1㎜の中間層（半透灰白色）を形成している。

（5）銅緑彩釉陶器（Fig.20-18）

口縁を酸化銅で縁どり，透明釉で覆う陶器であり，小碗を1点のみ得ている。気密性の高い硬質胎は，酸化により若干の黄色味を帯びる。気泡の極少ない釉層には，細密な貫入が密生し，緑彩は釉中にムラなく拡散する。胎釉の接触部分では，厚さ約0.05㎜の白色の中間層を形成している。

（6）色絵磁器（Fig.20-19）

透明の釉上に赤彩を施す赤絵磁鉢の破片が1点のみ出土している。胎はガラス化度が高く，孔隙が少ない。厚さ0.25㎜の釉層には気泡が少なく，透光性、光沢ともに極めて強い。厚さ約0.02㎜の上絵赤彩は，釉層の上面に留まり，釉面との反応は軽微である。赤彩は外面にのみ施し，口縁直下の圏線に主紋の上端が重なる。

（7）陶器（類別不明：Fig.20-20）

帰属の判別が困難な暗褐色胎陶器の口縁片である。形態的には，古代における須恵器の供膳具に類するが，器表の着釉状況は，須恵器に随伴し得る自然釉や古代の灰釉と比べ，別種の外見を帯びる。多鉄質の胎中には，粒径0.2㎜以下の石英晶体が多在するが，孔隙は微細である。厚さ0.05㎜前後の釉層には，粒径0.02㎜以下の気泡が低密に留在する一方，胎中からの脱ガスは釉面の随所に径1㎜以下の粗いピンホールを留める。釉層は，乳白色の結晶集合体を多発して白濁している。この種の多鉄胎には融媒成分が多く，釉薬や薪燃料の降灰との熱反応が促進されるため，厚みの少ない釉層の性質を，外見から判定するのは難しい。

（8）鉄滓

4点の小塊を得ている。いずれも，タタラ製鉄の経緯を示す木炭片を含む。

2．本発掘調査の出土遺物（Fig.21-21～Fig.23-68）

（1）旧石器（Fig.21-21）

暗灰色の頁岩製ポイントであり，両面の縁片を剥離して，鋭角とする。縄文時代の直前にあたる後期旧石器時代末の製品であり，詰において1点のみを表面採取した。

（2）新石器（Fig.21-22）

弥生時代の石鏃であり，2郭下の南西斜面において，明褐色の粘土層から単独で出土した。水蝕

によって石表が著しく白化しており，フッ素に弱い珪璃質成分の多在を物語るが，石種の特定には至らない。なお，当遺跡では，この石錐の他に弥生時代と特定できる遺物を得ていない。

（3）砥石（Fig.21-23, 24）

2点を得ている。23は，石英質砂岩製の荒砥であり，遺存する使用面には，全て平滑な研磨の痕跡が見られる。後者の24は灰色泥岩製の細砥であり，やはり平滑な研磨の痕跡を留めている。

（4）土錘（Fig.21-25）

1点のみの出土である。径0.5㎜以下の雑多な砂粒を多含し，弱い酸化を帯びる。土錘としては硬質の部類に属し，中空円筒型を呈する。

（5）土師器（Fig.21-26）

平坦部4から1点のみ細片を得ている。橙色の胎中には，径2㎜以下の石英粒子を多含する。器型、年代ともに不明である。

（6）須恵器（Fig.21-27）

小片一点のみの出土であり，平坦部4下の南斜面表土層から得ている。小鉢形の体部であり，復元口径は約6.2㎝と極めて小さい。胎は多鉄胎に属し，酸化勝ちの焼成気氛を反映する褐色を呈す。少量の脱鉄縞を交え，径0.2㎜以下の石英粒子を多含（破砕面の露出比≒40%）する。焼成の最終段階から窯の密閉に至る過程で還元を受け，0.1㎜厚の自然釉層は灰緑色を呈す。可塑原料としては，鉄分とアルミナに富む，高風化度の粘土を用いるものと見られる。

（7）中国産青磁器（Fig.21-28～30）

龍泉窯系の青磁片を3点得ている。28は，堀切下北斜面のⅠ～Ⅱ層から出土した皿の底部であり，輪高台の内部を無釉とする。胎は灰白色を呈するが，露胎箇所の表面は酸化を受けて灰褐色に変じている。釉の厚さは約2㎜を測り，中間層は1.5㎜前後と厚い。熔釉の粘性は極めて強く，釉ムラやピンホールが多在する。釉中には，粒径0.5㎜以下の気泡が密在し，釉色は粉青に近い。折腰型であり，稜花皿に属す可能性が高い。29、30の2点は，詰で表面採取した青磁の体部片である。前者では，灰白色の胎を緑灰色の釉が覆い，内面には劃花の施紋が見られる。後者では，若干褐色味を帯びた灰白色の胎を，灰緑色の釉が覆い，施紋は見られない。

（8）白磁器（Fig.21-31～35）

合計24片を得ており，いずれも近世以降の国内産である。31は，高台径の小さい皿であり，内底を蛇の目状に釉剥ぎして，重ね焼きの仕様とする。高台の内部には，「一」字状の露胎箇所が見られ，支具の痕跡の可能性も考えられる。胎内には，約1㎜以下の亀裂が高密に分布し，素質の透光性は低い。熔釉の粘性は高く，厚さ0.2㎜の釉層には，粒径0.1㎜以下の気泡が多留し，失透気味である。32は，平坦部4の表土中から得た小皿の体部であり，胎釉の特徴が31と酷似する。33は表面採取である。筒型の湯飲みと見られ，口縁の外面を一段減厚する。内面の施釉は，口縁部に止める。気泡の低密な失透釉であり，釉剤に白土を混和した可能性が考えられる。34、35も表面採取である。いずれも，胎の気密性が極めて高い近世以降の精磁であり，前者は盃，後者は胴足を欠損した瓜首である。

（9）染付磁器（Fig.22-36～Fig.23-63）

合計72片を得ており，いずれも近世から近現代までの国産品である。絵付けの技法で類別すると，筆描39点，吹墨1点，印章押し1点，型紙摺21点，銅版転写8点，原体不明の転写2点となる。

Fig.22-36～50は筆描であり，近世のものが多い。それらのうち，36～42は碗の破片である。36は，体部外面を一条線の網目紋，内面の口縁帯を波紋とする。胎中には，0.2㎜以下の石英粒子を多含し，鉄斑の分布が目に付く。絵付けの青料は，薄い灰青色を呈し，釉中への拡散は軽度に止まる。37の底部片は器壁が厚く，内底には，重ね焼きの痕跡が高台サイズの輪状に残る。胎は純白を呈し，粒径0.6㎜以下の孔隙が散見される。熔釉の粘性は高く，厚さ0.4㎜の釉層には，粒径0.3㎜以下の気泡が多留する。高台の釉切れ箇所に露出する青料は，酸化して濃褐色を呈する。38の底部片も純白の厚胎とするが，胎中の孔隙は少ない。青料は若干の灰色味を帯び，未溶顆粒は見られない。39は薄手の体部片であり，純白の胎中に0.8㎜以下の鉄斑が分布する。青料は，薄い灰青を呈し，未溶顆粒は見られない。40、41は，同類の二重格子紋を施す小碗であり，いずれの青料も灰青色を呈するが，各0.15㎜、0.20㎜厚の釉層は，気泡の浮留密度に大差があり，前者が高密である。42の口縁片では，青料中に径0.05㎜以下未溶顆粒が分布する。青料の濃所において暗褐色の鉄斑を浮現する点は，41の場合と同様である。43は，外面に松葉紋を施す小径器であり，濃青の青料を失透性の釉薬が覆う。釉中には，粒径約0.006㎜以下の微細気泡が低密に分布する程度であり，失透の原因は，乳白色の結晶集合体の多発にある。個々の結晶は，0.05㎜以下の針晶であり，斜長石の一種と見られる。44は，原料、技法の両面において，極めて高品質の製品である。胎の気密性が高く，鉄斑は径0.01㎜以下の微斑を小見するに止まる。厚さ0.02㎜の釉層には，気泡の浮留が少なく，青料は，若干の灰色味を帯びる。外面には，中国風の箆さばきで芭蕉紋と結帯が描かれる。器高の低さと，紋篩が外面に偏在する点から，蓋に復元したが，皿状の器の可能性も残る。45は，外面の口縁帯に略化した雨降り紋を施す小皿であり，胎釉ともに気密性が高い。明度の低い青料中には，径0.002㎜以下の微細な未溶顆粒が分布する。46、47は，内底を蛇の目状に釉剥ぎする小皿である。前者では，厚さ0.15㎜の釉層に気泡の浮留が少なく，2㎜画程度の細かい貫入を生じている。青料は灰色味を帯び，径0.3㎜以下の未溶顆粒が多在する。後者の胎中には，径1㎜以下の孔隙が多在し，厚さ0.4㎜の釉層には，粒径0.1㎜以下の気泡が多留する。青料は淡青を呈し，その拡散は胎面付近に止まる。48は，二重方形枠の印章紋に染付を施す小皿であり，外底は高台の簡略形である碁笥底状を呈する。内底の印紋部分の胎面は，最大0.2㎜下凹する。49、50は，体部の細片であり，紋様構成は不明である。前者は青料を濃厚に施すが，呈色は青を保つ。後者の胎中には，径0.3㎜以下の鉄斑を小見し，若干紫色を帯びた青料中には，径0.05㎜以下の未溶顆粒が分布する。

51～56は，型紙摺の技法で細かい絵付けを施す。51は碗であり，内底には竹梅紋を配する。胎は純白で，ガラス化度が高いが，径2.5㎜以下の粗大な孔隙が目立ち，亀裂状を呈するものが優勢である。青料は濃青を呈し，胎表付近よりも釉表付近での呈色が濃い。高台側面の圏線は，一周して食い違う。52の口縁片では，外面に「祝」字が見え，内面の口縁帯には，略化した輪宝繋紋をめぐらす。53では，内外面の口縁帯を，それぞれ輪宝繋紋、青海波とする。54は，遺存の比較的良好な皿であり，内面には松竹梅紋を細密に摺込み，外面には唐草様の草花紋が見える。轆轤で成形し，重ね焼きの仕様とする。高台内部を外浅内深形の二段として，外段の着釉を削り取り，内底には，器

同士の融結を防ぐ支具の点状目跡を五つ留める。胎中には，10㎜以下の亀裂が多在する。Fig.23-55～56は，細密度の高い紋様を摺込む。前者では，内外両面を菊花紋とし，青料の濃所では暗褐色の鉄錆斑の浮現も見られる。後者では，内面を無紋無釉とし，外面には飛鶴を摺込む。青料中には0.2㎜以下の未溶顆粒が多在し，青料の着胎箇所では，胎面の下凹が認められる。

57～61は，1888年に西洋から導入した銅版転写の技術で絵付けを施す。57の胎中には，径0.5㎜以下の孔隙が多在し，0.3㎜以下の鉄斑が分布する。釉層には，気泡の浮留が少なく，青料の濃所には，暗褐色の鉄錆斑が僅かに浮現する。58では，体部の外面に枠付きの文字紋，内面の口縁帯に輪宝繋状の連続紋をめぐらす。59では，体部外面に菊花と見られる文様の一部が見える。皿か蓋か判然としない。釉面は，霧状に白濁しており，アルミナの多い白泥漿を吹き付けた可能性が考えられる。青料の拡散は，概ね白濁成分の下位に止まり，青料中には，径0.2㎜以下の未溶顆粒が高密に分布する。60は盃状の小器であり，内面にのみ，絵付けを転写する。輪郭線の内部を細かい間隔の逆行線によって埋め尽くし，植物を背景に二兎を描く。濃青色を呈する青料中には，径0.01㎜以下の未溶顆粒が密在する。61の細片では，厚さ0.3㎜の釉層に乳白色の針晶が多発しており，胎成分の焼出が考えられる。青料は濃青を呈するが，施紋が途切れており，紋様構成は不明である。62、63は，いずれも転写技法を特定し得ない皿である。前者の内底には，「寿」字が見える。後者は，型押し成形によって口縁直下を輪花形とし，内面に庭景色を転写する。

(10) 釉下緑彩磁器（Fig.23-64）

合計5片を得ており，いずれも銅版転写の絵付けである。64は，型成形とし，口縁の内面に花弁と矢羽の紋様が見える。胎のガラス化度は高めながら，1㎜以下の亀裂状の孔隙が目立つ。彩料の大部分は，0.03㎜程度の厚みで胎表に密着しており，痕微量の成分が釉表まで拡散する。

(11) 鉄釉陶器（Fig.23-65～67）

多量の酸化鉄を呈色剤として，釉層を褐色～黒色に焼き上げる陶器であり，合計33片を得ている。それらのうち，気密性の高い多鉄胎の破片が29点を占め，粗陶片は4点に止まる。65～67は，いずれも前者の皿である。65では，外面の釉層が還元性の黒色勝ち，内面の釉層が酸化性の褐色勝ちとなっている。66では，外面の施釉が底部に及ばず，内面には，蛇の目状の釉剥ぎを施して，重ね焼きの仕様とする。胎中には，径0.2㎜以下の孔隙が分布し，0.4㎜以下の石英粒子を散見する。厚さ約0.2㎜の釉層は，ガラス化度が高く，気泡が少ない。釉表は，暗赤褐色の基質中に，黒色の結晶鉄葬が斑状に分布しており，特に器の下位に多い。67も，外面の施釉が底部に及ばない。黒褐色の胎中には，径0.8㎜以下の孔隙と径0.5㎜以下の石英粒子を散見する。厚さ0.1㎜の釉層には，気泡が見られず，約0.05㎜厚の中間層は白色を呈す。釉の呈色は，褐色をベースとするが，釉表には，黄緑、青白、白色等の窯変が加わる。これらの窯変のうち，白色のものは，釉表に生じた針晶の集合体から成り，低密の部分では，径0.3㎜程度の放射形を成す。針晶の長さは，最大で0.4㎜程度であり，斜長石の類と考えられる。黄緑、青白色の部分については，還かに微細な鉱物結晶から成るものと見られる。

(12) 鉄釉磁器（Fig.23-68）

磁胎を鉄釉が覆う鉢形器の口縁片であり，1点のみの出土である。内外面の施釉ながら，口縁の上

端を剥釉しており，伏せ焼きの仕様と見られる。胎はガラス化が進行しているが，径2㎜以下の孔隙が低密に分布する。厚さ0.1㎜の釉層は，ガラス化度が高く，径0.5㎜以下の気泡を散見するに止まる。釉中には，放射状の針晶集合体が稀に見られ，釉表は，様々な結晶体によって覆われる。

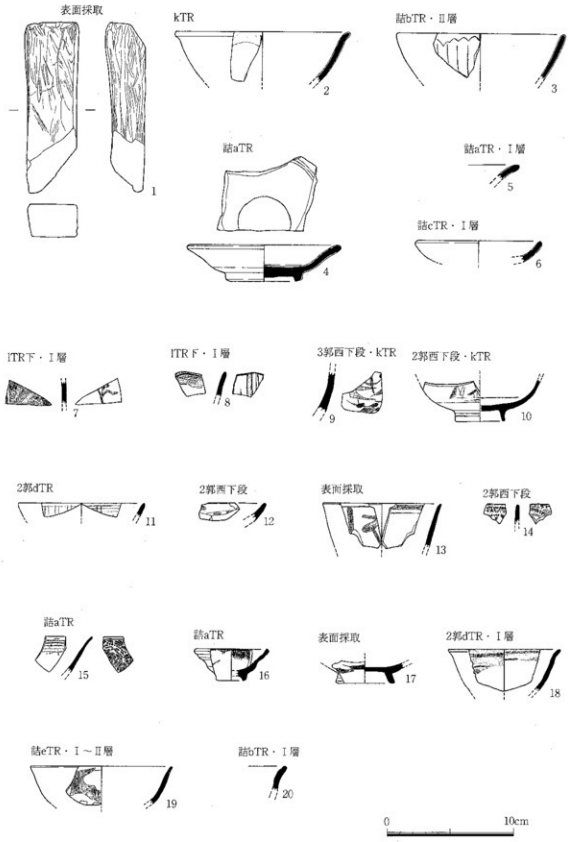


Fig.20 遺物実測図1

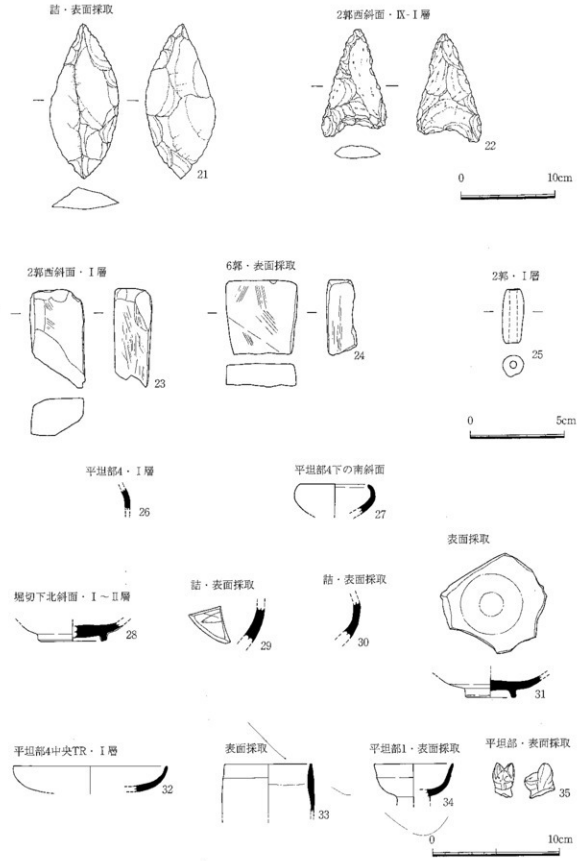


Fig.21　遺物実測図2

Fig.22 遺物実測図3

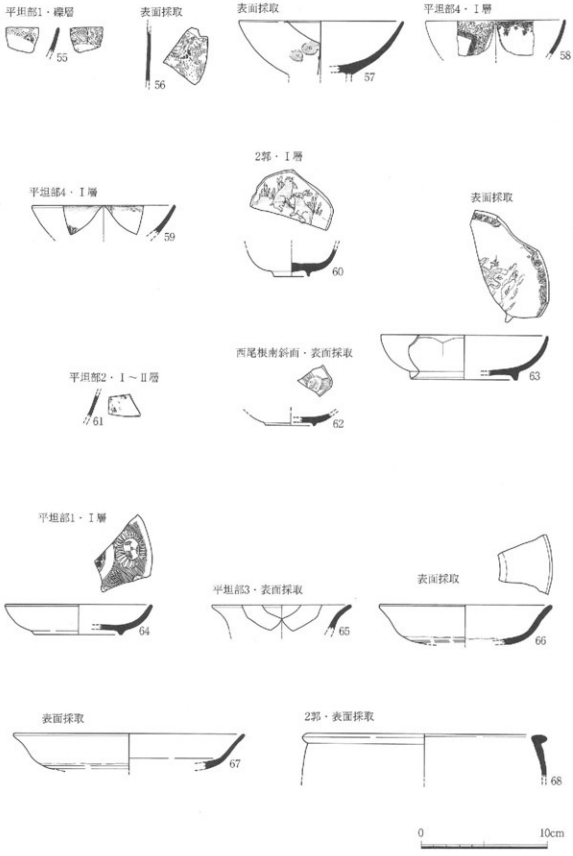


Fig.23　遺物実測図4

挿図番号	調査区・層位	器 類	器 種	部 位	口径cm	器高cm	底径cm	主紋	施紋技法	推定年代
Fig.20-1	表面採取	石製品；泥岩製	砥石							不明
Fig.20-2	kTR	中国龍泉窯系青磁	碗	口縁～体部	≒13.5	4.0	不明	蓮弁	浅刻片切彫	14c後半～15c中葉頃
Fig.20-3	詰bTR・II層	中国龍泉窯系青磁	碗	口縁～体部	≒13.0	3.7	不明	蓮弁	浅刻片切彫	15c後半～16c前半頃
Fig.20-4	詰aTR	中国龍泉窯系青磁	皿	口縁～高台	≒11.7	2.9	6.0	劃線	劃花	15c後半～16c前半頃
Fig.20-5	詰aTR・I層	中国龍泉窯系青磁	皿	口縁	不明	1.2	不明			15c後半～16c前半頃
Fig.20-6	詰cTR・I層	中国龍泉窯系青磁	皿	口縁	≒9.5	1.7	不明			15c後半～16c前半頃
Fig.20-7	ITR・I層	肥前系染付磁	角型器	体部	不明	2.1	不明	紗綾形	墨弾き	17c後半頃
Fig.20-8	ITR下・I層	肥前系染付磁	角型器	口縁	不明	2.0	不明	不明	墨弾き	17c後半以降
Fig.20-9	3郭STR・I層	肥前系染付磁	碗	体部	不明	3.3	不明	不明	筆描	近世
Fig.20-10	2郭西下段・kTR	肥前系染付磁	碗	体部～高台	不明	3.2	3.7	不明	筆描	18c頃
Fig.20-11	2郭dTR	肥前系染付磁	碗	口縁	≒10.0	1.1	不明	二重格子	筆描	近世
Fig.20-12	2郭西下段	肥前系染付磁	皿	口縁	不明	1.4	不明	不明	筆描	18c頃
Fig.20-13	表面採取	国内産染付磁	そば猪口	口縁～体部	≒9.3	3.5	不明	文字	筆描	18c～19c前半頃
Fig.20-14	2郭西下段	国内産染付磁	不明	口縁	不明	1.6	不明	輪宝繋	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.20-15	詰aTR	国内産染付磁	不明	口縁	不明	2.8	不明	桐葉	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.20-16	詰aTR	飛鉋彩染付磁	蓋	口縁～高台	≒5.6	2.5	2.2	不明	筆描	近世～近代
Fig.20-17	表面採取	瀬戸産鉄釉陶	皿	底部～高台	不明	1.7	4.4			近世中後期
Fig.20-18	2郭dTR・I層	国内産銅緑彩陶	小碗	口縁～体部	≒8.8	3.3	不明			近世
Fig.20-19	詰eTR・I～II層	国内産赤絵磁	鉢	口縁～体部	≒11.2	3.0	不明	不明	不明	近代
Fig.20-20	詰bTR・I層	国内産灰釉陶	不明	口縁	不明	2.0	不明			不明

Tab. 8 曽我城跡試掘調査の出土遺物観察表

挿図番号	調査区・層位	器 類	器 種	部 位	口径cm	器高cm	底径cm	主紋	施紋技法	推定年代
Fig.21-21	詰・表面採取	打製石器・頁岩製	ポイント	完形						後期旧石器時代末
Fig.21-22	2郭西斜面・IX-1層	打製石器・石種不明	鏃	完形						弥生時代
Fig.21-23	2郭西斜面・I層	石製品；砂岩製	砥石							不明
Fig.21-24	6郭・表面採取	石製品；泥岩製	砥石							不明
Fig.21-25	2郭・I層	土製品	土錘							不明
Fig.21-26	平坦部4・I層	土師器	不明							不明
Fig.21-27	平坦部4下の南斜面	須恵器	小鉢	口縁～体部	≒5.4	2.3				平安時代後期頃
Fig.21-28	堀切下北斜面・I～II層	中国龍泉窯系青磁	皿	底部～高台		1.4	4.8			15c後半～16c前半頃
Fig.21-29	詰・表面採取	中国龍泉窯系青磁	不明	体部		3.0				不明
Fig.21-30	詰・表面採取	中国龍泉窯系青磁	不明	体部		3.0				不明
Fig.21-31	表面採取	肥前系白磁	皿	底部～高台		1.7	3.8			17c中葉頃
Fig.21-32	平坦部4中央TR・I層	肥前系白磁	皿	口縁～底部	≒12.0	2.1				17c中葉頃
Fig.21-33	表面採取	国内産白磁	湯飲み	口縁～体部	≒6.9	3.9				不明
Fig.21-34	平坦部1・表面採取	国内産白磁	盃	口縁～足部	≒6.2	3.0				近代以降
Fig.21-35	平坦部・表面採取	国内産白磁	瓶頭			1.8				近代以降
Fig.22-36	平坦部4・I層	肥前系染付磁	小碗	口縁～体部	≒10.0	3.7		網目	筆描	17c後半頃
Fig.22-37	2郭・I層	肥前系染付磁	碗	底部～高台		2.2	4.3		筆描	近世
Fig.22-38	表面採取	国内産染付磁	碗	底部		2.1			筆描	近世以降
Fig.22-39	表面採取	肥前系染付磁	碗	体部		3.8			筆描	近世
Fig.22-40	堀切下北斜面・I層	肥前系染付磁	碗	口縁～底部	≒10.9	4.0		二重格子	筆描	近世
Fig.22-41	2郭・I～II層	肥前系染付磁	小碗	口縁	≒9.9	1.6		二重格子	筆描	近世
Fig.22-42	平坦部4・I層	肥前系染付磁	碗	口縁		2.7			筆描	近世
Fig.22-43	西尾根北斜面林道・表採	国内産染付磁	不明	口縁～体部	≒8.6	2.2		松葉	筆描	近世～近代
Fig.22-44	表面採取	肥前系染付磁	蓋	口縁		2.6		芭蕉	筆描	17c後半～18c前半頃
Fig.22-45	平坦部4・I層	肥前系染付磁	小皿	口縁	≒7.6	1.5		雨降	筆描	18c前半
Fig.22-46	表面採取	肥前系染付磁	小皿	口縁	≒9.4	1.3			筆描	18c以降
Fig.22-47	表面採取	国内産染付磁	皿	底部～高台		1.1	4.0		筆描	18c以降
Fig.22-48	2郭・I～II層	国内産染付磁	皿	底部～高台		0.9	5.4	文字	印章	近世以降
Fig.22-49	西尾根南斜面・ベルト	国内産染付磁	不明	体部		2.1		不明	筆描	近世以降
Fig.22-50	西尾根南斜面・ベルト	国内産染付磁	不明	体部		2.4		不明	筆描	近世以降
Fig.22-51	平坦部3・I～II層	国内産染付磁	碗	体部～高台		2.5	4.0	竹梅	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.22-52	堀切付近南斜面・I層	国内産染付磁	不明	口縁～体部		2.7		視字;輪宝繋	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.22-53	平坦部3・I層	国内産染付磁	不明	口縁		2.2		青海波;輪宝繋	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.22-54	堀切下北斜面・表面採取	国内産染付磁	皿	口縁～高台	≒13.5	3.3	7.6	松竹梅	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.23-55	平坦部1・礫層	国内産染付磁	不明	口縁		2.0		菊花	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.23-56	表面採取	国内産染付磁	不明	体部		4.5		飛鶴	型紙摺	19c末～20c初頭
Fig.23-57	表面採取	国内産染付磁	碗	口縁～底部	≒13.0	4.2		不明	銅版転写	1888年～20c
Fig.23-58	平坦部4・I層	国内産染付磁	碗	口縁～体部	≒11.0	2.8		文字;宝繋	銅版転写	1888年～20c
Fig.23-59	平坦部4・I層	国内産染付磁	皿	口縁	≒11.2	2.3		菊花	銅版転写	1888年～20c
Fig.23-60	2郭・I層	国内産染付磁	盃	体部～高台		2.2	2.8	双兎	銅版転写	1888年～20c
Fig.23-61	平坦部2・I～II層	国内産染付磁	不明	体部		1.7		葡萄	銅版転写	1888年～20c
Fig.23-62	西尾根南斜面・表面採取	国内産染付磁	皿	底部～高台		1.0		寿字	転写	1888年～20c
Fig.23-63	表面採取	国内産染付磁	皿	口縁～高台	≒13.0	3.5	8.4	庭園	転写	1888年～20c
Fig.23-64	平坦部1・I層	国内産銅緑彩磁	皿	口縁～高台	≒11.4	2.4		花卉;矢羽	銅版転写	1888年～20c
Fig.23-65	平坦部3・表面採取	国内産鉄釉陶	不明	口縁	≒10.8	2.0				近世
Fig.23-66	表面採取	国内産鉄釉陶	皿	口縁～底部	≒13.4	3.1				近世
Fig.23-67	表面採取	国内産鉄釉陶	皿	口縁～底部	≒18.0	2.8				近世
Fig.23-68	2郭・表面採取	国内産鉄釉磁	鉢	口縁～体部	≒18.4	3.4				近世以降

Tab. 9 曽我城跡本発掘調査の出土遺物観察表

第Ⅵ章　まとめ

第１節　曽我城跡の特色及び位置付け

曽我城跡の発掘調査は、試掘調査以来実に３年の経過を辿ることとなった。途中の工事変更や調査の中断などによって調査の方針が移り変わってきた。今次調査対象区は尾根線を中心とした部分であり、城跡の中心部分から外れた位置であった。しかも斜面部の調査が大部分を占めており、曽我城跡全体の遺構配置や各曲輪の状況については不明な点が多く残されている。しかしながら、従来の山城調査で見逃されがちな堀切を挟んだ外側、或いは斜面部にも視点を当て調査が行なえたことは、城跡の確認・保護と言った観点からも先駆的なものとなったと考える。

近年の膨大な発掘調査は、高知県の丘陵部にまで及んでおり貴重な山城が次々に破壊されている。その一方で城郭研究についての取り組みが様々な角度で進んでいる。半面、分野を越えた個別の研究は共有のものになりにくく、発掘調査結果を含めた総括的な展望が唱えられている。そうした中で曽我城跡の調査成果についても、今後の貴重な資料となることが予想される。[注1]

曽我城跡は、「小規模で遺構に何等特徴のない山城」の範疇と考えられ、戦国大名の意図が明確に表現される正に画期的な礎石建物・石垣・瓦を使用したもの[注2]、或いは虎口を中心としたこまやかな工夫が施されている城からすると、規模・機能・防御等あらゆる面で城の質や構造・目的が大きく異なるものである。[注3]曽我城跡のような小規模で特徴のない山城は西日本を中心に多く分布するようで、その機能した時間は15世紀後半から16世紀前半に位置付けられるものである。高知県においてもこの時期の山城発掘調査が多くなされており、縄張り研究と相俟って地域の特色が見い出されてきている。特に江ノ古城跡・ハナノシロ城跡・チシ古城跡・塩塚城跡[注4]など県西部の幡多郡内に位置しているもの[注5]が目立ち、これらの城の背景には地域の中心的人物とその政治的勢力の存在が考えられる。[注6]曽我城跡も例外ではなく、遺構出土の遺物等からして、この15世紀後半から16世紀前半に該当する。[注7]また、ハナノシロ城跡及び今後調査が予定されている中村市内に所在する間城跡や久木ノ城跡[注8]は非常に似通った要素を有している。その主な特徴として（１）河川の側に形成される，（２）城郭の規模が同じである，（３）縄張り上で幾つかの一定パターンが認められる。特に堀切の位置及びその外側のつくりが同じである，（４）時間的に短命である，（５）地検帳に記載が少なく、築城者が不明である，（６）出土遺物の内容や出土量等を挙げることができる。細かい検討が不十分であるが、これらの城は各河川の重要な場所に位置しており、この時期に同一手法の城で広範囲に勢力を及ぼせる者は土佐一条氏以外考えられない。また、これらの小規模で遺構・遺物の少ない山城も、地域史の中で何らかの役割を持って築城され使用されていたものであり、今回までの資料蓄積によってその機能性までも迫れるものと言えるだろう。[注9]

この時期の山城は麓の居館とのセット関係が一つの特徴であるが、試掘調査結果によると土居の可能性があった山裾部については常時水に悩まされる場所ではないかという感を受けた。また、伐採を行った後の地形を見てみると城の最も急峻な斜面に面しており、陽当りもあまり良くない。このような事から考え合わせると、当初考えていたいたような生活空間には適さないことが判明した。

仮に城とセット関係の土居が存在したならば、その位置は人の移動がスムースに行える場所、即ち現在山道が通っている付近と想定される。このことは地元の人が話す土器の出土地点からも窺えるが、現在の湊川によって既に壊されていることになる。この山裾部分は城を取り巻く自然の堀としての役割であったと考えられる。

丘陵部については、全体的に北側に面した所が残りが良く、南側に面した所は後世の土地利用として削平・改変が強いようである。確認した遺構・遺物の状況からすると、主郭・4郭を中心とした城の展開が想定される。

第2節 遺構

今回の調査によって確認された幾つかの遺構及びその可能性のあるものについて触れてきたが、明確な確認に至っておらず、山城の宿命的とでも言うべき後世における土地利用という大きな問題が所在する。出土遺物からしても明らかに改変された部分も認められており、畑地や果樹等の植林がなされていることは明白である。今回特に問題となるのが、平坦部・段状部と名称を付けた階段状の遺構として可能性のある平場である。出土遺物の状況から、城が機能した時期のもの、或いは後世のものといった両方の側面から考える必要がある。従って、他の調査事例を参考にしながら、今次調査の主目的である尾根線の防御施設という観点から考えられる遺構の機能と、後世の土地利用に関連する事項を挙げて若干の考察を述べ遺構のまとめとしたい。今後の事例の増加や明確な確認を待ちたい。

1．平坦部に関わる調査事例

曽我城跡の平坦部・段状部と同じ形態のものが幡多郡のハナノシロ城跡などで確認されている。[注10] また、県外においても熊本県竹崎城，長崎県魚目城，宮城県星野城跡，宮城県柳津館山館跡，或いは島根県尼子陣所跡などで報告例がある。[注11][注12][注13][注14][注15] 報告書に記載されている概要や規模等は次の通りである。

（1）ハナノシロ城跡

城跡の東側斜面において検出されたもので、数段に渡って人工的に削平を受けた部分を雛壇状遺構として名称を付けている。その規模は、幅が0.8～2.3m，長さ5.5～23.5mであり、調査担当者は大変優れた防御施設と位置付けている。

（2）竹崎城

重複帯曲輪状遺構群（階段状地形）として報告されている。それは標高74.8mの頂上部平場を囲み込むようにして所在する段々畑状の細長い階段状地形であり、17段にも亘っている。縦の長さは20～30m，横幅が5m前後，各々の区切りは3m前後の崖を有している。調査団はこの地形について2つの考えを持ち検討を行っている。即ち、築城当時の施設であるという視点と、後世の段々畑か植林の際の地形ではないかという視点であり、比較検討の結果城に伴う曲輪であるという積極的な見解を示している。

（3）魚目城

谷筋または尾根上に形成された数カ所の階段状地形を、参考構築物として報告している。城に直接関連のある構築物とは認めにくいとしながらも、築城当時の造成地を後世に利用した可能性も否定できないとしている。主郭部東南側の急傾斜谷部に構築された、総段数31段，200mを越える範囲について一部発掘調査が実施されている。しかし構築物の年代を予察される遺物の確認には至っておらず、将来的な判断資料としている。

（4）星野城

2つの尾根頂部の平場の東西の斜面に幅の狭い平坦面が数段連続している。発掘調査対象区では、岩盤を削り出した平坦面（平坦面1）と整地による平坦面（平坦面2・3）を検出しており、前者からは掘立柱建物跡が確認されている。他に幅の狭い平坦面（平坦面4・5・6）も見られ、これらは通路を兼ねた関連のある遺構と位置付けている。

（5）柳津館山館跡

5ヶ所の平場（A～E）の回りに階段状の平場が連続する。発掘調査では10基検出されており、段状遺構と報告している。斜面に対して横に細長く地山面を削り出して平坦面を形成したもので、長さ5m前後のもの，10m前後のもの，14m位のものがある。その幅は約3～5mである。ピットなどの遺構や14世紀後半から16世紀の遺物が確認されている。

（6）尼子陣所跡

調査区中央部に位置する西1郭を中心として、尾根線上を平坦に加工した平場が幾つか形成されている。東調査区の6段に亘る削平地からは、少量の遺物と溝状及び柱穴状の遺構が確認されている。

2．曽我城跡の段状部・平坦部との比較

曽我城跡発掘調査においてひとつの問題となる段状部・平坦部と名称を付けた平場を、各々上記調査事例と照らし合わせて検討してみたい。

（1）段状部について

今次調査区域内南斜面で5段に亘って認められ、ハナノシロ城跡の雛壇状遺構と非常に似通っている。ハナノシロ城跡では堀切より内側斜面に位置している点や、その規模が若干異なるものの、形状や地形が緩やかに窪みながら変化する場所に形成されている点、更には平坦部から平坦部までの距離等はほぼ同じである。雛壇状遺構という機能そのものを考えると、規模的にハナノシロ城跡よりも人の動きが容易であり敵の格好の的になることはない。そうした意味からすると、より雛壇状遺構というものに近いと考えられる。しかしながら堀切の外側にこのような防御施設が必要であろうか、更に大きく視野を展開して、小規模でしかもその城の機能上で、このような大規模な防御施設を築く必要があるのか疑問が残る。それよりも2郭南に形成された三日月状の平場状遺構が、城の施設としての可能性が高い。

（2）平坦部について

曽我城跡では平坦部が大きく2ヶ所認められる。即ち、城の前方部に7段に亘って連続するもの

と、今次調査で対象となった堀切より外側の後方に連続する５段の平坦部である。椿津館山館跡や尼子陣所跡では遺構・遺物を伴い明らかな曲輪と言えるものもあるが、竹崎城や魚目城の例では明確な位置付けは不可能である。曽我城跡の平坦部も竹崎城や魚目城と同様である。調査事例の担当者も指摘されているように、問題の所在は城の曲輪か或いは後世の段々畑かということであり、表土から地山までが浅く遺物の出土が見られないことが混乱を招いている。また、上層で新しい遺物が確認されても、築城当時の造成地を後世に利用した可能性も残る点も問題となる。山城の平場は大なり小なり何らかの後世の土地利用がなされていることが非常に多いのである。こうした平坦部の問題は調査事例も示すように調査員を悩ます点であり、今後も山城における発掘調査の大きな課題となろう。

3．考えられる防御施設及びその機能

城の防御施設として積極的な視野に立つと、先ず尾根線上に形成された連続する階段状の平場（平坦部１～４）は、堀切の範囲と捉えられる。尾根線と２郭の間には堀切（薬研堀）が１条形成されて防御の要となっている。しかし小規模な曽我城跡の最も重要な防御ラインでは、この堀切だけでは十分とは言えない。その上、背後が詰よりも高い位置にあり戦いが起こればたちまち形勢は不利な状況となる。そうした欠点を簡単な土木工事で補うのがこの手法である。堀切は尾根の鞍部に形成され、しかもその部分は最狭部となっており、薬研堀に繋がる段差も堀切的機能を有していると考えられ、尾根線上に大きな効力を持たせている。この段差は「階段状切岸面」とでも言うべき、故意に段差を設けることによって敵の一気の侵入を防ぐ機能を有している。

次ぎに南斜面に細長く形成された平場（段状部１～５）は、側面を突いてくる敵に最も意識を注がなければならない位置にあり、「階段状切岸面」をつくることによって傾斜を意識させている。また、上部からの迎撃が有利なものとなっている。更に尾根に削整を加えることによって尾根線に「土塁状効果」を持たせ、多勢の進入を阻んでいる。また平場の東端を堀切で終了する処置からは、堀切との相乗効果が窺える。このような作業によって、尾根線に２重３重の効果を挙げているのである。

4．後世の土地利用

今回検出された平場は畑の工学上[注16]でそのつくりが似通っている。畑は水田と違って必ずしも用排水路を必要とせず、山林や原野でも比較的簡単につくれるようである。普通階段畑の土工では崩壊や侵食の危険性から、斜面の中途に犬走り状の原地盤の一部を残すことが有効とされている。階段畑の造成工法には、階段を斜面の高位部からつくりはじめ順次低位部に向かって進む切盛土工法と、斜面の最下部の階段の基盤を切盛土工法で造成し上段（２段目）に移り、この断面の土を全部切土して下段へ落として順次３段目・４段目と作業を繰り返して上方へ進む全断面切土法の２種がある。その際、畑の面積は農作業の面からして最小限でも３m必要とされ、次の段までの高さは1.5～２m，階段斜面の傾斜角は60度以下となっている。

ミカン栽培では、品質に及ぼす影響は気象条件とくに気温の影響が最も大きいようである。中で[注17]

も冬の最低気温の占める割合が高いようで、その為日較差の低い海岸部での栽培が多く行なわれている。また、方位も考慮する必要があるようで、同じ場所の斜面でも日照時間の差異によって北面傾斜は利用せず、気温差にあまり影響のない南面傾斜を利用するようである。太平洋岸におけるミカン栽培は、気温・降水量の自然環境が適しており特に有名である。

高知県のみならず他県においても、このような畑の造成及び、海岸部でのみかんを中心とした果樹栽培は多くなされている。その地形・規模・位置等から今次対象区の平場もこうした土地利用との関連が想定できる。

第3節　遺物

試掘調査と本調査を通じて出土あるいは表面採取した遺物は，少数ながら旧石器から近現代の陶磁器にわたる。これらの遺物は，築城の遥か以前から極最近に至るまで，時には断続的に，あるいは継続的に何らかの人的活動が本遺跡地を舞台に行われて来たことを示している。その遺留とも言える既述の遺物を築城以前、山城の機能時期、廃城以後に大別すると，下記の状況となる。

（1）築城以前の遺物

最も古い遺物は，Fig.21-21に図示する頁岩製のポイント（槍先状の利器）であり，縄文時代の直前に当たる後期旧石器時代末の製品である。だだ1点であるが，詰の平坦地で表面採取された事実は，後の人的活動が深い地層まで及んだ結果であり，後出の遺物類の大半も表土付近に分布する状況を端的に裏付ける。

次に古い遺物は，Fig.21-22に図示する1点の石鏃であり，狩猟用から対人用へと大化した弥生時代の平均的サイズに近い。2郭下の南西斜面IX-1層からの出土である。

続く古墳時代から奈良時代にかけての特徴を持つ遺物は見られない。Fig.21-27は，小鉢形の須恵器であり，類似の器型が，平安時代後期の猿投窯K90号窯式・黒笹89号窯の出土須恵器中に見られる。しかし，その口径が約10cmを測るのに対し，本片の復元口径は約6.2cmと極めて小さく，その系統関係は不明である。

（2）山城機能時期の遺物

本遺跡が山城として機能した時期の推定に当たり，有力な判断材料となった遺物であり，すべて中国産の青磁片である。これらの青磁片は，総計10点を得ており，いずれも浙江省南部の山間地帯で焼造された龍泉窯系青磁の特徴を持つ。Fig.20-2の碗は，先端の丸い広幅の蓮弁紋を外面に浅刻する手法から14世紀後半～15世紀中葉頃の製品と見られる。Fig.20-3～6とFig.21-28の4点は，その復元器型や胎釉の相互比較から，ほぼ15世紀後半から16世紀前半頃を指標する製品である。

（3）廃城以後の遺物

土錘や砥石、鉄滓、陶磁器の微細片等，帰属が不明な若干の遺物を除くと，上記以外の遺物245点は，全て近世以降の国内産陶磁器類である。これらの約42％に当たる104点を染付磁器が占め，約13％に当たる31点を白磁（小片の場合，染付の無紋部分の可能性あり）が占めている。合わせて過半を占める白磁と染付について，その製造・流通時期を整理すると，近世初頭から近現代に至るま

で，ほぼ連続しており，これを年代順に追うと，以下の状況となる。

小結

まず，近世では肥前系の製品が目立つ。高台を小径とし，内底に蛇の目状の釉剥ぎを施すFig.21-31の白磁皿は，17世紀中葉頃の形態・手法を表しており，胎釉の特徴を共有するFig.21-32の白磁片も同時期の製品と見られる。Fig.20-7の染付片を飾る墨弾きの紗綾紋は，17世紀後半頃に多用される。これと同時期の筆描き染付は，蒲目紋を施すFig.22-36の碗であり，Fig.22-44に顕著な中国風の絵付けも，この頃より多見される。続く18世紀前半では，口縁帯装飾の一種である雨降り紋が簡略されて，Fig.22-45の小皿のような筆致となる。この18世紀は，磁器が庶民の生活に普及してゆく時代であり，Fig.20-12やFig.22-46・47のように，粗略な絵付けを素早く施し，蛇の目釉剥ぎの重ね焼き仕様とする小皿が量産される。Fig.20-13に見られるそば猪口の器型は，18世紀から19世紀前半にかけての流行である。Fig.20-11、Fig.22-40・41の碗類を染め付ける二重格子の紋様は，しばじは" 肥前系のそば猪口にも見られる。そば猪口は，18世紀から19世紀前半頃にかけて，各地方の製品を加えながら盛行する。文字紋を施すFig.20-13も，この期間の製品であろう。なお，Fig.20-17の鉄釉皿は，胎釉の特徴や高化した輪高台の形態から近世中後期の瀬戸産と見られる。Fig.23-65～67の多鉄胎鉄釉皿も蛇の目釉剥ぎを施す点等，近世の手法が濃厚であるが，産地は特定出来ない。

明治時代を迎え，19世紀の末葉に至ると，かつて江戸中期に行われた型紙摺の技法が新たに復興し，20世紀初頭まで流行する。濃青色の青料と，より細密煩瑣な紋飾を特徴とする新手の型紙摺染付は，Fig.20-14・15やFig.22-51～Fig.23-56等の図示破片を含め，合計26点を得ており，遺物総点数の9%を上回る。これらのうち，Fig.22-54は，高台内部を蛇の目形の段並作りとし，皿の内面に松竹梅を染付る。この器型と紋飾モチーフの組み合わせは，18世紀後半から伊万里で盛行しており，当該の破片は，明治以後の型紙摺による表現である。型紙摺で染め付ける他の破片も，胎釉や青料の点で，これと類似するものが多い。蛇の目型紙摺復興直後の明治21年（1888年）には，更に銅版転写の新技術が西洋から美濃に導入され，各地への普及とともに型紙摺を駆逐して行く。塩化鉄の水溶液で紋様部分を腐蝕させた銅版から，紙を介して器面へと転写絵付けする銅版転写の量産磁器は，Fig.23-57～61の染付以外にも，Fig.23-64に図示するような釉下緑彩磁の破片5点を得ている。

以上，遺物に対して試みた山城機能時期を挟む前後の年代別状況からは，築城以前の断続的かつ閑散とした人跡に対し，廃城から近現代にわたる連続的な人跡が窺える。

次に，技術史的に貴重な遺物として，試掘k-TRで得られたFig.20-2の青磁片を付論する。

付論：異相の多鉄胎を挟在する龍泉系白胎青磁碗片の持つ窯工業技術史上の含意

四万十川河口の中村市を中心に，幡多郡内からは中国産陶磁器の出土が多く，その突出した割合を龍泉窯系の青磁片が占める。中村市に隣接する大方町の曽我城跡からも，今回の調査で総計10点の龍泉系青磁片を得ているが，それらのうち，試掘k-TRで得られたFig.20-2の青磁碗片では，灰白色の胎中に暗褐色の異相塊が挟在する。この実例は，多鉄アルミナ珪酸塩鉱物の一種である紫金土の配合を示唆しており，一般の龍泉青磁胎と原鉱の比較から，帰結が不可避とされてきた窯工業技術史上の推論を裏付ける物証となる可能性が高い。

ここ数十年来，龍泉地区に産する青磁の胎中含鉄率が，白胎の場合でさえ2%を上回るのに対し，現地に埋蔵する瓷石原料の鉄分比が1%前後に止まる不整合が知られており，高アルミナ性・多鉄アルミナ珪酸塩鉱物の混入が推定されている。この種の鉱物原料を紫金土と称しており，土黄色から暗赤色を呈する塊状の原生が知られ，高火度の実験焼成を経た原鉱は，暗褐色から黒色の範囲で様々に呈色する。曽我城出土の当該片では，紫金土の性状を反映する異相塊が観察条件を満たすサイズ（断面では4×21㎜）で挟在しており，坏土作りの工程で主原料と混和未了に止まった結果と考えられる。ここでは，光学顕微鏡300倍以下の観察結果を記すと共に，中国で公表された龍泉青磁に関する各種試験データや所見との比較対照を行なう。

観察：破片の断面に露呈する特徴的部分を図示すると，下図の状況となる。まず，灰白色の胎基質T1に暗褐色の異相胎T2が塊状に挟在している。T1の基質は，ガラス化初期程度の段階に止まり，白味が強く，透光性が低い点等，アルミナ含率の高化が顕著化する元～明代の特徴を帯びる。径0.3㎜以下の石英粒子と径0.2㎜以下の黒色鉄斑が高い密度で分布し，径0.7㎜以下の熔洞（孔隙）が多在する。T2の基質は多鉄質・高アルミナ塁の特徴を持ち，透光性・光沢ともに極めて弱い。やはり，ガラス化初期程度の焼結段階に止まる。径0.2㎜以下の石英粒子を多含するほか，径0.2㎜以下の長石粒子や，径0.1㎜以下の赤色粒子を散見し，径0.7㎜以下の熔洞が多在する。Y1は，T1を覆う釉層部分であり，緑青を呈す。釉中には，径0.2㎜以下の石英粒子が分布し，径0.1㎜以下の赤色粒子も散見される。更に，粒径0.1㎜以下の気泡が密留し，釉層の透光性は低い。Y2は，釉層が多鉄胎T2と強く反応して融解した部分であり，胎表付近の熔洞や気孔を充填して，釉面の下凹を来している。Y2部分の層色は灰褐色を呈し，気泡の浮留が極めて少ない。C1は，灰白胎T1と釉層の接触部分に生じた中間層であり，結合の脆弱な白色層は極薄く，灰白半透質の堅固な気密層が約0.2㎜の厚さを測る。C2は，多鉄胎T2と釉層に挟まれた灰白胎T1部分であるが，ほぼ，白色の中間層と化している。釉の物理性能は，高粘質であり，仰焼時に表面張力がマイナスに作用する口縁端部でも減厚が少なく，プラスに作用する外面口縁下の弯曲部では，約2倍の増厚を生じている。また，特に外面の釉表には脱泡痕（ピンホール）の残留が目立ち，石灰・アルカリ釉の特徴を帯びる反面，内外の釉層には，3㎜間程度の細かい貫入を密生している。胎表には，先端が丸く弁稜の不顕著な蓮弁紋を浅刻しており，元末から明代前期（14世紀後半～15世紀中葉）頃の製品と見られる。

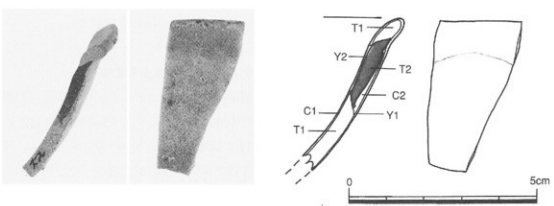


Fig.24　多鉄胎を挟在する龍泉窯系白胎青磁片（試掘k－TR出土：左・写真；右・実物大実測図）

龍泉青磁に対する科学的研究の概要：浙江省南部の山間に位置する龍泉県や，それに近隣する慶元、雲和、景寧、遂昌、松陽、麗水、縉雲、武義、永嘉、泰順、文成等の各県では，五代（南朝）の始窯期から清初に閉窯するまでの各期に，様々な器種の青磁を焼造しており，1930年代以来発見された窯址は四百余箇所にも及ぶ。[221] 辺境の峻険な山間地帯に広く展開する窯址の分布状況や，その操業規模の歴史的、量的な巨大さから，全貌の解明が著しく困難な磁窯体系の一つであり，龍泉地区を蛇行する龍泉渓や秦渓の両岸に窯址が最も密集する所から，それらの製品と目される青磁器類を，「龍泉青瓷」あるいは「龍泉窯青瓷」等と総称している。「龍泉青瓷」（龍泉青磁）に対する科学的研究は，歴代名窯の復興を重視した故・周恩来総理による「龍泉青瓷」生産復興の指示に端を発する。[223] これを承た1959年の国家軽工業部に於ける「歴史的名窯の復興に関する決定」（開於恢復歴史名窯的決定）に基き，科学研究、生産、芸術、文物考古等の部門を結集組織した，一連の実践的研究が開始された。このプロジェクトは，数年にして理化学分析や実験のデータを基礎とする研究成果を上げており，[224] 以後の龍泉青磁研究に貴重な基礎資料と，総合科学的な方向性を与えるものとなった。一連の研究を通じ，龍泉青磁を構成する胎釉が，宋代から元代にかけて成分組成を一変することが明らかとなり，胎釉相互の熱反応や，各期を特徴付ける物理的特性等との関係についても，有効な多くの所見が公表されている。

龍泉青磁の製法に触れる明代の文献：かつて，龍泉窯が青磁焼造の火炎を上げていた当時の製法に関しては，明代に成書した陸容の『菽園雑記』に次なる貴重な記載が有る。すなわち，「青瓷，初め劉田に於いて出づ。……泓は開ち竈之近地に於いて取る，其の他の處は皆及ばず，油は開ち諸山の中に取り，木葉を薪み燒煅して灰と成す，并びに当石芙の細なる者を渣取し，合わせて舂と為す……。」と綴る一文である。中国における伝統的な釉薬調合法や古磁片の分析データを踏まえ，今日では，前出の「油」字が石灰石を，後出の「油」字が「釉」を指し，「白石末」は，硬度の比較的高い斐石（陶石の類に相当：筆者注）を粉砕研磨した粉末に当たると理解されている。この解釈に立って上掲の一文を現代日本語に置き換えるならば，「青磁は劉田で生産が始まった。[225] ……原料土は窯場の近所で手に入れる。他の場所の原料土は，どれも品質が劣る。石灰石は，あちこちの山で採り，積んだ木の葉と一緒にじっくり焼いて灰にする。また，陶石の粉末を沈殿させて粒子の細かい部分を取り分け，先ほどの灰と調合して釉薬とする」という意味になり，坯原土の調達と，$CaO-K_2O$ 系石灰・アルカリ釉の製法に関する具体的記述であることが判明する。この種の釉薬に具わる特性は，同時代の製品と見られる当該片の観察結果と一致する。

龍泉地区の製磁鉱物原料：まず，胎釉の原料に供し得る現地の埋蔵鉱物類は，斐石（或いは斐土）、紫金土、及び石灰石に大別される。この種の斐石は，風化が不完全なものが大部分を占めることから，「斐土」に一括される場合も有る。更に中国では，斐石をも「斐土」と称する慣習があり，呼称不一致の一因を成すに止まらず，中国の古磁が風化度の高い“磁土”あるいは“粘土”を主用したとする大きな誤解を内外の一部に招いている。これら主要鉱物原料の概要は，次の状況となっている。

龍泉地区における斐石や斐土は，「主として大量の石英と一定量のカオリナイトおよび絹雲母」[226] から成る。それらを精製した坯土（素地土）の化学成分組成は，$[SiO_2=61\sim75\%,\ Al_2O_3=16\sim22\%,$

Fe_2O_3=0.3～1.3%，アルカリ金属酸化物（K_2O+Na_2O）=3～6%」の範囲にあり，一種あるいは二種の原料から磁胎を製し得ると報告される。紫金土に関しては，「外観が赤褐色を呈する塊状の土質原料であり，石英、長石粒子および含鉄鉱物を挟雑し，水簸後の可塑性は良好」であって，精製を経た坯土の化学成分組成は，「SiO_2=46～60%；Al_2O_3=22～28%；Fe_2O_3=4～9%；K_2O+Na_2O=2～5%の範囲にあり，スペクトル分析の結果から見ると，紫金土中には更に，Ti、Cu、Mn、Co、Ni等の微量呈色元素が含まれる」としている。石灰釉に用いる石灰石の来源としては，現在の龍泉瓷厳から約90kmの距離に位置する慶元県龍宮と，40kmの距離に位置する福建省浦城富嶺が挙げられる。前者は白色ながら，雑質が多めであり，後者は純白で，雑質が極少と報告されている。

龍泉青磁白胎の変遷：祝慈寿は，後漢から北宋に至る浙江諸窯産の青磁胎が，主として現地産の瓷石で製され，江蘇や江西、四川、広東等の青瓷胎と同様に，石英の多含によって高珪酸質の特徴を帯びる点を指摘した上，この種の高珪酸質胎では，「一般に胎中のSiO_2含率が74%以上であり，大部分は75～78%の範囲に在る；Al_2O_3の含率は低めであり，一般に14～19%の間に在る」としている。これと比較した場合，中国科学院上海硅酸塩化学与工学研究所が公表した，南宋早期から明代に至る龍泉青磁片9点の平均胎成分値は，SiO_2=69.76%，Al_2O_3=21.88%であり，Al_2O_3の含率が，5%強の増加を示す。これは，アルミナに富む粘土鉱物増量の反映であり，成形性と耐火性能の向上を物語る。また，融剤として作用するK_2OやNa_2Oの値は，元、明にかけて急増しており，風化度の低い硬質瓷石の多用が考えられる。また，K_2OやNa_2Oを含む長石成分に関しては，原鉱に対する外観観察の結果，源底産の瓷土のほか，大窯高際頭や宝溪産の紫金土中に混在が報告されている。しかし，長石は風化し易い固溶体であり，原鉱の種類というよりも，むしろ観察部位による風化度の高低差を考慮する必要が有ろう。また，精製を経た坯土に占めるK_2Oの値は，宝溪塢頭の瓷土を用いるものが5.14%の最高値を示し，朱岱口の紫金土を用いるものが最も低い1.43%の値を示している。

龍泉青磁釉の変遷：青磁釉の主な融剤はCaOとK_2Oであり，龍泉窯の青磁釉は，石灰釉と石灰・アルカリ釉に大別される。中国科学院上海硅酸塩化学与工学研究所のまとめでは，「北宋中期と南宋初期の釉中CaO含量が，13～16%にも達するのに対し，カリウムとナトリウムの含量合計は，僅か3.8%前後に過ぎず，基本的には石灰釉に属している。南宋の中晩期より，釉中のCaO含量が大幅な低下を開始する一方，K_2OとNa_2Oの合計含率は4.8～6.2%まで上昇し，元、明代に至っては，更に6.6～7.6%にも達する。従って，南宋中晩期（12世紀末～13世紀中葉頃：筆者注）以降では，いずれも石灰・アルカリ釉に属す」ものとしている。この石灰・アルカリ釉への移行により，釉の流動性が低下して，釉層の厚化が可能となる。釉中には，粒度の大きい気泡が抑制されて，微細な気泡の多密に変わり，透光性が低下した。採取磁片の化学組成に基く調合釉薬を用いた高温流動性の測定結果は，南宋初期、明代、南宋中晩期の順に低い値を示す。明代と南宋中晩期の間に大差はなく，ともに流動性が非常に低い。

龍泉青磁の焼成条件：上記した釉薬の高温流動性測定実験に供された磁片3点の焼成温度と，800～900℃以上の高温帯に於ける平均的ガス気氛は，南宋初期試料（碗片）1180℃±20℃；弱還元／南宋中晩期試料（窯炉足部）1230℃±20℃；還元／明代試料（碗片）1230℃±20℃；酸化となっている。また，釉層がガラス化末期の段階に達する南宋晩期の梅子釉青磁に関しては，焼成温度が約1250～

1280℃の範囲と推定されている。[註39]

胎釉の性状から見た当該磁片の焼成条件：曽我城跡で出土した当該碗片の胎T1は，白味の強い灰白であり，胎が灰色を帯びる主因は，酸化鉄や酸化チタンが高温下で還元化合する点にある。また，胎中に分布する黒色の鉄斑は，含鉄鉱物が還元熔解した結果と見られる。黒胎に酷似する異相塊T2の暗褐色の呈色からは，未還元酸化鉄の存在が窺え，中性～弱還元気氛を反映するものと考えられる。釉層は黄色味を帯びた淡い青緑であり，細泡の多密から粉青タイプに近似するが，宋代の粉青より気泡が粗い。釉の呈色剤である酸化鉄の含率は，龍泉青磁では一般に1%前後と低く，その来源に関しては，実験的手法によって各種挟雑成分を含有する紫金土の加入に絞られている。釉層の外観について，本片と類似の観察結果が記される龍泉大窯産の盤片（試料YL-1；元代；釉厚0.5～0.8㎜）では，酸化鉄含率が1.51%であり，龍泉青磁としては高い値を示す。また，抑制されたCaO(6.83%)に対し，K_2O（5.49%）とNa_2O(1.16%)の総和が均衡する典型的な石灰アルカリ釉に属す。[註40]その釉色については，“粉青帯黄緑”と形容しており，焼成気氛を「やや弱めの還元」と判定している。本片の釉層Y1も，流動性の低い石灰アルカリ釉に属し，焼成気氛についても，釉呈色のほか，胎釉中間層C1・C2が半透灰白～白色を呈する点，更に胎中に挟在する多鉄異相塊Y2が暗褐色を呈する点等から，上例と同じ弱還元気氛下の焼成が考えられる。[註41]

多鉄異相塊の物的性質：上記の性状を具える本片の白胎及び釉層が，異相塊T2と接する部分では，注目すべき幾つかの強い反応の跡が見られる。

まず，釉層が異相塊と直接する部分Y2では，胎釉が完全に融合してガラス化末期の状態に達し，体積の収縮を生じている。この点は，異相塊に含まれる融媒成分が白胎を大きく上回る点を証明する。龍泉地区に埋蔵する既報の胎原料（アルミナ珪酸塩鉱物）では，CaO、K_2O、Na_2O等の融媒含率に極端な差を見ないが，窯石や窯土の部類に比べ，紫金土では遥かに多量の酸化鉄と酸化チタン（酸化チタンは，窯土では源底産に微含されるのみ）を含み，両成分の含率は正比例の関係に在る。例えば，両成分の含率が最も高い大窯黄連坑の紫金土では，酸化鉄が13.85%，酸化チタンが2.00%もの値を示し，最も希薄な大窯高際頭の紫金土でも，酸化鉄3.11%に対して，酸化チタン0.45%が含まれる。問題の異相塊を高温弱還元の気氛下に於いて，暗褐色に呈色し得た融媒成分としては，紫金土に由来する酸化鉄や酸化チタンを推定するのが，最も合理的であろう。[註42]

次に注目すべき現象は，異相塊と釉層に挟まれた白胎が，中間層と同様の性状と化した不透光純白のC2部分である。青磁における白色中間層の形成は，弱還元気氛下で焼成する場合に生じ，白色化の原因の一つは，中間層に生じる酸化反応として説明される。[註43]龍泉等の南方窯とは逆に，高アルミナ・低珪酸型の胎と高珪酸・低アルミナ型の釉を組み合わせ，酸化の影響を楽しやすい窯炉・燃料の条件下で焼成する北方青磁において，白色中間層の形成が顕著な理由も，この酸化反応に在る。龍泉地区の8箇所に埋蔵する窯石や窯土のアルミナ含率が，平均16.50%であるのに対し，同地区の4箇所に埋蔵する紫金土の平均アルミナ含率は19.91%に達しており，胎中に紫金土が偏在する組成部分では，酸化反応の促進も生じ得る。龍泉青磁における胎釉中間層は，釉厚（平均約1㎜）に対して，一般に15%以上の厚みを持つ。[註44]厚さ0.5㎜の釉層Y1が白胎と接するC1面では，中間層の厚みが0.1㎜前後であり，龍泉青磁の平均値に近い。この部分は，気密性の強い灰白色半透光質部分が支配的な所

から，龍泉青磁に一般的な，「石英の晶体が減少し，ムライトの針晶体が増加する」タイプの堅固な中間層に属すと考えられる。これに対し，C2部分の中間層は，0.5～1.0㎜前後の厚層に達しており，酸化反応の促進が異相塊に起因する点を物証する。この点は，ガラス化の末期に達したY2部分が，酸化を帯びた灰褐色を呈する状況とも符合する。

多鉄異相胎を挟在する白胎青磁片の重要な意味：龍泉青磁は，その胎色から白胎青磁と，黒胎青磁に大別され，前者が歴代製品の主流である。黒胎青磁は，南宋期に多数の窯基に於いて白胎青磁と共に焼かれ，生産量の約10%を占める。黒胎に類する南宋中晩期の甌器片（試料番号S3-4）では，胎中の酸化鉄含率が歴代白胎の2倍に近い4.5%の値を示すと共に，アルミナ分も白胎を1/3程度上回る27.98%の分量を持ち，黒胎に於ける紫金土の混入を強く示唆する材料となっている。この例を含め，アルミナと酸化鉄の合計含率が，黒胎では29～36%に達するのに対し，同期の白胎では21～26%であり，この明瞭な差異は，「比較的多量の紫金土の混入」に由来するものと判定されている。

紫金土混入の利点としては，可塑性の向上や焼結温度の低下という生産性の利点のほか，青磁の釉色に深みを与える美的効果が挙げられる。紫金土の混入は，その典型例である黒胎青磁に止まらず，更に白胎青磁の大部分に対しても，その適用が推定されている。白胎に含まれる酸化鉄の平均含率は，宋代に於いて2%を上回り，顕著な低下を来す元～明代でも1.7%前後の値を保つ。これに対し，各埋蔵地点で採取した瓷石や瓷土の精製による坯土では，酸化鉄含率は0.51%から1.87%の間に在り，平均1.14%の値に止まる。約5割に当たる酸化鉄の不足に加え，これらの坯土には酸化チタンが含まれず，0.42%以下の酸化チタンを含む歴代白胎の成分組成を満たし得ない。周仁、張福康、鄭永圃らは，龍泉歴代青瓷の焼成技術を科学的に総括する著文において，「……これらの原料のみで調合するならば，明らかに上述の結果（瓷土原料を大きく上回る含鉄率：筆者注）には至らない。それゆえ，古代に於ける龍泉青磁胎の大部分に紫金土が混入されたものと推断し得る」と結論している。

曽我城跡から出土した当該の龍泉青磁碗片において，既述のような紫金土混在の外見と性能を明瞭に具える多鉄胎が挟在する理由としては，坯土精製工程に於ける粗略な練泥（練土）が考えられる。元代から明代にかけては，龍泉青磁の衰退期と評される一方，工芸的には難度の高い大型器種を量産しており，胎中のアルミナ含率を上げると共に，酸化鉄の含率を下げて，耐火性能の向上と熱収縮率の減少を目指している。結果として，この時期の胎は一般に宋代よりも白度が高く，「おそらく，景徳鎮白磁の影響」とする指摘も見られる。このように白度を高めた元～明代の磁胎ですら，通常の原料を上回る酸化鉄を含有する点は上述の通りであり，一般の龍泉青磁片と同様に，当該青磁片の白胎部分でも若干の灰色を帯びる他，径0.2㎜以下の黒色鉄斑が高密に分布する。これら鉄斑の原因となる含鉄雲母や鉄鉱等の雑質鉱物が，特に紫金土中に多く含まれる点も，紫金土混入の傍証となろう。

以上の諸点より，曽我城跡出土の龍泉青磁碗片に挟在する多鉄胎が，「古代に於ける龍泉青磁胎の大部分に紫金土が混入された」，あるいは「古代の龍泉青磁には，白胎、黒胎の別なく，いずれも一定量の紫金土が配合された」とする推断に一つの物証を加える可能性は高く，科学分析の対象価値を充分に具える，極めて貴重な実物資料と言える。

参考文献

【注】

1．千田嘉博　「中世城館研究の構想」「中世の城と考古学」1991

2．山上雅弘　「戦国時代の山城」－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について－「中世城郭研究論集」1990

3．中井均　「織豊系城郭の画期」－礎石建物・瓦・石垣の出現－『中世城郭研究論集』1990

4．曽我貴行　『江ノ古城跡』「中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1993

5．松田直則・竹村三葉『ハナノシロ城跡』「中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1993

6．吉成承三　『チシ古城跡』「高知西南地区大規模農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992

7．山本哲也　『塩塚城跡』中村市教育委員会　1987

8．中村宿毛道路建設工事に伴う発掘調査が今後予定されている。

9．（2）に同じ

10．（5）に同じ

11．『竹崎城』「熊本県文化財調査報告書17集」熊本県文化財保護協会　1975

12．『魚目城』「新魚目町文化財調査報告書第1集」長崎県新魚目町教育委員会　1984

13．『星野城跡』「東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」宮城県教育委員会・日本道路公団　1986

14．『柳津館山館跡』「東北地建バイパス関連遺跡調査報告書」宮城県教育委員会・東北地建仙台工事事務所　1984

15．『尼子陣所跡発掘調査報告書』島根県大和村教育委員会　1992

16．山崎不二夫　『農地工学』下　東京大学出版会　1981

17．『果樹全書 果樹共通技術』農文協編　社団法人農山漁村文化協会　1985

18，19，34，42，55：『龍泉青瓷原料的研究』周仁、郭演儀（中国科学院硅酸塩化学与工学研究所）、万慕義（国家軽工業部硅酸塩研究所）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

20，21，22：『龍泉青瓷簡史』朱伯謙（浙江省文物考古研究所）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

23，24：浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』序言，瞿翕武（浙江省副省長）執筆［1989年12月第1版・文物出版社］

25：『中国工業技術史』祝慈寿（上海財経大学）著［重慶出版社1995年6月第1版］；『龍泉青瓷原料的研究』周仁、郭演儀（中国科学院硅酸塩化学与工学研究所）、万慕義（国家軽工業部硅酸塩研究所）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

26，27，28，29，30，31，35：『龍泉青瓷生産工藝総結』葉宏明、労法盛（浙江省軽工業廳）、李国

槙、査永慶（国家軽工業部硅酸塩研究所）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

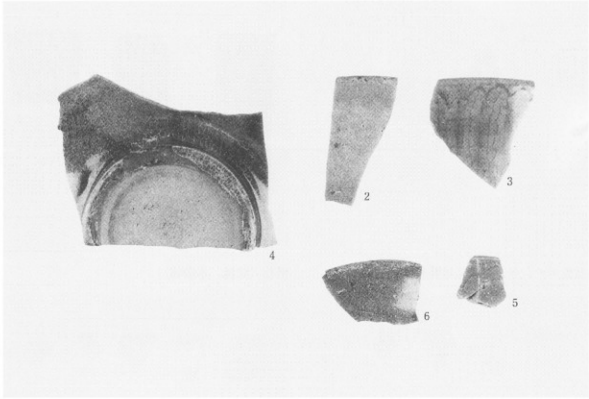
32，43，46，48，49，57：『中国工業技術史』祝慈寿（上海財経大学）著［重慶出版社1995年6月第1版］

33，36，37，38，39，40，41，47，51，52，53，54，56：『龍泉歴代青瓷焼制工藝的科学総結』周仁、張福康、鄭永圃（中国科学院硅酸塩化学与工学研究所）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

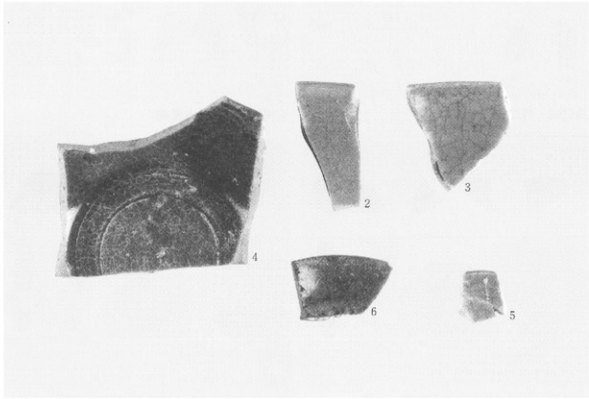
44，45：『龍泉青瓷釉的研究』李国楨（国家軽工業部硅酸塩研究所）、葉宏明（浙江省軽工業廳）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

50：『中国工業技術史』祝慈寿（上海財経大学）著［重慶出版社1995年6月第1版］；『龍泉歴代青瓷焼制工藝的科学総結』周仁、張福康、鄭永圃（中国科学院硅酸塩化学与工学研究所）執筆［浙江省軽工業廳編『龍泉青瓷研究』1989年12月第1版・文物出版社，所収録］

写真図版

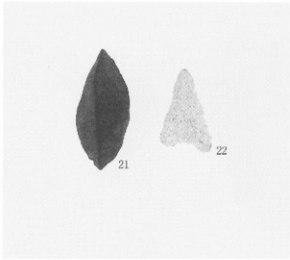


中国産龍泉窯系青磁　外面（試堀）

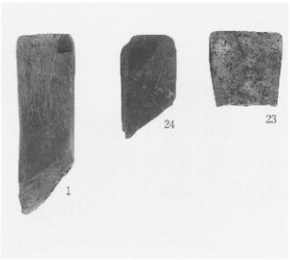


中国産龍泉窯系青磁　内面（試堀）

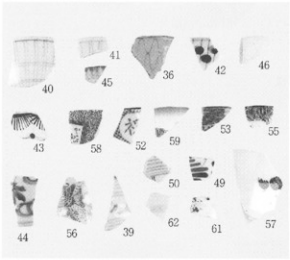
PL.4



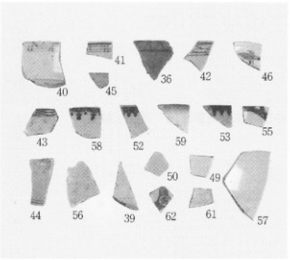
石製ポイント・石鏃（本発掘）



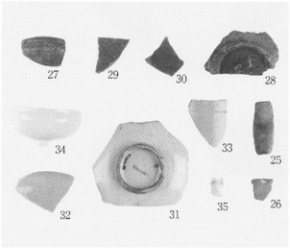
砥石（試掘，本発掘）



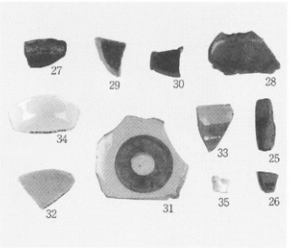
染付磁　外面（本発掘）



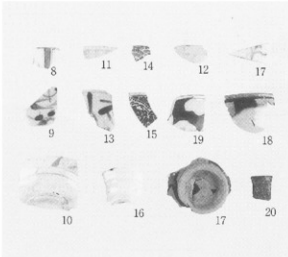
染付磁　内面（本発掘）



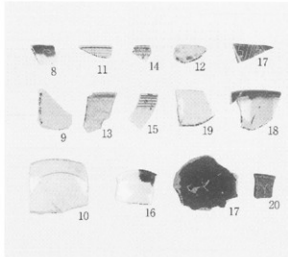
須恵器・中国産龍泉窯系青磁器・土錘
土師器・白磁　外面（本発掘）



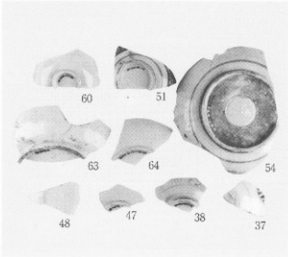
須恵器・中国産龍泉窯系青磁器・土錘
土師器・白磁　内面（本発掘）



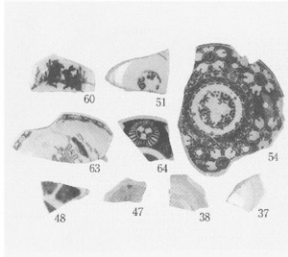
染付磁・赤絵磁・銅緑彩釉陶・鉄釉陶・種別不明施釉陶　外面（試掘）



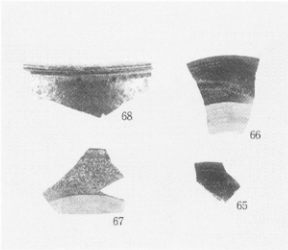
染付磁・赤絵磁・銅緑彩釉陶・鉄釉陶・種別不明施釉陶　内面（試掘）



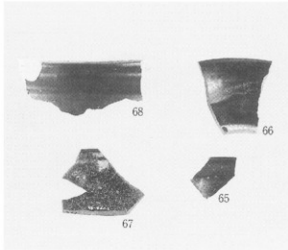
染付磁・銅緑彩磁　外面（本発掘）



染付磁・銅緑彩磁　内面（本発掘）



鉄釉陶　外面（本発掘）



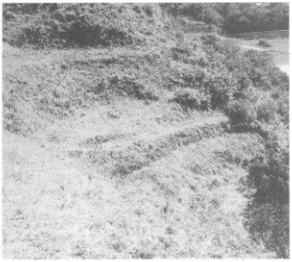
鉄釉陶　内面（本発掘）

PL.6

屋根線調査前遠景（南より）

屋根線調査前遠景（北より）

平坦部及び段状部調査前（東より）



2郭南の平坦面調査前（西より）

2郭調査前（西より）

堀切調査前（南より）

尾根線～2郭調査状況（西より）

2郭～尾根線調査状況（東より）

平坦部及び段状部調査状況（南東より）

平場状遺構B西端部調査状況（東より）

調査区全景（西より）

調査区全景（上空より）

調査前遠景（東より）

山裾部調査前（試堀）

山裾部トレンチ掘削状況（試堀）

山裾A・Bトレンチ完掘（試堀）

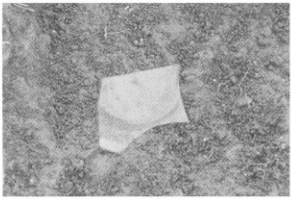
1郭（a）トレンチ設定（試堀）

土塁残存状況

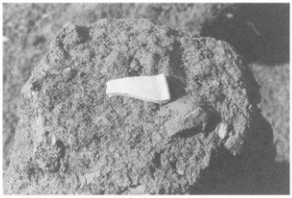
3郭・4郭（f・g）トレンチ設定（試堀）

1郭（c）トレンチ完堀（試堀）

1郭（a）トレンチ完堀，ピット検出（試堀）


ピット内遺物出土状況（試堀）

3郭（f）トレンチ礫検出状況（試堀）


遺物出土状況（試堀）

平坦部5（i）トレンチ完堀（試堀）

平坦部7〜8（j）トレンチ完堀（試堀）

1郭土塁（d）トレンチ完堀（試堀）

1郭土塁（d）トレンチ完堀（試堀）

段状部先行トレンチ完堀（南より）

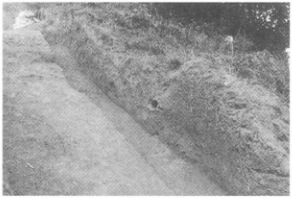
段状部先行トレンチ完堀（東より）

段状部先行トレンチ完堀（西より）

段状部調査状況（西より）

平坦部1調査状況（南より）

平坦部1南北ベルト（東より）


2郭南の調査区南端壁面（北より）

2郭南の調査区南端壁面（北より）